



このたびは印刷用『宇宙の缶詰』をダウンロードしていただき、ありがとうございます。
PDFファイルを印刷してお読みなされる際には、以下の点にご注意下さい。

△注意事項▽

パソコンの画面で読むよりも印刷をしていただく方がもちろん読みやすいのですが、A4の紙にぎつしりと文字が詰まった文書ファイルを大量に印刷すると、インクの消費量も多くなります。小説を全ページ印刷される場合には、ある程度のコストがかかることを予めご了承下さい。

その他、インクの使用量の目安や小説の綴じ方などをホームページの「勝手にQ＋A」に掲載しておりますので、是非ご覧下さい。

<http://www.kanmanabe.com/faq.php#p5>



目が覚めた。

ぼやけた視界の中で、境目のはっきりしない何色かの単純な色が混ざり合っている。

白と、青と、それとは少し違う青。

私は顔を少しだけ動かしながら、何度か短い瞬きをしてみた。

昼間。

日差しは強くない。背中にはうつすらとした熱と風の揺らぎを感じる。少なくとも寒くはない。そして顔の、おそらく頬骨のあたりに、チクチクと刺すような痛みを感じる。

——何だこれは？

その瞬間の私には、その一言を思いつくのが精一杯だった。また何度か瞬きをしてみたが、ぼやけた視界は一向に晴れる様子がない。二つの青色の違いが瞬きをするたびに変化する。頬の痛みもまばらで、つかみどころがない。そういう漠然とした感覚ばかりに捕らわれているせいだろうか、意識まで正常に働かない。次に何をしたらいいのか、全く見当がつかないのだ。体のある一面とその反対側の一面が別々の感触を捉えていて、ただその感覚だけを受け入れることしかできない状態。

風と熱。そして痛み。

私は未練がましく瞬きをするのをやめて、しばらく目をつぶることにした。目を閉じると、光を帯びたある一色の輝きが瞼一面に広がった。その輝きはじわじわと瞼の縁を越え、頬に触れ、やがて私の顔全体を包み込んだ。とても柔らかく、無害な感触だ。

そつと目を開けると、ほんの少しだけクリアになった視界の中で、吐き出した息に揺られて何かがさらさらと動いているのが見えた。

——砂？

私は腕を動かし、両手を地面について上半身を起こした。それはとても簡単な動きであったはずだが、体は私のイメージ通りには動いてくれなかった。反応が鈍く、動作が緩慢だった。おまけに肘はきしみ、肩には筋肉痛に似た痛みがある。左手の感覚はほとんどなく、手を地面についたことさえも感じない。それでも体は何とか地面から離れ、輪郭のくつきりした影が地面に薄く映った。

体が地面から離れるにつれて、あちこちから砂がこぼれた。顔に手を当てると、頬や額にめり込んでいた砂が名残惜しそうに大地に向かって落ちていった。その砂は音もなく大地に飲みこまれ、跡形もなく消えた。そしてまだうつすらとぼやけた視界の中で、私はひとつの確信を得た。それは、いま私のいる場所が途方もなく広く白い砂浜の上だということだった。

両膝を地面についたまま上半身をひねると、青い海が見えた。目が覚めたときに捉えた青色のうちの片方。そしてもうひとつの青色は、空。私はその姿勢のまま、自分のいる場所から波打ち際までの距離を目算した。五、六歩。三メートルほどだろうか。

海と反対の方角に向き直ると、遠く離れた場所に低い松の木が一行に並んでいるのが見えた。その足元には黄色い花がまばらに顔を覗かせていて、ちらちらと弱い光を反射している。私はさつきと同じ要領でそこまでの距離を測ろうとしたが、いくら考えてみても具体的な数字が何も思い浮かばなかった。ただ「遠い」というもどかしい距離感だけが頭の中でうずくまって動かない。

私は視線を一旦地面に落として右手で体重を支えながらゆっくりと立ち上がると、よろよろと海へ向かって歩き、打ち返す白い波に足をつけた。思ったより海水の温度は高く、ぬるま湯に触れたようだった。足が冷たい風にさらされていたせいだろうか。両足を海水につけると海水の心地よい温度が下半身をのぼってくるのを感じた。私はぶるぶると身震いをし、それから沖へ向けて歩いた。砂浜の傾斜はかなり緩やからしく、海面は足首の上のあたりで止まったままほとんど動かなかった。波打ち際から二十歩くらい歩いたところで立ち止まり、砂浜の方を振り返った。遠い松の木の向こうに隆々とせり上がった土地と、それをびっしりと覆う緑の草木が見えた。それは島のように見えた。あるいは細長い半島の先端だとも思うこともできた。しかし、この場所からは陸地がその先にどのような伸びているのかを知る術はない。そして何よりも問題なのは、この場所が島なのか半島の先端なのかということよりも、自分がここにいるという状況に至った経緯や成り行きといったものについて何も思いつかないということだった。

私は足元に目を落とした。足にぶつかる波の衝撃があるリズムを刻んでいる。そのリズムに合わせて、ザ、ザアという音を頭の中でイメージしてみた。それをしばらく続けていると、今度は波が少し音色を変えて、サプン、サプンと足を撫でているような気がしてきた。私は右足を前後に動かし、波を蹴った。底に溜まっている白い砂がその動きにつられて海面近くまで躍り上がった。足を砂の上に降ろそうとしたとき、ふと娘のことを思い出した。

娘のことを思い浮かべるときに、温かい空気が体の中を流れていくような心地がする。いつもそうだ。それが例え見知らぬ遠浅の浜辺に突然と立ち尽くしているような状況であってもだ。しかし今は少し様子が違った。その温かい空気が通りすぎるいつもの場所から、何かがなくなっただような感覚が私を悩ませていた。なくなっただけというよりは、抜け落ちたような感覚だ。もちろん手足や髪の毛がなくなっただけではない。確認はできないが、臓器の一部が損なわれたはずもない。もっと内在的なものだ。しかしそれは悪い感覚ではなかった。老朽化したものがみんな排出されて、新しいものが生まれようとしている、あるいは生まれ落ちたような新鮮な感覚だ。その真新しいものを得て、その扱いにまだ戸惑っ

ているといった段階の欠如感だ。これ以上の表現を思いつかないが、とにかくその奇妙な欠如感が私の意識の中に娘を呼び込んだような気がする。

もう一度足元に目を落とすと、海面近くに浮き上がっていた砂が沈んで、左右の足の甲の上でちらちらと輝いていた。まるで光を求めてやってきたプランクトンが思い思いにうごめいているようだった。

私は目を閉じた。

「一人なのか？」と私は聞いた。

私は答えた。

——わからない。

私は聞いた。

「娘はどうした？」

私は答えた。

——わからない。

私は聞いた。

「娘のことは覚えているか？」

しばらく考えてから私は答えた。

——覚えている。

私は聞いた。

「家族のことは覚えているか？」

私は答えた。

——覚えている。

私はもう一度聞いた。

「お前は、一人なのか？」

ザ、ザア。

目を開けると、足の上の砂は全部流されてしまっていた。そこにあるのは私の足の白い皮膚だけだった。

私は砂浜に戻ると、自分の名前を思い浮かべてみた。

向笠博史。

それが私の名前だ。簡単だ。こういう場所で自分の名前を意識して頭に描いてみると、それがとても空虚で不安定なもののように思えるのが不思議だ。年齢もそうだ。四十二歳。四十二年間という時間が自分に何を与えてくれたのだろうかと考えると、わけもなく不安な気持ちになる。

次に私は自分が身につけているものに目をやった。身につけているものといっても、白い無地のＴシャツとカーキ色のハーフ・パンツとベルトだけで、他には何も持っていない。ハーフ・パンツの左右のポケットの中には同じ位の量の砂が入っていた。私はポケットをひっくり返し、その砂を残らず出した。手についた砂を落とそうと、パン、パンと手をはいた。ついでに、左右の手のひらを顔に近づけて眺めた。それは見慣れた自分の手に間違いなかった。手を見ていると何となく他の場所が気になって、腕を上げて肘と二の腕の裏側に目をやり、Ｔシャツを胸のあたりまでまくり上げて腹とわき腹を見た。それから膝、すね、足の甲へと視線を落としていって、最後に片足で立って足を持ち上げ、足の裏も確認した。目立つ傷はなかった。体のあちこちを軽く動かしてみたが、左の手首に軽い痺れを感じる以外は、特におかしいところはない。目が覚めて最初に起き上がったときに感じた肩の筋肉痛もそれほど深刻ではないようだ。肩をぐるぐると回しているうちに、それほど痛みは感じなくなった。念のために屈伸運動を試みたが、体の動きは思ったよりも自然だった。

「さて――」

私はそう呟いてから、それが目が覚めてからはじめて口にした言葉だということに気がついた。

さて。

その響きには不思議な趣があった。古墳の土中深くから響いてくる古いまじないのようにも聞こえる。

さて、さて。

それから私は改めてあたりを見回した。松の木と私の間にはかなりの面積の砂浜が広がっていた。野球のグラウンドをたっぷり一面は取れそうな広さだ。それも小学校の運動場のような広さではなく、外野を抜けるとどこまでもボールが転がっていく河川敷の野球場のような広さだ。砂浜は角の丸い正三角形が逆さまを向いたような形をしていて、その形が野球のグラウンドを連想させたのだと思う。私が立っているのがホーム・ベース上だとすれば、松の木があるのはバック・スクリーンといったところだ。

私はもう一度海へ戻り、今度は海水を両手ですくって顔にかけた。閉じた唇の隙間からそっと舌を出すと、薄い海水の味がした。海水が薄いのか、私の味覚が狂っているのか、あるいはその両方が原因なのかはわからない。海水で顔を何度か洗うと、今度は濡れた顔を天に向けて息を吸い込んだ。太陽はそのギラギラとした輪郭を雲の裏に隠し、海水と同じような生温かい光を大地に注いでいた。

振り返って陸地に目を向けてみると、扇状に開いた長い海岸線が緑の大地に向かって真っ直ぐに延びているのが見えた。海岸線は数百メートル先で唐突とも言えるほどの陸地の隆起に飲まれ、そこから始まる大地の稜線は青白い空を背景に細長い台形を描いている。

台形の真ん中あたりは少しへこんでいて、二つの低い台形の山を左右から無理やりくっつけたように見える。もしここが島だとすれば、ぐるりと一周するのに三十分とかからない大きさだろう。

私はぬるい海面をバシバシと蹴りながら浜辺に戻ると、今度は腕組みをして考えた。

まず疑いようがないのが、私は今、見知らぬ浜辺に一人で立っているということだ。目が覚めてから約五分間、人の姿を見なかったし、声も聞いていない。人どころか、海鳥の鳴き声さえも聞いていない。聞こえるのは静かな波の音だけだ。それもただ静かな波の音ではない。必要以上に静かなのだ。海に入って足をつけていたときにははつきりと聞こえた波の音も、こうやって浜辺に立っているとほとんど聞こえない。鼓膜に残った振動の余韻が波の音を錯覚させているような気さえする。私は少し不安になって、また海に近づいてみた。波打ち際の一步手前で地面に膝をついて、波の音に耳を傾けた。

ザ、ザア。

確かに海は鳴っていた。しかし奇妙だった。それはとても奇妙な音で、私がしているのはとても奇妙な仕草だった。

試しに波の音を思い浮かべてみた。しかしわざわざ思い出す必要もなかった。つい今しがた、波の音を耳にしていたからだ。私は波の音を覚えていた。でもその音の記憶は普段とは少し様子が違うように思える。私は改めて「波の音」を思い浮かべてみた。今度は少し深い部分に意識を飛ばすように努力した。でもやはりうまくいかない。私が取り出す「波の音」は真新しく、どこことなく不恰好だった。

私はいま何かを思い出そうとしている。「波の音」をきっかけにして、他の何かを思い出そうとしている。あるいは連想しようとしている。「波の音」が何かを授けてくれるという予感がある。ただ、その先にあるものが漠として見えない。そして明らかな問題がひとつあった。それは思い出すものが何もないかもしれないということだ。それはとても孤独な作業だ。魚のいない釣堀に釣り糸を投げ入れているようなものだと考えればいい。プランクトンがいくらいても、魚がいなければ魚は釣れない。

「それにしても」と私は心の中で呟いた。

——やはり奇妙だ。そう思わずにはいられなかった。例えば、この場所に自分がいる理由について考えてみる。思い出せないのだから試しに仮説を立ててみるしかないが、もし何かの事故に巻き込まれて遭難したとする。そうすると奇妙なのは、体の状態だ。遭難した私は海をさまよい、この浜辺にたどり着き、何事もなかったように砂浜を歩いている。肩の痛みも、筋肉痛と呼べるようなものではないように思う。それに髪の毛には海水や砂にまみれた形跡がない。まるでシャンプーで洗髪したばかりのようだ。着ているものも若干砂をかぶったくらいで、これといって汚れてもない。遭難して浜辺で目を覚ましたばかり、という状況を理性的に想像すればするほど、「遭難した」という仮定が間違っていると思わずにはいられなくなる。

例えば私が誘拐されたとする。そうすると今度は置き去りにされたのが砂浜だというのが奇妙だ。人目につかない場所に監禁されるのならともかく、ここが島であろうと半島の先端であろうと、たまたま通りかかった船や飛行機が私を発見する可能性は決してゼロではない。もしここが船や飛行機の絶対に近寄らないような孤島であったとしても、人質にとられたのだとすれば、少なくとも死なない程度の食料が与えられるはずだ。しかし私には食料はおろか、水さえも与えられていない。このままだと私は一週間もしないうちに餓死するに違いない。「人質を生かしながら隠す」という目的のためにわざわざこの場所が選ばれたとはやはり考えにくかった。

そこまで考えて、ふと私は人間というのはこうやって途方もない状況に追いこまれると、とりあえず腕を組んで何かを考えてみる生き物なのだなと思つた。泣いたり叫んだりする前に、とにかくまず考えるのだ。理性的であるというのはこういうことなのだろうか。もしこれが生命の危機に瀕するような状況であれば、もっと動物的な反応を見せたかもしれない。しかし現状は違う。海はあまりにも美しく、砂浜はあまりにも清らかだった。そして私はもうすでにここが島であることを確信していた。ここがどこかの大陸と陸続きの場所ではないことを、空や海や砂浜や私の勘が告げていた。あの山の向こうに棧橋やアイスクリーム屋が並ぶ賑やかな通りなどあるはずがない。ここは孤島で、私は一人。そして私にとつての最優先課題は、島を探索して水と食料を確保することなのだ。

私はため息をついた。ため息をつくとき、気持ちが少し楽になった。そして浅い海の底に積もった砂を踏みながら砂浜に戻ると、松の木のある方角へ向かつて歩き始めた。

砂浜に落ちた松の葉が見える場所まで来たところで、自分が裸足であることに気がついた。裸足だということには気がついていたが、裸足だということ自体に何か問題があるとは思わなかったのだ。振り返って波打ち際を見渡したが、何かが打ち上げられた様子はなかった。考えてみれば、靴どころか流木や海藻さえ見当たらないような美しい浜辺なのだから、私の靴が二つ揃って都合よく落ちていようはずもない。私は靴のことはあきらめ、つま先で立って点々と落ちた松の葉をよけながら木陰の中を歩いた。足の指の間にひんやりと湿った砂が入りこんでくのが心地よかった。

木陰を抜けると砂の上に浮いていた松の葉は申し合わせたように姿を消し、代わりに豊かな大地が姿を現した。小さな植物や様々な形の砂や小石を含んだその土地は、砂浜から五十センチほど高い位置にあった。黄色い花をつけた植物が肩の高さあたりに咲いていて、明るい光を小さく反射させていた。その不毛な砂浜から豊穡な土地へのダイナミックな変遷は、生物の進化を思わせた。

田んぼからあぜ道にのぼるような気持ちで軽やかにその段差を越えると、目の前に細い小道が現れた。小道は草木を避けながら、島の奥へと続いていた。雲の陰から顔を出した

太陽の熱を首筋に感じながら、私はその上をべたと歩き始めた。

小道の上は不思議なくらい小石が少なく、裸足でも何とか歩くことができた。誰かがきれいにほうきで掃いた後のようだった。しばらく歩くと、はじめは平坦だった道が次第に傾き、坂道になった。道端に咲いていた植物は少しずつ姿を消し、代わりに低い松林が現れた。

木陰の中を五分ほど歩くと、坂道が終わって土地が平坦になると同時に松林が途切れ、ぱっと視界が開けた。一息つこうと立ち止まったところで、前方に何かが見えた。それは小さな小屋のように見えた。

近づくにつれ、その小屋がわらぶき屋根の丸太小屋だということがわかった。丸太小屋の周りには不揃いな雑草がびっしりと生えていて、歩いてきた小道はその雑草を迂回するように左右に分かれている。小屋の向こう側にはさっきと同じような松林が見えた。私は小道を外れ、大きく足を上げて雑草を踏みつけながら真っ直ぐに小屋に向かった。

小屋の正面には壁と同じように木を組んで作った重そうな扉があったが、扉には内側から鍵がかかっているらしく、押しても引いても開かなかった。ドンドンと扉を叩いてみたが、反応はない。小屋の裏側にもまわって見たが、他には窓ひとつなかった。

私はもう一度小道まで戻り、遠くからその丸太小屋を眺めてみた。小屋はほぼ正方形で、屋根の高さはそれほど高くない。人が住んでいるというよりは納屋のように見える。屋根の上によじ登ろうと思えばできなくもない気がするが、不安定そうな屋根の上を歩くのは危険かもしれない。扉の鍵が外側にならないのが気になるが、あまりにも長い間使わなかったせいで、どこかが錆びて開かなくなっただけなのかもしれない。それとも体当たりでもすれば案外あっさりと開くのだろうか。そんなことを考えながら、ふと小屋の裏手に目をやると、松林の奥の方がうつすらと光っているのが見えた。

雑草を踏み越え、小屋の裏手へまわると、躊躇なく松林の中に足を踏み入れた。小石や松の葉がたくさん落ちた足元を気にしながら林の中をゆっくりと進んだ。歩きたびに林の奥から洩れてくる明かりがじわじわと広がっていき、木の幹が後ろからスポットライトを浴びたように光りはじめた。そして数十メートル先で林が途切れるという所まで来たところで、私は立ち止まった。

林の向こうには、水平線があった。その上に空が、下には海が広がっているのがはっきりと見える。砂浜で最初に目が覚めたときと同じ、二種類の青だ。そして松林を抜けると同時に歩いてきた地面は何の余韻もなく終わり、絶壁となって海に落ちていた。

——やっぱり島か。

私は思わず呟いた。

遙か下方には、海がむき出しの大地の層に向かって白波を叩きつけているのが見える。ドン、ドンという音が波の動きよりかなり遅れて私の耳に届く。曖昧な海と空の境目へ向けて細かくちぎれた雲が不規則に並んでいたが、海の上に他の島の姿は見当たらない。

私はその場に座りこみ、その眺めと音に体を預けた。心臓の音が絶壁の底で鳴る波の音に呼応しているのがわかった。心臓のある場所が体の表面に少しずつ近づいているような感覚さえあった。冷たく吹く風の中に何か別の音を見つけようとすればするほど、その波と心臓の音が強調されていく。

無人島。孤島。遭難。空腹。救助。脱出。

とつさに頭をよぎったのは、そういう言葉ばかりだった。

——これは絶望的だな。

それからしばらくの間、私はその場で膝をかかえたまま波や風の音に耳を傾けた。ときどき目をつぶり、瞬きをし、深呼吸をし、口笛を吹いてみたりもした。しかしいくら時間が経つても、何かが好転する様子はもちろんなかった。そしてこうしている間にも、私の中で確実にエネルギーが消費されていくということに気がつき、さらに絶望的な気分が襲われた。

娘。

家族。

家族？

そう、私は一人ではない。

私には、家族がいる。

家族のことを思い浮かべると、ほんの少しだけ心が軽くなった気がした。私はずっと立ち上がり、海と空に背を向けた。目の前に広がる薄暗い林は、さっきよりも少しだけ影を濃くしたように感じる。私は背中をびんと伸ばすと、林の中に向かって歩き始めた。

林を抜けて丸太小屋の前まで戻ると、もう一度小屋を一周してから正面の扉を何度か叩いてみた。もちろん反応はなかった。

目の前の人為的な物体を前に、私は混乱していた。一言で表現するならば、あまりにも不釣り合いなのだ。島の無垢な美しさに比べ、この小屋のあまりにも世俗的な存在感。もちろん小屋がみつともない造りをしているという意味ではない。ただ単純に不釣り合いなのだ。不自然なのだ。風情があると解釈するのは無理があるし、意味なんてそもそもないと考えられるのも乱暴だろう。この小屋には何かがあるが、今はまだ私にはわからない。そう考えるのが自然だった。

私はもう一度ため息をついた。気持ちはずれなかったが、少なくとも次へ進む決心はついていた。しばらくその場で小屋の手前で枝分かれした道のどちらを行こうか悩んだ末、道幅の広い右の道を選ぶことにした。

道の様子はさっきと変わらなかった。裸足でも平気で歩けるくらいきれいな道だ。道の

左側には丸太小屋の裏から続く松林があつて、林の向こうの空を切り取る木の幹が影絵のように見えた。右側には原色の花をつけたたくさん種類の植物が生えていて、中には見たことのないものも混じっていた。私自身の緊張感を除けば、島の景色は平和そのものだった。

しばらく歩くと道が下り始め、また松林が現れた。島の東の斜面まで来たのだろうと私は思った。「東」というのはおおよその方角だ。絶壁の上にいたときに太陽が後方の高い位置にあつたことで、絶壁のある方角を北、その反対の砂浜がある方角を南と決めることにしていた。名前や年齢のように、少しでもそういう具体的なものを思い浮かべておいた方がいい気がしたからだ。

その坂道は気まぐれに曲がりながら、少しずつ海へ近づいていた。私はいつからか裸足で歩くことを心地よいと感じ始めていた。土の温もりや冷たさ、湿り気、小石や砂の存在感、草の柔らかさ、そういうものを私の足はとても敏感に感じ取っている。はじめは感じていた足の裏の痛みも、ほとんど感じなくなった。大地を直に踏みしめているという感動さえあつた。

足元を見ながら歩いていると突然松林が終わり、目の前に海と白い砂浜が現れた。その眺めは、まさに絶景だった。白い波の立った海は永遠に続く宇宙の深さを感じさせ、その海と交わる空の青さはまさに宇宙そのものだった。砂浜の白色があまりにも均一なせいで、白い絵の具が海に流れ込んで海水を侵食しているようにも見える。その強烈なコントラストを和らげようとぱちぱちと瞬きをしていると、その絵の具の中で何か黒いものが動いたような気がした。手を目の上にかざし、太陽の光を遮って目を細めると、砂浜の真ん中に誰かが倒れているのが見えた。

「おーい！」

そう叫ぶと、私は駆け出していた。

02



僕がその家をはじめて訪れたのは、九月最後の水曜日の夕方だった。低く落ちた太陽のせいで、僕の影はアスファルトの中にほとんど全部溶け込んでいた。

その家は駅から歩いて十五分くらいのも、もの静かな住宅街の一角にあつた。夕陽が連れてきたオレンジ色の静けさが、あたりの音という音を誰にも気づかれずにひっそりと飲んでしまえるような場所だ。そこでは人工的な喧騒は長い影の中に消え、寡黙な闇が次第に姿を現す。

僕は門から二、三步下がったところに立って、その家を眺めてみた。門に向かって左側には車庫があった。車庫には頑丈なシャッターが下りていて、かなり幅の広い車を停められそうに見える。門から玄関の扉までは五メートルほどの距離があり、左には車庫に続くドア、右には短い縁側と小さな植木がいくつか置いてあるのが見える。二階には小さなベランダのついた部屋が二つあり、屋根の上からはややこしい形をしたアンテナが突き出ている。僕は表札を確認し、それからインターフォンを押した。

ピン、ポーン、というもったいぶった間の音が家の中に響き、続いて「どうぞ」という明るい声が返ってきた。僕は門を開け、後ろ手でそっとそれを閉めて玄関の扉に向かって歩いた。ドアノブに手をかけた瞬間、扉が向こう側から引かれて開いた。

「こんにちは」そう言っただけで扉の隙間から顔を覗かせたのは母親だった。僕は「はじめまして」と返事を返した。正直に言えば、彼女は想像していたよりもかなり若く見えた。昨日電話で聞いた声はどちらかと言うと暗く、ぼそぼそと喋るせいでよく聞き取れなかった。だからひどくくたびれた母親を想像していたのだが、実物はその予想を大きく裏切った。「どうぞお上がりになって下さい」彼女はそう言っただけで扉に手をかけたまま頭を下げた。僕もつられてその場で頭を下げた。

玄関には彼女が履いていたサンダル以外に靴はなく、見たこともないような大きな靴箱が玄関の壁に埋まっていた。たくさん靴が整然とかかとを並べてその中に収まっているのが想像できた。靴を脱ぎながらその靴箱を見ていると、彼女が「スリッパをどうぞ」と言っただけで、背筋をぴんと伸ばしたスリッパを僕の足元に並べた。

僕は玄関から続く廊下の右手にある来客用のリビングに通された。「お掛けになって下さい。いまお茶をお持ちしますから」と言っただけで彼女は僕を一人部屋に残し、廊下の奥へ消えた。

真っ先に目に飛び込んできたのは、黒い皮張りの巨大なソファとガラス・テーブルの上に置かれた純白のレースの編み物だ。部屋の中に置かれているその他の家具も、どれも上等なものばかりだ。ソファに小さく収まった体を持て余していると、彼女が戻ってきた。

「急にお呼びだとして本当に申し訳ありません」

そう言っただけで彼女はソーサーに載った青と白の唐草模様の紅茶のカップと、豪華なクッキーをテーブルの上に並べた。カッカツとテーブルが鳴る音がやむのを待ってから、僕は「またま今日は空いていたものですから」と言った。

「本当に助かります。お口に合うかどうか分かりませんが、どうぞ召し上がってください」彼女は紅茶とクッキーを勧めながら、とてもはきはきと喋った。電話で聞いた声とはまるで別人のようだ。

「いただきます」

僕はクッキーを半分かじり、紅茶を二口飲んだ。口に合おうが合わまいが、僕はこういう場ではどんなものを出されても必ず少しだけ食べて、あまり食べ過ぎないようにしてい

る。それから、短くても必ず何か感想を言うようにしている。それは礼儀やマナーというよりは、習慣に近い。僕は「美味しいですね。綺麗なカップですね」と言って、もう一口だけ紅茶を飲むと、「それでは早速ですが」と断り、仕事にとりかかった。

「まず最初に、契約の内容をもう一度確認させて下さい」

僕がそう言うと、彼女は「はい」と言って、小さく頷いた。

「曜日は木曜日と金曜日、午後五時から二時間。その間に休憩は十分。一回の授業で六千円ということですが」

「はい、問題ありません」

「それではその条件とあわせて、昨日お電話でお話できなかった詳しい内容がこの契約書に書いてありますので、お読みになった上で、最後にご署名をいただけますか」そう言っていて僕は彼女の前にホッチキスで綴じた薄い紙の束を差し出した。「要点をまとめると、期間とはとりあえず一ヶ月。その分の授業料は前払い。それ以後は双方合意のもと延長可能。ひと月単位での解約が可能。必要に応じて若干授業を延長することもあります。超過分については授業料は請求しない。どちらかの事情で授業ができないときには、別の日に振り替え授業をする——」

そうやって僕はいつものペースで話を進めた。まずはこのプロセスをちゃんと踏んでおかないと、その後がうまく続かない。お互いの距離を確認しておくこの作業が、後々のトラブルを回避するために重要になってくる。自分はプロの家庭教師で、あなたは顧客である。そのことをまずお互いに確認しあうのだ。そのためには文書を使った形式的なやり取りが一番有効だ。平たく言えば、ビジネス・ライクにいく、ということだ。

彼女が契約書に目を通している間、僕は契約書のコピーをぼうつと見ながら昨日の電話のことを思い出していた。電話が鳴ったのは夜の十時を過ぎた頃だった。

「もしもし。——はい、そうです。——ええ、少々お待ち下さい。——それではいくつか質問させていただいてよろしいでしょうか。まずお子様の学年とご希望の教科ですが——はい。——高校三年生、英語と日本史。——はい？ ええ、そういうことになります。ですが、そのあたりはかなり融通がきますから、ご心配いりません。実際に授業を始めてからでも大丈夫です。ええと、それからご希望の曜日ですが、今のところ——木曜日と金曜日、ですか。——ええ、そうですね。そう思いますが、授業日が二日続いたからといって、これといって問題は——大丈夫でしょう。それと、ご希望の時間帯は——五時からですね。間に十分の休憩を挟みますので、授業が終わるのは七時過ぎです。ご住所はどちらになりますか？——そうですね。近くですので、大丈夫です。では、お名前をフルネームでいただけますか？ お母様と、お子様の両方です。——ノリコ様とレミ様、ええと、漢字はどういう字を？——記号の記に子供。めずらしい読み方ですね。はい、それからお子様の——命令の令に美しい。わかりました。それでは——はい？——どうぞ。——え

え、そうです。——そうなんです。もちろんです。少し長くなりますが、よろしいですか？
まず、簡単に申し上げます、責任感です。もちろん教える能力に差があるのも確かですが、アルバイトの家庭教師の方に一番欠けているのは仕事に対する責任感です。私も昔、学生時代にアルバイトで家庭教師をしていたことがありますが、やはり学生を雇って派遣するというシステム自体に問題があるのだと思います。代わりがいくらでもいるから、すぐに辞められるという雰囲気、無責任な中途解約につながるのです。生徒と気が合わない、なかなか成績が上がらない、それどころか、夕食を出さないからなんていう理由で辞める学生もいます。——ええ、本当です。もちろん派遣会社には、そんなことは言いません。やむを得ず辞めなければいけないような説明をするんです。試験勉強が忙しいとか、サークルの活動日が変わったとか、就職活動が始まったとか、まあ、そんなところです。——本当に。ひどいものです。でも確かに代わりの先生はいくらでもいますから、授業が途切れることはありません。次の週には新しい先生が来るんです。ですが、もちろん授業の引き継ぎなんてまともにできませんし、生徒さんだって新しい先生に慣れるまでに時間がかかります。無駄が多いんです。——そうなんです。結局のところ、一人一人に自覚がないんです。責任感がないんです。その点、我々プロの家庭教師を雇うとなれば、授業料は若干上がりますが、仕事に関する責任感なら学生のアルバイトとは比べようありません。我々はそれで生活をしているわけですから、生徒さんを失えばそれが直接減収となって跳ね返ってきます。ですから必死で教えます。成績を上げるために努力をします。途中で投げ出したりは絶対にしません。万が一授業の継続ができなくなったとしても、必ず代わりに別のプロの家庭教師を責任もって紹介します。——まあ、それはおっしゃる通りですが、私はこうやって働かせていただいてもう五年になりますが、そういったケースは一度も——はい。ですからご安心下さい。——そうです。そのチラシに書いてある通りです。——はい、そう言っていただければ——ええ、そんなに無茶な額ではないと思います。派遣会社を通した場合でも相場は二時間五千円くらいですから、それより少し高いだけだと思っただければ——はい、ありがとうございます。その代わりと言っては何ですが、交通費や教材等、その他の経費は一切いただきませんので。——それでは授業を始める前に、一度お母様とお会いして少しお話ができればと思うのですが——明日ですか。はい、大丈夫です。それでは明日、五時に。そうしましたら、失礼ですが、もう一度正確な住所とお電話番号を——はい。わかりました。それから、授業にあたってひとつだけお願いがあるのですが、なるべく部活動や他の用事で授業を休ませないようにして下さい。振り替え授業があるとはいえ、『あの先生なら休んでも大丈夫』という馴れ合いが一番勉強の妨げになります。家庭教師は子守りや遊び相手ではないというところを、お子様だけでなくて、お母様の方にもどうかご理解いただきたいのです。——そうです。ありがとうございます。——それでは明日、五時にお伺いしますのです。——いえ、こちらこそ。失礼いたします」

電話の内容はいつも通りだった。ほとんどワン・パターン化していると言ってもいいくらいだ。僕はこの説明をしているときが一番饒舌になる。

契約の内容に関して言えば、授業が二日続くこと以外はいつもと何も変わりはない。学習の要領という点から言えば授業日が続くのは好ましくはないが、先方からの希望とあれば断る理由はない。それに実を言えば、僕にとつてその二日が埋まったのは都合がよかった。先月、別の二件の契約が切れたおかげで、ちょうど木曜日と金曜日が空いていたのだ。これでまた月曜から土曜まで、毎日仕事があることになる。六千円×六日。それが四週間で十五万円前後の収入。それと通信教育の採点などの他のこまごました仕事を合わせれば、ちょっとした収入になる。

そんなことを考えていると、目の前で契約書を手に固まっていた母親がすつと顔を上げて、こちらを見た。

「はい、問題ありません」

「それでは最後のところにご署名を」そう言って僕は最後のページの一番下の部分を指差した。彼女は机の上に置いてあったボールペンを取り、そこにきれいな行書体でサインをした。

「他に何か質問があれば」

「ええ、大丈夫です。本当に交通費はよろしいのですか？」

「結構です。いつもいただいていませんし、ここならうちから歩いて来れる距離ですから」

「そうですか。助かります」そう言って彼女は少し頭を下げた。「よろしければ、お紅茶、もう少しいかがですか？」

「ええ、いただきます」

「インド産ですよ。親しい友人からもらったもので。すぐ淹れてきます」

彼女はそう言ってカップを持って立ち上がると、静かにリビングを出て行った。その後ろ姿を何気なく見ていると、僕はふと学生のように通っていたある家のことを思い出した。

それは大きな一軒家だった。門の前に立つと、必ず番犬がひと吠えするような立派な家だった。僕がインターフォンを押すと番犬は鳴くのをやめ、しばらくすると母親が玄関から出てきて門を開けた。彼女について何かひとつだけ語るとすれば、彼女はとても太っていた、ということだ。玄関から門のところまでのつそりと歩く彼女の姿は、まさに象のようだった。門を開けるときにだけ動いているのではないかと思うほど、怠惰という言葉がしつこく降り積もってきたような体だった。歩きたびにぶるぶると震える顎のたるみを見ながら、僕はいつも明るく「こんにちは」と彼女に声を掛けた。彼女はいつも低い声で「く、くんには」と返事をした。その不気味な音を頭から追い払うために、僕はもう一度はつきりと「くんには」と言い直さなければならなかった。

彼女は門を開けると僕を招き入れ、いつもガンツという信じられないくらい大きな音を立てて門を開めた。僕は先に玄関にたどりつくと、玄関の扉を開けて彼女が戻ってくるのを待った。彼女は手を前後に振って「いいから先に入んなさい」と合図することもあれば、手のひらをこっちにに向けて、「ちよつと待って、すぐ行くから」と合図することもあった。その二つの合図をちゃんと見分けられるようになるまでには何カ月かかった。

子供部屋は二階にあつて、僕が行くといつもその子は行儀よく机に座っていた。言うまでもなく、彼女も母親と同じように太っていた。子供用の勉強机では、僕と彼女が並んで座ることはできなかった。机が狭すぎたし、彼女が大きすぎたのだ。僕は高さの変えられるオフィス用の回転椅子を貸してもらって、いつも彼女の左斜め後ろに座り、そこから彼女の丸い肩越しに勉強を教えた。インド象の背中に乗ったような変な気分だった。

授業が終わって帰るときになつても、母親は姿を現さなかった。「お邪魔しました」と大きな声を出しても、返事が返ってきたことがない。その代わり、玄関に入って右手のリビングのドアの向こうからバラエティ番組の作り笑いが聞こえてくるのだ。ドアに向かってもう一度「お邪魔しました」と叫んでも、返事はない。その後、変な間を置いて二階から「さよなら！　せんせ！」と叫ぶ子供の声が聞こえてくる。その流れはいつも大体同じだった。玄関にはセミが集団で殻を脱いだのかと思うくらい膨大な数の靴が転がっていて、その中から自分の靴を二つ探し出す必要があつた。そしてそれを持って玄関の扉の外まで歩いて出て、ようやく靴を履き、広々とした庭の気配を背中に感じながら門に向かって歩くのだ。そういうえばその間、番犬は一度も吠えたことがなかった。僕のことをわかつていて吠えなかったのかというと、そうではない気がする。もう寝る時間だったのか、あるいは誰かが散歩に連れて行く時間だったのだろうか。

その家には結局一年近く通つたように思う。変わった家庭だったが、平凡といえば平凡だった。母親がいて、子供がいて、門と庭があつて、犬がいる家庭だと考えれば、大して珍しいものではない。

彼女とその母親とその家について僕が覚えていることは他にはない。名前も忘れたし、家がどこにあつたのかも忘れた。犬がどんな種類だったかも忘れた。通わなくなった理由さえも忘れた。だから、こうやってその大きな家と二匹のインド象のことを思い出す必要なんてこれっぽっちもなかったのだけれど、ただ僕はふと思ひ出したのだ。インド産の紅茶が原因なの言うまでもない。誰にだってそういうことはある。

僕がはじめて家庭教師のアルバイトをしたのは、大学二年生のときだった。親しい友人から勧められたのがきっかけだった。

「時給千五百円、交通費支給、食事付き。週に三日、二時間働くだけで月に四万円は稼げる。仕事は楽だし、嫌ならすぐ辞められる。始めたければいつでも言ってくれ。仕事はいくらでもあるから」

友人が言ったその言葉は本当だった。派遣会社に履歴書と簡単なプロフィールを送るだけで、仕事はいくらでも舞い込んできた。プロフィールには、自分の教えられる学年と科目、それに一週間のスケジュールと勤務可能なエリアを記入する。派遣会社がそれを見て、授業を希望する家庭に合う先生に連絡をする。僕は友人に勧められた通り、プロフィールには「教えられるのは中学、高校の全科目。毎日午後六時以降、市内全域にて勤務可能」と書いた。彼が言うには、「いい生徒をつかむには、はじめに選り好みしている素振りを見せないこと。こちらが選ぶのは、生徒の紹介を受けてからで間に合う」とのことだった。事実、派遣会社に登録をしてから一週間の間に十件以上の紹介があった。僕はその中から自宅に近く、時給の高いものをひとつ選んだ。それが僕にとって生まれてはじめての家庭教師の仕事だった。

それから大学にいた四年間、僕はほとんど途切れることなく家庭教師のアルバイトを続けた。週に五人以上の生徒を教えたこともあれば、同じ生徒を週に四日以上教えたこともある。気がつけば、生活の中に家庭教師のアルバイトが染み込んでいた。「家庭教師もいいが、社会勉強にならないからほどほどにしろ」と父親に言われ、他のアルバイトをしたこともあったが、どれも続かなかった。近所のファミリーストランで働いたときも、印刷工場で働いたときも、夜間警備のアルバイトをしたときも、仕事の単調さと時給の低さに嫌気がさしてすぐに辞めた。時給が高ければいいだろうと思って胡散臭いクラブでホストの真似事をしたこともあるし、人にものを教えるのが好きなのだろうと思って小さな塾の講師をしたこともある。でも結局どれも僕には合わなかった。煩雑な人間関係はもちろん、仕事を覚える手間や自分が職場で認められるまでの努力や時間が、僕には重荷だった。その点、家庭教師は違う。最初から完全に自分のペースで仕事ができるし、新しく覚えることなく何もない。自分の頭さえあればどこでも始められる。しかも職場（そう呼べるかどうかは置いておいて）では自分が一番立場が上だし、相手にするのは両親とその子供だけだから、煩わしい人間関係なんてあるはずもない。しかも大抵の場合、表に出てくるのは母親だけで、一年以上通っているのに父親に会ったことのない家庭だって珍しくない。家庭教師というのは、僕の父親が言うように「とても世界の狭い仕事」なのだ。そう考えれば、その仕事を世間の立派な社会人がやりたがらないのもわかる。家庭教師なんて、学生の暇つぶしにやらせておけばいい、そう思うのも不思議ではない。けれども僕はこの道を選んだ。大学を卒業して一年間大手の電気メーカーで働いた後、二十三歳でプロの家庭教師になったのだ。それから五年の間、ほぼ毎日どこかの家で中学生や高校生を相手に授業をしてきた。確かに収入に波はあるし、いくら働いてもボーナスは出ない。決して裕福な生活ではないし、先のことを考えれば色々な不安はもちろんある。その代わり、僕には普通の社会人からは考えられないほどの自由な時間がある。毎日映画を三本見て、本を一冊読むだけの時間がある。食事はゆっくりとれるし、満員電車に乗ることもないし、睡眠不足なんて経験したこともない。「そんなに勉強を教えるのが好きなら、教員免許を取って

学校の先生になればいいじゃない。その方が生徒をたくさん教えられるわよ」と昔の彼女に言われたことがある。でもそれは違う。僕が求めているのは、効率であり、もつとダイレクトな手応えであり、結果なのだ。

ある日ベッドの中で、僕は隣に寝ていた彼女に向かって「これはきつと天職なんだ」と言った。すると彼女は「天職ってそういうもののなの？」と言ってから黙って考え込んでしまった。明くる朝目が覚めると、彼女は寝ぼけ眼の僕に向かって「私もちよつと考え直してみろ」と呟いて家を出ていった。彼女がどんな夢を見たのかなんて、僕にはもちろんわからない。二匹のインド象が登場して、彼女に何かの啓示を与えたのかもしれない。

彼女が——記子という名の母親が——部屋に戻ってきたとき、僕はなぜか立ち上がって窓の外を眺めていた。彼女は「どうかされましたか？」と怪訝そうに聞いて、持ってきたインド産の紅茶が入ったカップを僕に差し出した。「いえ、ちよつと」と言って、僕はソファに腰を下ろして、紅茶に口をつけた。さっきとは少し違う味がした。

「娘の成績表をお出しするのを忘れていました。こちらです」そう言って彼女は小さな紙切れをテーブルの上に置いた。僕はそれを手に取ると、そこに並んでいる数字に目を通した。

「なるほど、確かに英語と日本史が弱いようですね。数学も少し」

「ええ、大体いつもその三つがあまりよくないんです」

「まあ、大丈夫でしょう。他がこれだけ良ければ、後は勉強の仕方さえうまくつかめばいいだけですから」と僕は言った。

僕は成績表をテーブルの上に戻し、クッキーをかじって紅茶を一口飲んだ。

「家庭教師をなさるって、大変でしょう？」と彼女が言った。聞き慣れた台詞だ。

「そうですね。他所のお子様の将来に関わるわけですから、もちろんプレッシャーはあります」

「プレッシャーですか？」

「ええ。でも僕にはちようどいぐらいの緊張感なんです。やりがいも感じます。それに、志望校に合格したときの生徒さんやご家族の方の喜ぶ顔を見るのが、何と言っても嬉しいですから」

「そうですか」そう言って彼女は微笑んだ。「でも、うちではそんなに緊張なさらない下さい。冬までに苦手意識のある教科の成績が少しでも上がればいいというぐらいの気持ちでおりますから。地元の大学を受けさせるつもりですし、そんなに難しい受験ではありませんので」

「わかりました」と僕は言った。「でも教えることはきちんと教えます。お母様がそういうお気持ちでも、お子さんは意外と悩んでいたりするものですから」

「そうですね」

「でもこの成績表を見る限り、あまり心配は要らないようですから、僕も気が楽です」

「ええ、そうだといいですけれど」

僕には彼女の表情が段々穏やかになっていくのがわかった。とてもいい家庭だなと思った。

いい家庭というのは、母親が余裕を持って構えていて、子供に余計なプレッシャーを与えない家庭だ。そういう家庭は教える側にとってもとてもやりやすい。逆に、試験の結果に一喜一憂し、子供だけでなく親までがピリピリしている家庭が一番やりにくい。そういう家庭に限って子供が夜遅くまで勉強するせいで学校では一日中居眠りをしていたり、親が毎朝コンビニでおにぎりやインスタントの味噌汁を買ってきて子供に食べさせたりしている。子供の勉強に必要なのが家庭環境だということを全くわかっていない。そして自分達が唯一サポートできるのが、家庭環境を整えることだということもわかっていない。親が子供に勉強を教えられるのは小学生までだ。中学生になれば、子供は自分で勉強することと覚える。自分の子供が中学校に上がったなら、後は自分が蒔いた種が芽を出すのを、ときどき水やりをしながら黙って見ているしかないのだ。

「それでは他に質問がなければ、早速明日からお邪魔するということでしょう
か」

「はい、よろしく願います」彼女はそう言って、ソファに座ったまま深々と頭を下げた。

家を出ると、あたりはもう薄暗くなっていた。僕は七時から始まる次の授業のことを考えながら、駅までの道を急いだ。



坂道を下りながら、私はその人影に向かって「おい！」と断続的に叫び続けた。私の声が届かなかったはずはないが、その人影はびくりとも動かなかった。そのせいでその人物がただ寝ているのか、気を失っているのか、あるいは聞こえないふりをしているのかわからなかった。ただ、遭難して打ち上げられたばかりという風には見えなかった。なぜならその人物がいるのが、波打ち際からかなり離れた場所だったからだ。もちろん息をしない可能性もあったが、それだけではどうしても考えたくなかった。こんな場所で死体を間近に見るようなことは御免こうむりたい、誰だってそう思うだろう。でもためらっている余裕はなかった。近づいてしまう前に何とか気がついてほしい。ただそれだけを祈りながら、私はさらに大きな声を張り上げながら、さっきよりも小石の増えた坂道を駆け下

りた。

砂浜に降り立つと、砂の凹凸に隠れてその人影が半分視界から消えた。もう一度「おい！」と叫ぼうとしたとき、丘の向こうで人影がほんの少し動いたような気がした。砂に足をとられながら大きく二、三步前に進んだところで、その人物が仰向けに寝転んで手を頭の後ろで組み、麦わら帽子を顔の上にのせているのがわかった。それを見た瞬間、私は自分が考えていたほど事態は深刻ではないのかもしれないと思った。なぜならその光景は、日焼けを楽しむ人間が集まる平和な南国のビーチそのものだったからだ。もちろんそこには私を含めて二人の人間しかいなかったが、それでも十分だった。しかし私はほっと胸をなでおろすと同時に、何かが奇妙だと感じていた。見当違いなものを無理に取り繕っているような感じがする。足を止めてしばらくその景色を眺めているうちに、その原因がわかった。それは麦わら帽子からはみ出ている手の肘の部分が砂浜と同じような白い色をしていることと、その人物が黒いミニ・スカートををはいていることだった。よく見るとそのスカートから伸びている足も、日焼けをしている、あるいは今から日焼けをしようという色にはとても見えないのだ。肌を焼くために砂浜に寝転んでいるのだとしたら、それ相応の見た目というものがある。クリームを塗りたくった肌や、そこにツブツブと張りついた砂、ビキニやサングラス、そういうものがこの光景には欠けている。私は得体の知れないエサを見つけた動物のように本能的に足音を忍ばせ、その人物をさらに観察しようと近づいた。「もうっ！」

あと三メートルという距離まで近づいたところで、その人物は突然麦わら帽子をはねのけて上半身を起こし、まぶしそうに目を細めてこちらを見て叫んだ。

「もう！ 何よ！」

あっけにとられて固まっている私に向かって、その人物はさらに続ける。

「何よあなた！ さっきから『おい、おい』ってバカみたいに叫んで駆け寄ってくるかと思ったら、急に叫ぶのをやめて足音を消して近づいてくるなんて、気味が悪いからやめて！」

そう叫んで私をにらみつけているのは、少女だった。

「もう散々！ テレビもない、音楽もない、トイレもない、シャワーもない！ 肌も髪もガサガサ！ 唯一の楽しみは寝ることなの！ それを邪魔されるのって、最低の気分！」
私はあっけにとられて彼女の顔を見つめ、しばらくしてから思い出したように「悪かった」と一言だけ謝った。

「もう！」少女は私のその一言を待ち構えていたかのようにそう吐き捨てると、また砂の上に寝転がり、落ちていた麦わら帽子を拾って顔の上にのせた。その麦わら帽子のつばのほころびを何気なく眺めながら次に何を言うべきか迷った末、結局私は黙って彼女の隣に腰を下ろすことにした。

彼女がはいているのは、黒いスウェードのミニ・スカートだった。スカートは白い粉を

かぶったように汚れている。砂にまみれたせいだろう。着ているピンクの短いＴシャツにもあちこちに、わが寄って、かなりみすばらしく見えた。Ｔシャツには外国人の女性が横を向いているモノクロ写真がプリントしてあったが、古いフレスコ画のようにひび割れていて、その女性がどういう表情をしているのかわからなかった。

「ねえ」麦わら帽子越しに青空を見上げている彼女に私は声をかけた。

「何よ」彼女は不機嫌な声を返した。

「ここはどこかわかる？」と私は言った。

彼女はその言葉に何の反応も示さなかった。私は少し質問を変えることにした。

「ここはどこだと思う？」

すると彼女は麦わら帽子の中でため息をひとつついて、それから帽子をはねのけると、またさっきのように目を細めて私をにらんだ。

「わかったから！ どうでもいいこと聞かないで！ そんなことあたしが知ってるように見えるわけ？ お願いだから黙ってて！」

「あ、ああ」

私は彼女の一方的な言葉に圧倒されながらも、よくよく考えてみれば彼女の言っていることにも一理あるなど思い始めていた。確かにここがどこかなんて、おそらく問題ではないのだろう。それについてはさっき一人でいたときによく考えたはずだったが、自分以外の人間を前にして、つい不用意に何か質問をしたくなつたのだ。それに彼女が何か事情を知っているようには見えなかった。それは彼女の言つた言葉から想像できる。ここはテレビも音楽もトイレもシャワーもない場所。そして彼女の登場が私にくらかの希望をもたらすわけではないことも確かなようだ。だからと言って、このまま引き下がるわけにはいかない。彼女には迷惑でも、これは私の生命がかかっている問題なのだ。私は目を閉じている彼女に向かって「ちよつといいかな」と断わってから、できるだけ穏やかな口調で話し始めた。

「ここは島だ。たぶん無人島だと思う。僕と君はここに流れ着いた。他にも誰かいるかもしれないけど、今はとりあえず僕たちは力を合わせなければならない。ここで仲違いをしなくても、何にもならない。だから話をしよう。君のことを話して欲しい」

すると彼女は少し短いため息をついて体を起こし、それから今度はとても長い深呼吸のようなため息をひとつついて、それから「ごめんなさい」と私に向かって言った。

「何だかすごくイライラするの。怒鳴つたこと、謝るから」

私は頷いた。

それから私たちは海の方を向いて並んで座り、何も言わず波の動きを眺めていた。海は相変わらず静かで、まるで誰かから隠れるために声をひそめたような波を打ち返すだけだった。

「いま何時かわかる？」と彼女が海を見ながら言った。

私は首を振った。「わからない。時計も財布もないんだ」

「そっか。まあいいや、あたしも同じようなものだから」そう言って彼女は立ち上がると、スカートの砂をばたばたと振り落とした。

「麦わら帽子があるじゃないか」と私が言うと、彼女は手に持っていた麦わら帽子を見つめてから、それではたばたと顔を扇いだ。

「そうだね。ないよりはいいかも」と彼女は言った。

「ないよりはいい」と私は言った。「たぶんだけど、昼過ぎだと思う」

「どうして？」

「僕の思ってる方角が北なら、もうすぐ三時だ」

「午前中ってことはない？」

「ないと思う。砂が温かいから」

「そう」と彼女は言った。

私は空を見上げ、太陽の位置を確認した。頂点から四十五度以上傾いたところにいる。まばらに浮かぶ雲は、夏特有の色と形をしている。もしくは夏を引きずった初秋、少なくとも冬ではない。もちろんここが日本近海だと仮定しての話だ。

「あのさ」彼女は麦わら帽子を扇ぐ手を止め、私を見下ろして言った。「これって、どういうことだと思う？」

「何が？」

「これよ。この状況のこと。ここであなたとあたしが二人でいるっていう状況のこと。これってどういうこと？ あなたも何もわからないでしょ？」

私は頷いた。

「わからないどころか、訳がわからなさすぎてあきらめなくなるね。目が覚めてから十分は経ったと思うけど、何も進歩してない」

「進歩？」

「そう、進歩なし。仮説ばかりが増えて、どうしようもない。君がいたっていうこと以外は、どちらかと言うとネガティブな情報ばかりだ」

「仮説っていうと？」

「色々と考えてみたんだけど」私がそう言うと彼女がちらっとこちらに視線を向けた。「例えば『遭難説』。船が沈没したか飛行機が墜落したか何かで、この島に流れ着いたとか」

「それならあたしも考えたけど」

「でもほら、この格好を見ると——どうもおかしい」

「どういうこと？」

「きれいなんだ。汚れてない」そう言って私は自分が着ているTシャツやハーフ・パンツを見た。

「そうだね」と彼女は言った。「あたしのスカート、少しは汚れてるけどたぶんここで寝てたせいだし。それに目が覚めたときにはそんなに汚れてなかった気がする」

私はうんうんと頷いて見せた。

「他には？」

『人質説』でも、これもいまいちだ。無人島に人質をかくまうなんて聞いたことがない」
「確かに。場所がちょっとね」

「うん」と私は相槌を打った。「あ、いま思いついたんだけど、『流刑説』ってのもある」
「ルケイ？」

「島流し。昔あっただろう」

「あたしたち、犯罪者だってこと？」

「あり得なくもない」

「あなた何やったの？」

「何もやってない——と思うよ。でも覚えてないから何とも言えない。ああ、それから国家戦略レベルのトラブルに巻き込まれた可能性もあるな」

「どういうこと？」

「核弾道ミサイル開発の秘密を知った研究者を島流しにしたとか、実は僕たちはロシアの特殊工作員で、何かのミッションの途中だとか」

「うーん」と彼女は首を傾げてうなづいた。「本当に覚えてないんだね、どうしてここにいるのか」

「覚えてない」

「そっか。残念だけど、あたしも覚えてない。全然覚えてない。あたしだって同じようなこと一応は考えたんだよ。でも考えれば考えるほど頭が混乱しちゃって。だからこうやって寝てるの。寝るしかないじゃない、こういうときって」

さっきまで彼女が寝ていたあたりの砂が、月のクレーターののように丸くへこんでいた。

「それにしてもひどい顔してるね」と彼女は私の顔をまじまじと見て言った。

「顔をちゃんと洗ってないだけだ。髭はどうしようもない」

「あなた、もしかして凶悪犯ってこと、ないよね」

「それはない。そんなに度胸のある人間じゃない」と私は言った。「そんなこと言ったら、君の方こそ怪しい。最近はティーンエイジャーだって立派な犯罪を犯す」

「立派な犯罪って何よ、ひどいじゃない」と彼女は言った。「ティーンエイジャーって、あたしいくつに見えるの？」

「さあ、十五、六かな」私は正直に言った。

「ふうん」と彼女は言った。「ねえ、あたしもひとつ思いついたんだけど、『人体実験説』っていうのはどう？　ね、ほら、そういう話ってよくあるでしょ。島のあちこちにカメラが仕掛けてあって、それを頭のおかしくなった博士たちがモニターしてるの。ふむふむ、

そうなりますか、ああ、そういう行動に出るんですね、こういう場合は、なるほどお、興味深いですなあ、とかなんとか言って、いちいち分析するの、あたしたちの行動を。たぶんこういう状況に置かれた男女がどんな行動をするのか調べてるんじゃないかな。気が狂って泣き叫ぶのか、助け合って脱出するのか、殺し合いを始めるのか、それともほら、魔が差して——とか、さ」

「なるほど」そう言って私は立ち上がると、彼女の隣に立って腕を組んだ。

確かにそれはあり得る。あり得るところか、一番可能性が高いような気がする。実験の一環で何かの薬を飲まされて、記憶の一部を失ったのかもしれない。

「ひとつ聞いていい？」と彼女が言った。私は彼女の顔を見た。「あなたが嘘ついてるってことはない？」

「え？」

「あなたがその博士の一味だってこと、ない？」

私は一応考えてみる振りをした。もちろんそんなはずはないが、確信があるわけでもなかった。

「いや、たぶんないと思うな」

そう言うのが精一杯だった。

「こう言っちゃ何だけど、嘘ついてるとしたら、怪しいのはあなたの方よ」

「そうかな。でももしそうなら、もう少しまともな身なりをするはずだ。人を騙すなら騙すなりの格好っていうものがある」

私がそう言うと、彼女はまたため息をついて空を見上げると「バカみたい」と私に聞こえるくらいの声で呟いた。

私はポケットに手突っ込んでポケットの中に残っていた砂粒を指先でつまみ出すと、それをそっと落とした。砂粒は砂浜に落ちた瞬間に消えてなくなった。いや、消えてなくなったのではない。見分けがつかなかっただけの話だ。南の浜の砂と東の砂の浜。同じ砂、同じ海、同じポケット、同じ人間。

「ねえ」そう言って彼女は私の方に顔を向けた。「とりあえず、何から始めたらいいと思う？」

「自己紹介」私は足元を見ながら言った。

「嘘でしょ？」

「どうして？」

「どうしてって、何も覚えてないのにどうやって自己紹介なんかするの」

「何も覚えてない？」予想していなかった答えだった。

「あなた、もしかして覚えてるの？」

私は少し考えてから、慎重に言葉を選んで言った。

「少しだけなら、覚えてる。自分の名前と年齢、それに家族のこと」

すると彼女は小さく頭を横に振った。

「それって何だかずるい。あたし、何も覚えてないんだよ。ほんとに何も覚えてない。名前どころか、年齢だって思い出せない。家族のことなんか考えもしなかった」

「そうか——悪かった」

「いいよ、謝らなくても。でもよかったね、家族のこと覚えてて」

「覚えてるって言っても、家族がいるっていうことしかわからないんだ。それ以上は何も」
「そっか、それじゃあ同じようなものだね。自分の名前がわからないのだけはちよつとくやしいけど」

私は彼女の軽い喋り方についての間にか引きこまれていくのを感じていた。彼女と話していると、自分が深刻な事態に巻き込まれたのだということをつい忘れそうになる。誰かといることでもこんな心が安らぐということに正直驚いていた。

「だから自己紹介は後回し」

「わかった」

「ねえ、何か他にほら、やることあるでしょ」

「ある。たくさんある」と私は言った。「まず助けを呼ぶ方法を考えないと」

「そうだね」

「それから助けが来なかったときのために脱出の方法を考えておく。脱出できなかったときのために、どうやってこの島で夜を過ごすかということについても考えておく。それと平行して水と食料を確保する方法を真剣に探す」

「なんだ、まともなこと考えてたんだ」と彼女は半分笑いながら言った。

「一人でいる間に色々考えたんだ」

「でもね、助けを呼ぶっていうのはどうも望みが薄い気がするんだよね。だって、あたし昨日からずっと海を見てるけど、船も飛行機も見なかったし、何となくここにはそんなものの近づかないような気がするし」

「でも一応やってみる価値はある」

「どうやって？」

「のろしを上げるんだ。ここには燃えるものはたくさんあるから、火さえあれば、何とかなる」

「火は何とかできるのね？」

「たぶんね」

「じゃあのろしを上げて、ついでに砂浜にメッセージを書くってのはどう？」

「いいアイデアだ」

「もちろん『HELP』だよ。それから——何だっけ？」

「脱出方法。どうする？」

「どうするも何も、ひとつしかないでしょ。イカダを作るんだって」

「イカダか。そうだな」

「ここにあるもので、イカダ作れる？」

「さあ、どうだろう。木はあるから、あとはツタみたいなものがあればできると思う」

「木はあるからって言ったって、どうやって木を切るの？ ノコギリなんて、絶対に落ちてないと思うけど」

「太い枝が落ちているのを探す」

「じゃあ、ツタみたいなものって、何？」

「それも探す」

「ふうん」と彼女は鼻を鳴らした。「まあ、いいか。とにかくやれることから始めなきゃいけないんだから」

「その通りだ」と私は言った。すると彼女は「じゃあ、枝か何か拾ってくる！」と言って元気に松の木の方角へ走り出した。もちろん彼女も裸足だった。

しばらくして彼女は雨傘くらいの長さの木の枝を持って帰ってきたかと思うと、「ビツクリ・マークはひとつ？ ふたつ？ あ、でも多い方がいいね！」と大きな声で独り言を言いながら、海へ向かって走って行った。そして彼女は波打ち際から数メートル手前で立ち止まると、ものすごい勢いで砂浜に『HELP』の文字を書き始めた。私はもう少し大きい方がいいのではないかと思っただが、あえて言わなかった。彼女の機嫌を損ねたくなかったのがひとつと、それが無駄な作業であるという確信に近い予感のせいだった。彼女は最後に巨大なビツクリ・マークを四つ書いて、私のところに息を切らして戻ってきた。

「ねえ、どう？」

「いいねえ」と私は言った。

「ねえ、ひとつ思い出したんだけど」と彼女は言った。「あたしね、イメルって名前だった」
「イメル？」

「そう。たぶん本名じゃないけど、あだ名か何か。マンガのキャラクターの名前のような気もするけど」

「そうか」と私は言った。「イメルか――」

「どう？」

「名前がある方がいい」

「そうでしょ。あ、ねえ、さっきは聞かなくてごめんなさい。あなたの名前は？」

「博史」

「ヒロシ？」

「そう」

「ねえ、ヒロシさん」

「何？」

「ねえねえ、ヒロシ」

「何？」

「何だかしっくりこない」

「そんなことを言われても困るな」

「あのさ」とイメルは言った。「やつぱり『あなた』でいい？」

「別に構わない」と私は言った。

「あ、でもあたしはイメルね。絶対に『君』って呼ばないで。恥ずかしいから。いい？」

「了解」

イメルは手に持っていた木の枝を砂浜の上に置くと、その上にまわりの砂をかぶせて枝を埋め始めた。その作業が終わるのを待って、私は話し掛けた。

「ねえ、イメル」

「何？」

「さっき『昨日からずっと海を見てる』って言ったね」

「うん、言った」

「お腹、減らないのか？」

「減らない」と彼女は言った。「お腹減ったの？」

「いや、まだ大丈夫だ。っていうより、そういう感覚がみんな鈍くなったような気がする。暑くもないし、寒くもない。痛くもないし、腹も減らない」

「変なの。大丈夫？」イメルは不思議そうな顔をしたが、まあ何となくわかるけど、といった風に頷いた。

「大丈夫だと思う。薬でも飲まれたかな」私はそう笑いながら言ったが、実際のところ少し心配になってきた。感覚というよりも、本質的な部分で何かが欠けている気がするの。は事実だった。何かを感じようとか、何かをしたいとかいう能動的な衝動さえ、長い間感じていない気がする。目が覚めたときに漠然と感じたあの欠如感と無関係ではないように思える。

「ねえねえ」とイメルが言った。「もしお腹が減ったら言ってね」

「え？」

私はイメルを見た。彼女は意味ありげな微笑を浮かべて私を見ていた。「何か持ってるのか？」と私は聞いた。

「ううん、何も持っていないよ」と彼女は言った。

私は彼女の顔を見つめた。目が笑っていた。

「あのねえ」とイメルは言った。「ハンバーガー屋さんがあるの」

「何？」

「この島にね、ハンバーガー屋さんがいるの」と彼女は言った。



翌日の木曜日、僕は時間通り夕方五時に再びその家のインターフォンを鳴らした。昨日と同じ音に続いて、「はいー！」という明るい声が返ってきた。僕が玄関の門を開めると同時に、玄関の扉が開いた。

「こんにちは、はじめまして」

そう言って笑顔で出てきたのが令美だった。目元と鼻筋が母親にあまりにもそっくりだったので、はじめて会ったような気がしなかった。母親よりも若干色の濃い肌が全身に健康な若さをみなぎらせていて、僕は思わず目を見開いて彼女の姿に見とれてしまった。そのせいで「こんにちは」という一言が、予定よりも一呼吸遅れてしまった。その微妙な間に気づく様子もなく、彼女は「よろしくお願いします。どうぞ上がって下さい」と元気な声を玄関に響かせた。

玄関には彼女のものらしいこげ茶色のローファート、昨日母親がはいていたサンダルが並んでいた。僕はその隣に脱いだ靴を並べてからスリッパをはき、「お邪魔します」と誰もいない廊下に向かって声をかける。彼女は僕の後ろで扉を閉め、ガチャガチャと鍵を閉めた。

「さっき帰ってきたばかりで片付けてないんですけど」そう言いながら彼女は僕の横をすり抜けると、廊下の奥へとすたすたと歩いていった。「昨日二階には上がりました？」

「ううん、上がってないよ」と僕は廊下をきよろと見まわしながら言った。

「そっか。ママが気をつかったんだ。昨日はめっちゃ汚なかったから、私の部屋」と彼女は笑いながら言った。「気をつけてください、いま階段のところの電気が切れてて暗いんです」

僕は令美から三段以上距離を取るように気をつけながら狭い階段をのぼった。

二階は車庫の上のスペースを使える分、一階よりも広かった。中央の長い廊下にはドアが四つあり、両親の寝室と令美の部屋、それに倉庫代わりに使っている空き部屋と父親がときどき使う書斎だと説明してくれた。

「先生、他の部屋の中も見ます？」と自分の部屋のドアを開けながら令美は言った。

「いや、いいよ」と僕は答えた。「授業はここでやるんだろう？」

「そうです」

「それなら他の部屋はいい」と僕は言った。

授業をする部屋というのは、たいてい子供部屋だ。リビングで教えることもあるし、どこかの家では台所で冷蔵庫の唸り声を聞きながら教えたこともあるけれど、やはりいつも使っている勉強机を使うのが一番いい。だから家庭教師として他人の家に上がるときには、必要のある部屋以外には入らないものだ。玄関と廊下、それに授業をする部屋くらいで、

あとはその家の間取りがどうなっているかなんて知らないことの方が圧倒的に多い。そもそも知る必要なんてないし、それは僕の言う「距離を置く」ということにも少しは関係している。トイレだってなるべく借りないようにしているくらいだ。だから、令美が他の部屋を見るように勧めたことを、僕は少なからず奇妙に感じていた。あるいはきれいに片付いた部屋の中を見せたいのかもしれないが、それに乗るわけにはいかない。

「じゃあ先生、ちよつと待っててくれますか？ お茶持ってきますから」令美は僕が部屋に入ったところでそう言った。

「いやいいんだ」僕がそう言いかけると、彼女は「ママにね、先生は遠慮するけどお茶くらいは出しなさい、って言われてるんです」と言い残して、さっさと階段を下りていってしまった。

僕は仕方なく部屋の中央に立って、ぐると部屋の中を見渡した。子供部屋にしては少し大きめの部屋だった。窓際に置かれた勉強机の横には大きな本棚があつて、その中に教科書や参考書や辞書がびっしりと詰まっている。きれいに片付けた机の上には小さな付箋がいくつつか張りつけてあり、机の隅に置いてある丸い筒のようなペン・ケースは、食べ過ぎた牛の胃袋のようにふくらと膨らんでいた。椅子の上には黒い皮のカバンが置いてあつて、椅子の背には脱いだばかりの制服のブレザーがかけてあつた。勉強机他には、ベッドと洋服ダンス、それにCDプレイヤーがのったカラー・ボックスと小さな化粧台が置いてあつた。

部屋の中のものには別段興味も湧かず、窓から外の景色を眺めているところに令美が帰ってきた。

「先生、コーヒーでいいですか？」

「うん。ありがとう」

彼女はコーヒー・カップを二つとクッキーがのった丸いお盆を机の上に置いてから、部屋のドアを開めた。それから僕がまだ立ったままで見ているのを見て、「あ、そうだ。椅子がいるんだった」と言つてまたドアを開け、二階のどこかの部屋から椅子を運んでくると、自分の椅子の隣に置いた。僕がその椅子に座ろうとすると、彼女は「あ、もうちよつと待つて下さい」と言つて自分の椅子の上に置いてあつたカバンをベッドの上に移し、ブレザーをハンガーに掛けて洋服ダンスの上に引っ掛けた。

「はい、準備できました。すいません、バタバタして」

「さて、何から始めようか」僕がそう言ったところで、今度は彼女はお盆の上のコーヒー・カップを取つて僕の前に差し出し、もうひとつのカップを持ち上げて、それを口につけながら上目遣いで言った。

「ねえ先生」

「何？」

「先生、いくつなんですか？」

「え？」

「思ってたよりも若くって、びっくりした」

「そうかな」

「ママがね、すごくいい人なのよ、って言っていました。でもプロの家庭教師だから、厳しいわよって。だから何となく三十後半のおじさんかと思ってた」

「お母さんからは何も聞いてなかったの？」

「何も。家庭教師の先生に来てもらうのはどう？　なんて急に言い出したかと思ったら、昨日の夜になって明日から来て下さるから、なんて言って。うちのママ、とにかく動き出すと早いです。超行動派、超積極的」

「ふうん」

「だからどんな先生なのかも知らなかったし、どんな準備をしたらいいのかもわからなくて。とりあえず机の上だけは片付けておいたけど、いつもはもっと汚いんですよ」そう言っ
て令美は軽く微笑んだ。「だから、若い男の先生でよかった。あ、コーヒー、飲んで下さいね。クッキーはママの手作り。ママ、料理ものすごく上手なんです」

「じゃあ遠慮なく」それが僕の精一杯の一言だった。

僕は完全に彼女のペースにはまっていた。これまでに中学生や高校生の女の子を教えたことは何度もあるから大体のパターンはわかっているし、どう扱えばいいのかもわかっているつもりだ。勉強を教える体制を整えるまでに苦労するのは、家庭教師を完全に遊び相手だと思っ
てはしゃいでいる子供だ。でもそういう子供たちは、とにかくこつちが真面目にやっているという雰囲気さえしつかり作れば、すぐにおとなしくなる。でもそれもごく一部で、たいていは家庭教師の先生が来るとなると神妙な顔つきで机に向かうものだ。しかし今回はどうも勝手が違う気がした。令美の話し方や素振りには、妙に大人っぽいところがある。喋る内容は幼稚でも、言葉の選び方や間の取り方に何か練達したものを
感じる。はじめて会った人とコミュニケーションを取っていく要領を知っているというのだろうか。とにかく十七、八の高校生と喋っているようにはとても思えないのだ。

僕は熱いコーヒーを一気に半分くらい喉に流し込むと、令美に聞こえないくらいの小さな深呼吸をして気持ちを入れ替えた。

「実を言うとね、僕も話が急だったから、何も準備できてないんだ。お母さんに令美ちゃんの成績表を見せてもらって、とりあえず英語と日本史をやるうかっていう話にはなっている
んだけど」

「はい、私もそれは聞きました」

「それなら話が早いな」と僕は言った。「テストの答案って、ちゃんと取ってある？」

「ありますよ」

「じゃあ、それ見せて。最近のテストなら何でもいいから」

「全教科ですか？」

「ううん、英語か日本史」

「ちよっと待って下さいね」

そう言って彼女は机の一番下の引出しからファイルを取り出して、それをぱらぱらとめくり始めた。ファイルにはテストの答案用紙がきれいに綴じられていて、鉛筆で書いた文字の上で、赤い丸やバツが賑やかに躍っていた。

「これが一番最近のテストで、その前がこれです」

令美はファイルの中から二枚の英語の答案用紙を取りだして、机の上に置いた。僕はそれを手に取って、さっと目を通した。答案用紙に書かれているのは答えだけで、問題用紙は別にあるはずだった。でもその答案用紙を見れば、どういう間違いをしたのか、どの辺りが弱いのかということは大体わかる。令美の場合は選択問題の一部にバツが集まり、和訳と英作文のほとんどに赤い三角がつけられていた。和訳の解答を読むと、少し意識が多いような気がした。

「問題用紙もある？」と僕は聞いた。

「いま探してます——あ、これかな」そう言って彼女は問題用紙を五枚僕に差し出した。その問題用紙に目を通すと、彼女が間違えた選択問題が発音の問題であることがわかった。

「ねえ、発音、苦手？」

「ううん、別にそういうわけじゃないんですけど」

「そっか。そしたら、まず簡単なテストをしよう。何か英語の問題集持ってる？」

「ありますよ」

「模擬試験タイプのやつがあればいいんだけど」

「ちよっと待って下さい」そう言って令美は立ち上がり、本棚の中から一冊の問題集を取り出した。

「全部やってる時間はないから、これと、これと、これがいいかな」僕はそう言って真ん中あたりのページを開き、その中のいくつかの問題に丸をつけた。「それじゃあ、ちよっとやってみてくれる？」

「はい」と言って彼女はペン・ケースからシャーペンを取り出すと、問題文を読み始めた。

「十五分もあればできるよね」令美の横顔に向けて言ったその言葉に、彼女は何も反応しなかった。僕も一緒になって問題文を読み、令美が書き込んでいく解答を黙って目で追った。ときどき考え込むこともあったけれど、令美は十分ほどですべての解答を終え、ペンを置いた。

「ねえ、もしかして、本番に弱いってことある？」

「たぶんないと思います。どっちかっていうと強い方だと思います」

「ふうん」そうやって今度は僕の方が考え込んでしまった。令美の解答はほぼ満点だったのだ。発音の問題を含めた文法問題に間違いはなく、空欄を埋める問題にひとつ不正解が

あった他は、和訳、英作文の問題も全部正解だった。

「英語は苦手？」首をひねって考えた末に僕がそう聞くと、彼女は黙って首を振った。「たまたま体調が悪かったとか、問題文をちゃんと読まなかったとか、考えすぎたとか、解答欄を間違えたとか、先生の教え方が悪いとか。どうしてだろうね？」

すると令美が僕の方を見て言った。「ひとつだけ正解ですね」

「何？」

「どれだと思います？」と今度は逆に令美が僕に質問した。

「先生が悪い？」と僕は聞き返した。

「あ、正解」

「先生のせいなの？」

「そうです。っていうより、先生が嫌いなんです」と令美は言った。

「英語の先生？」

「そう」

「もしかして、わざと間違えてるとか」僕が遠慮気味にそう訊ねると、令美は黙って頷いた。

「あのね、発音がすごく気持ち悪いんです。っていうより、絶対間違ってるんです」

「どういうこと？」

「とにかく自分は完璧に発音してるっていう感じで威張ってて嫌なんです。アメリカの大学に留学してたらしくって、それで自分はネイティブの発音に近いんだって、いつも言ってるんです。でも絶対に発音は悪いし、イントネーションやアクセントもときどき間違ってるんです。文節の区切り方が下手だし、ついでに言えば裏返ったような高い声も嫌。あーもう最低」

令美はそこまでを一気に喋ってしまうと、本当に気持ち悪くなったような表情をして眉をしかめた。

「そりゃよっぽどだね」

「ほんとひどいんですよ。だからテストのときにね、私、その先生が発音した通りに答えを選んでんです。そしたらほとんどバツ。くやしいから、先生は授業のときにそうやって発音しましたけど、って言ったことがあるんです。それ以来目をつけられちゃって、こっちも何とかしてやろうと思って、英作文の問題とかにはいつもちよっとひねくれた答えを書くんです。教科書に書いてあるようなお手本通りじゃない答えを。でもほとんど三角。間違っではないから、バツはつけられなくて、部分点だけ。ほんと、やることが幼稚なんです。先生のくせに」

「なるほど、謎が解けた」と僕は言った。「他の教科がいいのに、どうして英語が悪いんだらうって不思議だったんだ。わざとやってるってことか」

「そうなんです」そう言って令美は肩をすくめた。「あ、でも全部っていうわけじゃないんですよ。英語の時間はその先生の声を聞いているのがいやだから、CD聴きながら他事ばかりしてるんです。だから新しく習った文法問題とかは、普通に間違えてるんです。間違えてから後で勉強するから、次のときは間違えませんけど」

「たくましいねえ」と言って僕は笑った。「僕にはそんな度胸はなかったよ。模範解答を書くのは得意だったけど、先生とそうやって喧嘩したことなんかないな」

「結構楽しいですよ」と言って令美も笑った。

「じゃあもしかして日本史も？」

「え？」

「日本史の先生のせい？」

「いえ、それは違うんです。日本史は普通に苦手なだけです。世界史はいいんですけど、どうも日本のことって頭に入らなくて。細かすぎるっていうのもありますけど」

「まあね、僕も日本史は中学校で習うところまででいいんじゃないかっていつも思うけどさ」

「あ、でもいまの先生はテストに変な問題ばかり出すから苦手かも」

「例えば？」

「この間なんか、『もし井伊直弼が暗殺されなかったら、彼はその後どういう政策をとったと考えられるか』なんて、バカみたいな問題があったんです。いつもなら適当に流すんですけど、なぜかそのときはムカムカつときて、私、広々とした解答欄に『もう一人子供を産んでいた』って書いたんです。もちろんバツでしたけどね。答案用紙からはみ出るような特大のバツをもらいました」

「そりやすごいね」僕は思わず感心してそう言ってしまった。もちろん褒めらるようなことではないけれど、その教師にもやはり問題はある気がする。僕がコーヒーを飲もうとカップに手を伸ばすと、令美は頭の後ろで手を組んで「あーあ、世界史にしとけばよかったなあ」と天井を斜めに見上げながら言った。

「あんまりこういうこと言うのはまずいんだけどさ」と僕はコーヒーをすすりながら言った。「他はいくらさぼってもいいけど、現代史の勉強はちゃんとしておいた方がいいよ」

「どうしてですか？」

「やっぱり第二次世界大戦以降の出来事っていうのは、歴史っていうよりは現在の一部だっている風には捉えないといけないからね。それより前の出来事がいまの世界に直接影響を与えてるっていう風を感じるのには難しいけど、現代史っていうのは確実にいまの世界に繋がってるから。あ、言ってること、わかるよね」

「はい。わかります」

「それからね、僕の高校の時の世界史の先生が言ってたんだ。歴史の勉強っていうのは事実を知ることなんだって。『いつ、誰が、どこで、こんなことをしました。その結果、これ

がこうなりました。その次に、これがこんな風になりました。さて、みなさんどう思いますか？』っていうのが歴史なんだって。時間軸の上に事実だけを並べて、もし事実かどうか怪しければ信憑性の高いものを上から順番に重ねて置いて、それを遠くから眺めるだけでいいんだって。それを聞いてから僕は歴史を勉強するのが好きになったけどね。どう思う？」

「なかなか深い言葉ですね」

「そうだろう？」

「でも先生のオリジナルじゃないんですね？」

「残念ながら違うけど。でも十年前の言葉だと思うと味があるだろう？」

「確かに。歴史を感じますね」そう言って令美は頷いた。「十年前はどんな風だったんですか？」

「何が？」

「先生が。学生だったんでしょう？」

「どんな風って、普通の学生だよ。君たちよりずっと田舎臭かったと思う」

「田舎臭いって、先生どこ出身なんですか？」

「おっと話が逸れてきた。プライベートはなしっていう決まりなんだ」

「はいはい、わかりました」

「さて、じゃあ何からやろうかな」そう言って僕は棚の中に並んでいる本の背表紙を目でさっと追った。「とりあえずさっきの問題集の続きをやるうか」

僕は問題集のページをばらばらとめくって、さっきと同じ要領で良さそうな問題をいくつかピックアップして令美に解かせた。令美は九割近い確率で正解を書き、ときどきわからないことがあると僕に質問した。質問の内容は鋭く、すぐには説明できないものもあった。自信がないものについてはとりあえずその場で大体のところを答えておいてから、あとで辞書や参考書で調べることもあった。おかげで一時間の授業が終わるころにはすっかりエネルギーを使い果たしてしまい、冗談を言う余裕さえなくなっていた。

「先生、休憩の時間ですよね」令美が壁に掛かっている時計を見てそう言ったとき、僕は英語の辞書の真ん中あたりのページを繰っていると唖った。

「ああ、そんな時間か」と僕は辞書から目を離さずに呟いた。

「私、コーヒー淹れてきますね」そう言って令美は部屋を出ていき、トントンと軽やかに階段を駆け下りていった。

僕は辞書をパタンと閉じて立ち上がると、両手を突き上げて思いつきり背伸びをした。ふと天井を見上げると、天井に薄黄色の星型のプラスチックが張りついているのが見えた。プラスチックの表面に、暗くなつてから光るように蛍光塗料が塗ってあるのだろう。星はでたらめに並んでいるように見えたけれど、いくつかの星座を形作っているようだった。色々な大きさの星が天井に貼りついていて姿は、星座というよりは特殊な液体で漂白され

た蝶の標本のように見えた。

休憩の間に僕は令美に学校のことをいくつか質問し、それから進路のことも少しだけ話した。彼女は母親の言っていた通り、自宅から通えるように地元の大学をいくつか受験するつもりようだ。金銭的には問題ないものの、一人娘を近くに置いておきたいという両親の気持ちをくんでのことらしい。令美の方も特に家を出たいとか一人暮らしがしたいという願望もなく、地元に残ることはずいぶん前から決めていたことなのだそう。もちろん彼女の成績なら無茶さえしなければ必ずどこかの大学には合格するだろうし、地元の国立大学だってそんなにハードルは高くないはずだ。

「私、大学受験なんてそんなに気にしてないです」と令美はコーヒーを飲みながら言った。「落ちても受かっても、人生そんなに変わらないと思うし、うちの両親もあんまり心配していないみたいだから」

そうやって肩の力を抜いて大学受験に臨むことができるというのは、幸せなことだと思う。彼女の言う通り、大学受験の可否が人生を左右するような時代ではもうなくなった。人生におけるひとつの分かれ道ではあっても、天国と地獄をわけけるほどの岐路ではない。

休憩が終わると、僕は引き続き英語の問題集を解くように令美に言った。令美が解答し、僕がその場で採点しながら簡単な補足をするというスタイルで後半の時間が過ぎた。

「それじゃあ明日は日本史をやろう。教科書と資料集、授業で配ってるプリント類をちゃんと持って帰ってくることに」

「はあい」と令美はぴんと背筋を伸ばして返事をして、机の上を片付け始めた。

外を見るとあたりはもうすっかり薄暗くなっていて、向かいの家の明かりが窓越しに見えた。

「そうだ、先生」と令美が言った。「御飯食べていかないんですか？」

「うん、いつも断ってるんだ」

「どうして？ 食べていけばいいのに。彼女が待ってるのか？」

「いや、そうじゃないんだ、残念だけど」と言っ僕は苦笑した。

「ふうん、変なの。ママがいたら無理にでも食べさせる気がしますけど」

「お母さんにもちゃんとやってあるから」と僕が説明すると、「あ、うちのママ、ほんとに強引ですからね」と言っ彼女は笑った。

玄関で靴をはいていると、令美が小さな紙袋を持ってきて僕に差し出した。

「クッキーくらい、もらっていいって下さい」そういつて令美は笑顔を浮かべた。

「ありがとう」と僕は言った。「それじゃあ、また明日。お母さんによろしく」

「はい。ありがとうございました」そう言っ彼女は頭をぺこりと下げた。

玄関を出ると、虫の音が聞こえた。足元からせき立てるような虫のざわめきを聞いていると、何となく自分があまり歓迎されていないような気がした。門を閉めると、カチャリ

という音が薄闇の中に響き、それにつられるように虫の声が少し弱まった。振り向いて二階を見上げた瞬間、令美の部屋の明かりがふっと消えた。その新しい闇の中に、星型の薄い光がいくつか瞬いているのが見えた。

＊

僕が高校入試、大学入試と二度の受験戦争を経験したのは、少子化や全国的な学力低下が既存の受験システムや学校・大学経営そのもののあり方を本格的に揺さぶるようになる、ほんの少し前だった。それは受験の結果が子供の将来を決定するとほとんどの大人が信じて疑わなかった時代であり、社会が危うげながらも何とかその幻想を守り通すことのできた時代だった。その大人や社会が僕たちのアイデンティティの筆頭に植え付けたのは、偏差値であり、出身校であり、志望校であり、最終学歴だった。そして僕たちの本物のアイデンティティは、自由や独創性を抜かれた鈍い色のガラス玉になって、狭い教室の隅っこに追いやられた。僕はその狂信的とも言える時代の流れの中にやむを得ず身を置き、他の多くの子供たちと同じように何がしかの疑問を抱きながらも、それをぶつける相手を見出せないまま、青春と呼ばれる日々を淡々と送っていた。

「いま君たちは未来への無限の投資をしているんだ」と誰かが僕の背中に向かってささやいた。僕はその言葉を信じた。信じるしかなかった。仮に疑ってみたところで、代わりに自分を納得させる言葉なんて、何ひとつ思いつかなかった。目をつぶり、流れに飲まれ、時間が過ぎていくことに身を任せた。そうやって僕は、自ら疑問を提示し、その解決法を探り、答えを見出し、それをまた吟味して疑っていくという、社会を生き抜くための重要なプロセスを知らないまま大学生になった。

大学に入っても、目の前に現れる小さな壁をひとつずつ越えていくことに日々を費やすという意味では、高校生のときと何も変わらなかった。数多く与えられたように見える選択肢もレールの上を歩いているうちに次第に少なくなっていくし、たとえ何ひとつ自主的に選ばなくても時間は勝手に進んだ。それと平行して、受験戦争の到達地点に対してはじめに覚えた幻滅はゆっくりと薄れていき、いつの間にか消えてなくなってしまった。すべてが上手く仕組まれていたのだろう。結局、僕は大学にいる間、何も選ばなかったし、何も解決しなかったし、何も疑わなかった。その結果、僕は半ば自動的に社会人になった。自動的に中学生になり、自動的に高校生になったのと状況としてはほとんど変わらなかった。

大学を卒業して六年が過ぎた今になっても、あの「未来への無限の投資」がどういう形で僕の人生に還元されたのかはわからない。まだ還元されていないのかもしれないし、僕の投資が不十分だったのかもしれない。でもそれが何らかの形をもって僕の目の前に現れ

るまでには、まだずいぶんと時間がかかるように思う。

05



「ハンバーガー屋？」

私はイメルの言葉を冗談とも本気とも判断しかねるまま、そう質問していた。

「そうだよ」とイメルは簡単に答えた。

「どういうことかわからないけど」

「どういうことも何も、ハンバーガーが食べれるんだってば」とイメルは言った。「昨日ひとっだけ食べたけど、おいしかったよ」

「ふむ」仕方なく私はそう唸った。そして次に思い浮かんだ質問がこれだった。「そんなものの、いったいどこにあるんだ？」

するとイメルは島の真ん中の方を指差してこう言った。「あの辺に小屋があつたでしょ、あれの左の道を行つたところ」

「左の道？」

確かに私はまだ小屋の西側を探索していない。だからそこにハンバーガー屋があるうが地下鉄の駅があるうが、頭ごなしに否定することはできない。とは言つても、私はその『ハンバーガー屋』というあまりにも俗物的な単語に引つかからないわけにはいかなかった。

「嘘じゃないよな」と私は一応念を押したけれど、イメルは「嘘なんか言わないよ」と真顔で言つた。実際、嘘を言っているようには思えなかった。

私が考え事をしている間に、イメルは鼻歌を歌いながら波打ち際に近づき、少しでも海水に足をつけた状態で空へ向かつて大きく背伸びをした。それから腰を曲げ、両手で海水をすくつてぴしゃぴしゃと顔を洗つた。

私はイメルの背中に向かって「ひとつ質問があるんだ」と声を掛けてみた。イメルは

「何？」と言いながら振り返り、麦わら帽子をかぶり直した。

「ハンバーガー屋って、誰がやってるんだ？」

「どうせ信じないから言わない」

「信じるも信じないもないだろう。さっきこの島には二人しかいないって言ったのはそつちだ」

「そうだよ」

「じゃあどういふことなんだ？ 無人のハンバーガー屋があるってことか？」

「そうじゃない」

「どういふこと？」

「信じてくれる？」

「信じるよ」

するとイメルは波打ち際で足をぶるぶると振って水を切り、「わかった」と言っただけで砂の上に小さな足跡を残しながらこちらへ向かって歩いてきた。イメルは私のすぐ手前で立ち止まり、片足で立つてもう片方の足をひょいと上げ、柔らかな足の裏を手でさっさとたたいた。スカートにもところどころに水がかかっている、黒いペンキを垂らしたように見えた。両足を地面に戻すと、彼女は私の顔を見てこう言った。

「宇宙人。宇宙人がやってるの」

「え？」

「あ、信じてないって顔だ。だから嫌だったのよ、説明するのが。黙って行けばわかるから、ほら、早く行こうよ」

「そんなこと、どうして早く言わなかったんだ」

「だから、信じないと思ったから」

「いや、でも——」

「とにかくほら、行くよ」

そうやってイメルは私の方に一歩足を踏み出し、私の手を取ってぐいっと引っ張った。イメルの手は私の手首に跡を残しそうなほど冷たかったが、私の熱を奪ってすぐに温くなった。

坂道まで来るとイメルは私の手を離し、早足で私の前を歩いた。私はその間、宇宙人がやっているハンバーガー屋を一生懸命想像してみたが、どうしても騙されているようにしか思えなかった。無人島と少女、それにハンバーガーと宇宙人。どう考えても滅茶苦茶な組み合わせだ。イメルの言う『人体実験説』が信憑性を増してきたような気がする。これは誰かの実験なのだ。私は貴重なサンプルとしてこの場所に立たされているのだ。そう考えるのが一番自然なような気がした。

丸太小屋の前の分かれ道を左に進むとしばらくして松林が姿を現し、その向こうに広く開けた土地が見えた。短い松林を抜けると小道が消え、代わりに雑草の群生のようにも見える粗い芝生に覆われた平たい土地が現れた。そして視線の先、崖のほんの少し手前に、アイスクリーム屋の屋台のようなものがあるのが見えた。

「ほら、あれ」そうやってイメルは立ち止まり、その屋台を指差した。「あれ？　いないなあ」

私はイメルの独り言を隣で聞きながらその屋台を観察した。それは確かにハンバーガー屋のように見えた。屋台の屋根からハンバーガーのイラストを描いた看板が吊り下がっているのが遠目にも見える。

「ねえ、イメル」と私は言った。「宇宙人って、どんな格好してるんだ？」

「普通だよ」

「普通っていうと？」

「鈍い銀色で、手の指が四本でカエルみたいに指先がぶくぶくしてて、目が大きくて、頭が逆三角形。カマキリみたいな顔っていうのかな。みんなが想像するのって、だいたいそういうのでしょ。二十年前はタコのお化けだったけど、いまどきの宇宙人ってそういう感じじゃない」私の質問に答えながら、イメルはすたすたと屋台に近づいた。「おかしいなあ、昨日来たときはいたんだよ。トマトがまだできてないからケチャップがないって言ってたの。トマトとケチャップがなくてもまあまあおいしかったけど、チーズがないのがちよつとね——ほら、ね。どう見てもハンバーガー屋でしょう」

「確かに」と私は言った。そう言っただけでしかなかった。

確かにそれはハンバーガー屋だった。遠くから見たハンバーガーのイラストは、どうやらこの店のロゴのようだった。分厚いハンバーガーの上側のパンの中にイメルが言うようなカマキリのような宇宙人の顔が描いてあって、下側のパンの中に「SPACE BURGER」という崩れた文字が描いてあった。パンの間には、肉が二枚とレタスとトマトが挟んであった。

屋台は上から見るとコの字型に張り合わせたベニヤ板でできていて、四隅に立てた丸い鉄のポールの上にはトタンの屋根がかぶせてあった。屋台の中には、木の板の囲いよりも少し低い位置に電気コンロとまな板をのせた台と、ステンレスのボウルのようなものをはめ込んで作った流しがついていた。まな板の上には小振りの包丁と塩と胡椒の入った瓶が置いてあった。屋台の裏からはエアコンの排気管くらいの太さの管が三本、崖に向かって延びていた。それが何のためにあるものなのかはわからなかったが、三本の管は崖のところで曲がり、崖の向こうに垂れ下がっていた。

「どう？ 信じてくれた？」無言で屋台を観察をしている私に向かってイメルが言った。私は目を丸くして、「信じるよ。信じられないけど」と答えた。

屋台の屋根からぶら下がった長い針金の先には小ぶりのフライパンがひとつ引っ掛けてあって、それが風に吹かれて小さく揺れていた。

「でも昨日と何か違う気がする」とイメルが呟いた。

「何が？」

「何かね、もっと昨日はシンプルだった。屋根なんかなかった気がするし、看板ももっといい加減だった気がするし、あれ？ あんな管あったかなあ」

そう言いながらイメルは不思議そうに首を傾げた。

「あわてて作り足したんじゃないのかな。お客さんが来たから」と私が適当なことを言うのと、「まあいいや」とイメルはやっぱりどうでもよかったとでも言いたげにさっと私の方に振り返った。

「ねえねえ、それより宇宙人の家に行ってみない？」

「宇宙人の家？」

「あの林の向こうに家があるって言うってたの。小屋の裏に畑があって、そこでニワトリを飼ってるんだってさ。トマトとレタスもそこで作ってるって言うってた」

「ハンバーガー用？」

「そう。全部チキン・バーガー。ピクルスはなし、チーズもなし。ピクルスは宇宙人が嫌いで、チーズは作るのが大変なんだってさ」

私は妙に理屈の通った説明に半ば感心していた。本当にこの島でハンバーガーを作ろうと思ったら、確かにそれしか方法はない。おそらくマヨネーズもないはずだ。

「自給自足ってことか」と私は言った。

「まあとにかく、行ってみようよ。宇宙人もいるかもしれないし」そう言うてイメルは歩き始めた。

方角的には西ということになる。屋台のある広場を抜けたところに、低いオリーブの木が集まった小さな林があった。その林を抜けた先に、その家があった。家とは言ったものの、それもどちらかというと小屋に近かった。さっきの丸太小屋よりは家らしい構えはしているが、入口のドアも窓もガタついていて、ちよつとした台風ですぐに吹き飛んでしまいそうなぼろ屋だった。家の裏からニワトリの鳴き声が聞こえてきた。

「ごめんくださいーい」とイメルが正面の入口のドアの前で叫ぶと、私はささっとイメルの後ろにまわって両手を体の前で組んで立った。イメルの言う宇宙人の姿を私はできるだけリアルに頭の中に描いてはみたが、やはり実際に目の前に現れるとなると複雑な心境だ。もちろんイメルの言うことを完全に信じているわけではない。全てが演技で、私はどこから監視されているという思いを拭い去ることはできない。でも今日一日の出来事を考えるにつれ、ここで宇宙人が現れたとしても、それほど驚くようなことはないだろうと、私は思い始めていた。

「おかしいなあ」そう言うてイメルはドアをノックして反応がないのを見ると、おもむろにドアのノブを回した。ノブはぐるっと半分ほどしたかと思うと、無気味なほど音もなく開いた。

「ごめんくださいーい」イメルはもう一度そう断って、家の中に入った。私もその後が続いた。

ドアを開けた瞬間、吹き込んだ風のせいで家の中の埃が一斉に空中に舞い上がった。暗い部屋の中に光が射しこみ、床一面に敷いてあるわらがふわっと揺れたのが見えた。それはぼろ屋どころか、馬小屋と呼ぶのがふさわしいような場所だった。部屋はひとつしかなく、右の壁の高い位置に小さな窓があって、そこから曇った光の筋が射しこんでいる。イメルはドアに手をかけたまま、うつむいてゴホッ、ゴホッと大きな咳をした。私は目を細めて小屋の中を見たが、誰かがいる様子はなかった。

「ひどいところだね」とイメルがしわがれた声で言った。「ほんとにこんなところに住んでるのかな」

「と、とりあえず閉めよう」私はそう言ってドアを閉め、肺に入りそうだった埃を、大きな咳をして吐き出した。私たちは「まいったな」という表情で顔を見合わせ、それから小屋の裏側にまわることにした。

イメルの言う通り、小屋の裏には頼りない間仕切りのような柵で囲まれた畑があった。畑ではトマトとレタスが栽培されていて、コッココと鳴きながら走り回っているたくさんのニワトリがいた。畑の周りはオリーブの木に囲まれていて、そのさらに外側にはオリーブを囲い込むように松の木が肩を寄せて立っている。しかし家の主の姿はそこにもなかった。

「ねえ、ニワトリがいるってことは、卵もとれるってことだよな」とイメルが言った。

「そうだろうね」私は他言を考えながらも一応相槌を打った。

「そうしたら、親子バーガーが作れるじゃない」

「親子バーガー？ 親子丼みたいなもの？」

「そうそう」

「でも、あんまり卵は食べないんじゃないかな」と私は言った。

「どうして？」

「卵は食べるためじゃなくて、ニワトリを増やすために必要だから」

「あ、そっか」

「そりゃあときどきは食べてもいいけど、あんまり食べてると今度は肉がとれなくなる」

「そうだね」

それから私たちは小屋を離れ、まだ探索していない島の西側に向かうことにした。松林に沿ってしばらく歩くと、ハンバーガー屋から続いていた芝生が終わり、乾いた土がむき出しになった太い坂道が現れた。坂道は北の絶壁に沿うようにほぼ真っ直ぐ西へ向かって下り、左手に松林を従えながらそのまま海へと繋がっていた。坂道を下りきったところに砂浜はなく、小石や砂利を含んだ海岸線が道のすぐそばまで近づいている。道の終わりのところに立っている松の木を左に回り込むと、少し先に小さな砂浜があるのが見えた。砂自体は他の砂浜と同じように純白とも言える輝きを放っていたが、大きな流木や松の葉やぼろぼろに欠けた岩がその海岸を汚していた。もし私がここで目覚めていたら、もっと絶望的な気分になられただろう。

「暗い海岸だね」とイメルが言った。

確かにその砂浜を含む一帯はすぐ背後に迫る松林の陰になっていて、暗い印象を受ける。海も空もどこなく冷たい色をしている。釣りをするならこういう場所がいい気はするが、それ以外にこの場所を賞賛する言葉が思いつかない。

「でも、当たったね」とイメルが海を見ながら呟いた。

「何が？」

「午後だったこと。太陽が沈んでる」

私たちがいる場所からさっきの坂道を下りきったところに立っている松の木を見ると、その少し左に低い太陽が見えた。銀色の折り紙をちぎって撒いたような海面が、落ちてくる太陽をさらに華やかに見せていた。

そのとき、波の音が聞こえた。

「波の音が聞こえる」と私は呟いた。「聞こえる？」

「聞こえるけど。どうして？」

「意識しないと聞こえないんだ」

「そう？」

「波の音ってどういうのか、覚えてる？」

イメルは少し間を置いていった。「こういう音だと思う」

「本当に？」

「どうということかわからないけど」

「誰かに記憶を全部ごっそり持って行かれたような気がするんだ。いや、まだ全部じゃない。でもそのうち全部なくなるんだ。波の音とか、名前とか、年齢とか」

「どうしてそんなことを考えるの？」

「わからない。わからないけど、とにかく変な感覚なんだ。あの小屋の裏にいたのがニワトリっていう生き物だったというのは覚えてるし、ハンバーガーっていう食べ物で、どういう味がするのもわかる。島と半島の違いだって説明できる。でも、波の音っていうと、どうもうまく思い出せない。何かがなくなった気がする。ケーキをフォークで崩すみたいに、体のどこかが少しだけ削り取られたような気がするんだ」

「変なの」とイメルは言った。

「変だよ」と私は言った。「プラシクトンに共感を覚えるんだ。なぜか親しみが湧く。どうしてだと思う？」

イメルはしばらく考えてから言った。「あなたも単細胞だから？」

「ふうむ、なるほど。うまいこと言う」私は感心して言った。

「ところでさ、プラシクトンって、何？」

「何って？」

「両生類とか節足動物とか、そういうのでいくと」

「浮遊生物」

「浮遊生物プラシクトンは何を食べるの？」

「たいていは光合成でエネルギーを得る」

「そっか。じゃあ餌はいらないんだ」

「そうだね」と私は言った。

「あのさ、いい言葉が思い浮かばないんだけどね」とイメルは言った。「とりあえず、波の音のこともプラントンのことも忘れてみれば？　しばらくしたらきつとまた元に戻るし、一時的なものだと思うよ。だからさ、今日はもうそうやって難しく考えるのはやめた方がいいと思う。それに、たまには全部忘れちゃうのもいいかも。すっきりするかもしれないし、新しいことが全部新鮮に見えるってことでしょ？」

「そうかもしれないな」と私は言った。

「でも、明日になっても今日あたしと会ったことだけは忘れないでよ、お願いだから」とイメルは言った。私は海を見ながら無言のまま頷いた。

それから私たちは足元に落ちていた石ころをひとつずつ海へ向かって投げ、太陽がさらに水平線に近づいたのを確認して、もと来た坂道をのぼった。

畑のある小屋まで戻るとイメルがもう一度入口のドアを開けて中を確認したが、やはり誰もいなかった。小屋の中には照明はなく、小さな窓と入口のドアから入り込むわずかな光が小屋の中に溜まっている。床の上には足の踏み場もないくらいわらが敷き詰めてあり、壁にはクワやスコップといった農具の他に、柄の長いホウキと木製の梯子が立てかけてある。しかし何度眺めてみても、小屋の中には私の興味を引くようなものは何もなかった。私とイメルは小屋に充滿した埃を出すためにドアを開けたままにしておくことにして、裏の畑をもう一度見てみることにした。

小屋の横を歩いてみると、突然イメルが「あ、そうだ」と言って立ち止まった。

「どうした？」

「そういえばね、犬を飼ってるって言ってた」

「犬？」

「そう」

「宇宙人が犬を飼ってるのか？」

「そう。名前もちゃんとあるの」

「ふうん」

「何か変な名前だったのよね、えっと——あれ？　何ていったかなあ」

イメルが犬の名前を思い出そうと黙り込んでいる間、目の前でニワトリたちがさつきと同じ調子で首を前後にコツコツ振りながら狭い畑の中をあてもなく歩き回っていた。試しに数を数えてみると、全部で二十三羽だった。ニワトリの色は大きく分けて三種類で、大半は普通の白いニワトリ、あとは茶色の混じったまだら模様が三羽と、泥沼から這い上がったばかりのような全身茶一色のものが一羽いた。しばらく観察しているうちに、はじめはばらばらに散らばって勝手気ままに動いているように見えたニワトリたちが、いくつかのグループに分かれているような気がしてきた。例えばある一羽が畑の真ん中から柵のそ

ばへ移動すると、その周りにいた何羽かが、少し遅れてその一羽についていく、といった具合だ。グループの結束はあまり固いようには見えなかったが、一羽一羽のニワトリがやみくもに動いているわけでもなさそうだった。中でも色の違うその四羽は、何となく他の白いニワトリと距離を置いているような気がした。彼らは周りのどのグループにも属さず、かといって色の同じもの同士で固まるわけでもなく、まるで別の種族の生物のように振舞っているように見えた。でもそれはニワトリを羽の色で区分するという私の生来的な傾向が、正確な観察を妨げていたのかもしれない。ニワトリたちはオスとメスで分かれてグループを作っているのかもしれないし、年齢が近いもの同士で固まっているのかもしれない。あるいは能力的な上下関係——例えば卵をたくさん産めるとか、足が速いとか、長く飛べるとか——で分かれているのかもしれない。ただひとつ確かなことがあるとすれば、それはすべてのニワトリがトマトとレタスが植わっているところをちゃんと避けているということだった。

「あつ、そうだ！」と、私のすぐ後ろに立っていたイメルが言った。「ほら、あれ何ていったっけ？ ハンバーガーのパンの部分のこと。ほら、正式についていうか、英語で」

「バンズ？」

「そうそう！ バンズだ」

「犬の名前が？」

「そう」

「どんな犬？」

「そんなの知らないよ。まだバンズに会ったことないんだから。でも、よくいなくなるんだってさ。昨日もまた逃げられたって言ってた」

「バンズって、もしかしてハンバーガーが好物とか？」

「えつとね、ハンバーガーじゃなくて、バンズの部分だけが好きなんだって。ほんと胡麻のついてるやつが大好物らしいんだけど」

「変な犬だな」

「まあね、それだけ聞くとね」と言ってイメルは笑った。「それにね、あんまり鳴かないんだってさ。だから探すのが大変で、いなくなったらお腹を空かせて帰ってくるのを待つしかないって言ってた」

「ふうん」と私はどうでもいいような返事をした。実際、パンを食べる犬のことなんてどうでもよかった。私は特別犬が好きではない。ニワトリがいいかというところというわけでもないのだが、どちらかと言うと手間のかからないニワトリの方がいい。ニワトリには散歩もいらぬし、逃げたりもしない。卵も産むし、いざとなったら食べることもできる。この状況ではニワトリの方が確実に役に立つ。

「もしかしたら、この小屋はバンズの家なのかもね」とイメルが言った。

「ちよっと大き過ぎないか？」私は小屋の屋根を見上げて言った。

「何もない島なんだから、犬小屋くらい大きくてもいいじゃない。贅沢ってわけでもないでしょ」

「それもそうだ」と私は相槌を打った。

私はふとこの小屋で夜を過ごすのも悪くないと思った。わらの上で寝るのは生まれてはじめての経験だが、潮風に吹かれながら砂浜で寝るよりはいいに決まっている。

「ひとつ相談があるんだ」と私は言った。

「何？」

「夜はどうする？」

「寝るところってことでしょ」

「そう」

「ここでもいいんじゃない？」

「僕もそう思うんだ。もうすぐ日が暮れるし、今日はこれ以上何もしたくない」

「そうよね」

「昨日の夜はどうした？」

「砂浜で寝た」

「寒くなかったのか？」

「大丈夫。夜もずっと暖かったし、ハンバーガー食べてお腹一杯になって、それですぐ眠れたから」

畑の向こうの林の隙間から見えていた太陽の姿が消え、オレンジ色の逆光に照らされて松の木の細長いシルエットが浮かび上がった。太陽は私が暫定的に決めた西の空に、今まさに沈もうとしていた。

「ねえ、お腹減った？」とイメルが聞いた。

「いや、そんなに。不思議だけど」

「あたしも。今日はお腹が減らない」

「ニワトリを見すぎてお腹が一杯になった」と私は言った。「全部で二十三羽。白と茶色のまだらが三羽と茶色が一羽。あとは真っ白。足が全部で四十六本」

「ふうん」とイメルは興味なさそうに呟いた。

06



「先生、彼女はいないんですか？」

その日、最初に受けた質問はそれだった。

「そういうのには答えません」と僕は真面目な顔をして言った。

「どうしてですか？」すぐさま令美が聞き返した。

「プライベートなことだから」

令美は二日目にして、僕が周到に用意しておいたはずの垣根を越えていた。母親への前振りにはほとんど意味がなかったようだ。それにしても家庭教師にずいぶん慣れているなと思っていたら、それを見透かしたように「家庭教師の先生ってはじめでなんですけど、やっぱり真面目に授業やるんですね」と彼女は言った。ついでに「家を抜け出してどこかに遊びに行ったり、ちよつと危ない雰囲気になったりはしないんだ」と付け加えた。

「まさか、マンガじゃないんだから」と僕が言うと、令美はつまらなさそうにカバンから教科書とプリントの束を取り出した。

休憩時間になると、令美は「コーヒーを淹れてきます」と言って部屋を出ていった。僕は椅子から立ち上がって背伸びをして、何気なく目に留まったカラー・ボックスの中を覗き込んだ。カラー・ボックスの一番上の段には、縦横ばらばらの方向に置かれたCDがぎっしり詰まっていた。その中には僕の知っているCDは一枚もなさそうだった。二段目には音楽雑誌とバレー・ボールの雑誌が置いてあって、棚を左右に仲良く半分ずつ分け合っていた。三段目の棚には埃を遮るための薄い絹の生地が張っており、中に何があるのかはわからなかった。

CDのタイトルをもっとちゃんと見てみようと思ふと腰をかがめたところで令美が階段を上がってくる音が聞こえたので、僕は振り返って窓の外を見ている振りをした。

「先生、音楽聴きますか？」令美は持ってきたお盆を机の上に置くと、窓の手前だか外だかを神妙な顔つきでにらんでいる僕に向かって言った。僕はその質問がいくつかの意味を含んでいるような気がしたので、とりあえず「いまはいいけど」と答えた。すると令美は「そうじゃなくて、普段から音楽を聴くんですか？　っていう意味ですよ」と言った。

「ああ、そういうことか」僕は苦笑いをして、わざとらしい咳払いをした。「そうだなあ、昔は聴いてたけどね、最近はさっぱり聴かなくなつたな。時間はあるんだけど、暇さえあれば映画ばかり観てるから」

「そっか」と令美は言った。「じゃあ昔は何を聴いてました？」

「昔って言っても学生のころだから、六、七年前の話だけど」そう言つて僕は少し考えた。六、七年前に聴いていた音楽を思い出すのに、時間がかかるようになったのだ。それはその頃の音楽が、いまの僕に大した影響を与えていない証拠だと捉えることも可能だ。「古くて悪いんだけど、エディ・リーダーとか、リサ・ローブとか、フィオナ・アップルとか」すると令美は驚いたように目を丸くしてこう言った。「へえ、いい趣味してますね、それ。私も大好きなんです、そういう音楽」

「ほんとに？　ちよつと古いかと思つたけど」

「そんなことないですよ。音楽に時代なんてないんだって誰かが言っていました」と令美は言つた。

「あれ、何ていったっけな、あのバンド」

「何ですか？」

「エディ・リーダーのバンドの名前。ほら」

「フェアグラウンド・アトラクション？」

「あああ、そうだそうだ。懐かしい響きだなあ」

すると令美が嬉しそうに、「ありますけど、聴きますか？」と言って僕の返事も待たずにカラー・ボックスの一番上の段の奥の方をごぞごと引っ掻き回し、一枚のCDを取り出すとそれをプレイヤーにセットした。それから令美はプレイヤーの上のパネルをがちがちと触っていたが、しばらくして「おかしいなあ、電源が入らない」と言っただけで息を切った。

「壊れた？」と僕が聞くと、令美は「最近ちょっと調子が悪かったんです」と僕に背中を向けたまま呟いて、ついにあきらめたらしく、セットしたばかりのCDを取り出してケースにしまった。

「残念。今度までに直しておきますね」令美は本当に残念そうに言った。

「しょうがない。そういうのはときどき壊れるもんさ」と僕は中途半端な慰めの言葉をかけた。「さあ、じゃあコーヒーでも飲んで、授業やろうか」

「はい」令美はそう言っただけで、おとなしく椅子に座った。

その日も僕が帰る時間になっても母親は帰って来なかった。休憩時間に話し足りなかったのか、僕が玄関で靴を履いていると令美は思い出したように母親の話を始めた。

令美の話によると、彼女の母親は近くの料理学校で臨時の講師として料理を教えていて、今は木曜日と金曜日に授業があるから僕が来る日には家にいないのだそう。母親が勤めているのはこの辺りではちょっと名の知れた学校で、母親は令美が高校に入った頃からそこで週に何日か働いているということだった。専門というのは特にはないけれど、得意なのは洋菓子とイタリアンで、いつも授業で使った食材の残りを持って帰ってきてはその日の夕食やおやつに出すのだそう。母親は大学時代に食物栄養学を専攻して、それ以来色々な形で料理の仕事に携わり、CS放送の料理番組にも出たことがあるくらいの腕前なのだろう。令美は料理のできる母親のことを心から尊敬しているらしく、まるで自分の自慢話をするような明るい表情で喋った。母親が得意な料理やよく使う調味料の話や、母親が市内で一番おいしいと認めたレストランの話を、延々と僕に話した。話を途中で切りたくない話し方をするので、結局僕は二十分以上も玄関に立ったまま彼女の話を聞くことになった。帰ることができたのは、廊下の奥で電話が鳴ったおかげだった。電話が鳴った瞬間、令美は「それじゃあ先生、また来週ですね」と言って唐突に話をやめた。

「さようなら」と僕が言うと、令美は「さようなら」と言いながら、あわただしく電話のある場所へと走っていった。

僕は帰り道を歩きながら、今日食べたクッキーも母親の手作りなのかどうか気になった。昨日のクッキーの味を思い出して比べてみたけれど、違いがあるのかどうか、正直言ってみてわからなかった。水曜日のクッキーの味となると、まるで三年前に別れた彼女の家の電話番号くらい不確かだった。僕は記子という名前の母親の顔を思い出してみた。顔はぼんやりしていたけれど、その代わりに彼女が台所に立った後ろ姿が思い浮かんだ。それから彼女が淹れたインド産の紅茶の味を思い出してみた。すると今度は頭の中に、青と白の唐草模様の紅茶のカップと太った親子の姿が現れた。

07



翌朝、私が目を覚ましたのは、ふかふかしたわらの感触の中だった。昨日の夜、私とイメルはこの小屋の中でわらくにくるまって、日暮れと同時に眠りに落ちた。わらは温かく、布団としても、枕としても十分に機能し、贅沢過ぎるほどの心地よい眠りを与えてくれた。一見するとばさばさして体が痒くなりそうだが、ある程度まとまるとまるで清潔な木綿のようにしつとりと柔らかくなる。おかげで私は眠り過ぎ、軽い頭痛にうなされて目を覚ました。

ほんの少し開いたドアの隙間から差し込んでくる光を頼りによりよると小屋を出ると、太陽はもうすでに上空から島を見下ろしていた。私は小屋の中を振り返ってイメルを探したが、姿はなかった。私はドアを開けたままにして、ニワトリの鳴き声が聞こえる小屋の裏へ回った。ニワトリは昨日と同じように、トマトとレタスを几帳面に避けながら畑の中をうろうろと歩き回っていた。白と茶色のまだらが三羽、茶色が一羽。あとは白。白いニワトリの数は数えなかったが、だいたい昨日と同じように見えた。

遠くで「ねえー！ 起きたんでしょー！ こっち来てよー！」とイメルが叫ぶ声が聞こえた。小屋の表にまわって芝生の上を少し歩いたところで、イメルがハンバーガー屋の前で手を振っているのが見えた。私は太陽の眩しさに目を細めながら、イメルのいるところへ向かって歩いた。

「おはよう！」近づいてくる私に向かってイメルは大きな声で叫んだ。私も「おはよう！」と大きな声で返事をした。すると彼女は手に持っていたロープのようなものを高々と持ち上げて言った。

「水が出るの！」

近づくにつれ、イメルが持っているのが青いゴムホースだということがわかった。イメ

ルはその口から勢いよく飛び出す水を気持ち良さそうに頭からかぶりながら言った。

「真水よ、真水。塩辛くないの。シャワーも浴びれるね」

「そんなものどこにあったんだ？」

「ほら、ハンバーガー屋から崖に向かって太い管みたいなのが伸びてたでしょ？ あの一本に、水が通ってたの」

「本当に？」

「あの管ね、二本は屋台の中で地面に埋もれちゃってるんだけど、一本だけ足元に転がってたの。その管の先からこのホースが出てて、ホースの先に栓がついてたのよ、ほら」そう言ってイメルはホースの先端を顔の前に差し出した。確かにそのホースの先には短いレバーがついている。それを九十度回すと水が出る仕組みのようだ。

「引っ張ってみたらここまで伸びただけけど、これが限界みたい。でも水浴びもできるし、飲んでも大丈夫だと思うけど」

「イメル、ちょっと待ってて」そう言って私はイメルの言葉を遮ると、真っ直ぐに崖の方に歩いていって、崖の一步手前でうつ伏せに寝た。そしてずると体を引きずりながら慎重に崖から顔ひとつ分だけ出し、崖の下を覗き込んだ。後ろで「気をつけてよ！」とイメルが叫ぶのが聞こえた。

「やっぱり」

思った通りだった。ハンバーガー屋から伸びた三本の太い管は崖の下まで吊り下がり、海面の少し手前に突き出た岩盤の上で、崖の断面に飲まれるように消えていた。

「何があるの？」とイメルが大声で叫んだ。私は返事をせずに体を引いてそっと立ち上がると、今度は崖に沿ってハンバーガー屋の方へ歩き、三本の管のところでしゃがみ込んだ。

「ねえ、どうしたの？」我慢ができなくなったらしく、イメルがホースを置いて私のところへ近づいてきた。

「昨日これを見たときに気づけばよかったんだ」と私は言った。

「どういうこと？」

「自給自足はできるんだ。ニワトリとトマトとレタスがあればいい。育てるのはそんなに難しくない。でも、どうやって肉を焼く？ どうやって流しを使う？ どうやって水を捨てる？」

首を傾げて私を見ているイメルに向かって、私は言った。

「あのホースは水。残りの二本は電気と排水だよ」

「電気？」

「そう。電気」

はじめは電気コンロは携帯用のガスボンベで動くのかと思っていた。でもボンベだっていつかはなくなるし、補充しようにもこの島の中では到底無理な話だ。水だってその辺に

捨てればよいような気もするが、ハンバーガー屋の屋台の周りには水を捨てたような形跡はないし、それなら流しなんて必要がないことになる。真水には驚いたが、この高さまでいちいち海水を運んでくるとなれば、相当な労力が必要だ。そうなれば答えはひとつ。

「この断崖絶壁の下に、発電機と、海水を淡水に変える装置がある」と私は言った。

「信じられないんだけど」とイメルは言った。

「でもそう考えるしかない。たぶん波力発電だと思う」

「何それ」

「波の力で発電機を回して電気を作るんだ。この崖の下の方、見ただろう。ものすごい勢いで波が押し寄せてる。あの波があれば電気コンロのひとつやふたつ、簡単に動かせる」

「すごいなあ」とイメルが言った。本当に感心しているようだった。

「あの電気コンロ、使ってみた？」と私が聞くと、ううん、と言ってイメルは首を横に振った。「コンロも流しもちゃんと使えるはずだ。屋台の足元に埋まってる太い管の中に、電源コードと排水管が通ってるんだ。あの太いのは防護用の管で、雨とか太陽の熱でコードやホースが痛まないようにしてる」

「はあ」とイメルはため息をついた。「ねえ、それってこの島にいるのはそんなに危機的状況じゃないってこと？」

「まあ最悪の状況じゃないってことは確かだ。水もあるし食べ物もある。永久ってわけじゃないにしても、一週間で餓死するようなことはないだろう」

「あーあ」とイメルが言った。「何か気が抜けちゃった。バカみたい。何でもっと早く気づかなかったんだろう。大体ハンバーガー屋がある時点でおかしいとおもわなきゃダメなのにね」

「まあね」と私は言った。「でも、宇宙人はいるんだろう？」

「いるよ。あたし会ったもん。でも、それもどうでもよくなってきた」

「どうして？」

「生き残るためには宇宙人の力だって借りないといけないのかなって思ってたから」

「でも僕はまだ宇宙人に会ってない」

「会いたいの？」

「ここまで来たら、そりゃあ少しはね。土産話になるし」

「もう」そう言ってイメルは笑った。「能天気なこと言ってるで、脱出の方法でも考えてよ。電気や水があったからって、ここから出られるわけじゃないんだから」

「それもそうだ」そう言って私も笑った。

そのとき、風に乗って犬の鳴き声が聞こえたような気がした。私があることを口にするより先に、イメルが「バンズだ！」と言って小屋の方角へ駆け出した。

物音は小屋の中から聞こえてきた。私が開けたままにしていた入口のドアから入ったようだが、暗がりでは姿は見えなかった。何かがガサガサと動く音がしたかと思うと、その音

が急にやみ、クシュ、クシュとくしゃみをするような音に続いて、またわらを擦り合わせる音が聞こえた。イメルが声をかけても何の反応も見せず、相変わらずわらの中を嗅ぎまわっているようだった。ところが私がヒュウッと口笛を吹いた瞬間、小屋の中が静まり返り、それに続いて「ワン！」という甲高い鳴き声が聞こえたかと思うと、まるで黒い生地を丸くちぎり取るように小さな影がすうつと闇の中から現れた。

それは小さな犬だった。その犬は私とイメルを順番に見上げ、それから短い尻尾を振りながらトコトコとイメルのところに近寄った。「バンズ！」イメルはその場に膝をつき、両手を広げた。

それは小さなヨークシャー・テリアだった。真っ黒な毛に全身が覆われていて、どこまでが鼻でどこまでが耳なのか、よくわからなかった。私にはただの真っ黒い毛糸の塊に見えた。

「よしよし、よく戻ってきたね」と言ってイメルはバンズの頭をくしゃくしゃと撫でた。ぼさぼさの毛がますますぼさぼさになったが、イメルはあまり気にしていないようだった。「ねえ、見て、ハンバーガーをくわえてる」そう言ってイメルがバンズの顎を持ち上げると、確かにハンバーガーの切れ端を口にくわえていた。その角度から見ると、とてもかわいい顔をしているのはわかったが、きよろきよろと目が動いたびに白目の部分が見えるのが不気味だった。私は何となくバンズが荒らしていたところが気になって、バンズとじゃれているイメルを放っておいて小屋に入った。暗闇に目が慣れるのを待ってから小屋の中を見渡した。部屋中のわらがめちやくちやにひっくり返されていたが、よく見ると部屋の一番右奥の隅のところが集中的に荒らされているのがわかった。わらを踏みつけながら部屋の奥へと五、六歩進んだところで、何か柔らかいものを踏みつけた気がして足元を見た。そこにはバンズが——ハンバーガーのパンが——大量に転がっていた。さらに足元をよく見ると、わらの間から木材のようなものが顔を覗かせているのが見えた。その上のわらをかき分けると、それが蓋のついた浅い棺おけくらいの大きさの木製の箱だということがわかった。

「イメル！ バンズがある！」私が振り返ってそう叫ぶと、イメルは意味がわからないといった顔をしてこちらを見た。

その木箱の蓋は人間の頭が入るくらいずれていたが、中身までは見えない。力任せにその蓋を蹴りつけると、ズズツという音がして蓋が大きく動いた。箱の中には案の定バンズがぎゅしりと詰め込まれていた。

「ねえ、何かあるの？」とイメルが聞いた。

「ここはバンズの家じゃないんだ」と私は言った。「ここはバンズを保管しておく場所だったんだ」

「——えっと、意味がわからないんだけど」イメルは眉をしかめて私を見た。

「ほら、これ」そう言って私は木箱を指差した。するとイメルは何かを考える様子でその

木箱を見ていたが、しばらくして「ああ、そのバンズね」と言って納得したようだった。
「この家の主はここを倉庫として使ってたんじゃないかな。たぶん上等な桐でできてるんだと思う。湿気にも強くて、バンズが長持ちする。ついでにバンズからも守る」

「なるほど」とイメルは言った。「それにしても、またややこしい名前をつけたものね。バンズ、バンズって、どっちのバンズかわからないじゃない」

「同感だ」と私は言った。「でも勝手に他人の飼ってる犬の名前を変えるわけにもいかないし」

「じゃあさ、ハンバーガーのパンのことを普通にパンって呼ぶってのはどう？」とイメルが言った。

「それがいい」と私は言った。シンプルだが、名案だった。

私たちがそんなやり取りをしている間、バンズは小屋の中に落ちているパンを嬉しそうにひきちぎって遊んでいた。

私は床に落ちていたパンを拾って四つだけを手元に残し、残りを全部箱の中に戻してから重い蓋を閉めた。蓋を閉めたときに、木箱の向こうに米俵のようなものがあるのが見えた。上に乗っていたわらをのけると、それはばんばんに膨らんだ大きな麻袋だった。袋の口を開けると、中には小麦粉らしき白い粉が入っていた。

「これでパンを作るってわけね」とイメルが言った。さらにその麻袋と壁の隙間に、丈夫そうなロープが落ちているのをイメルが見つけた。壁に掛けてあったものが何かの拍子に落ちたのだろう。

「色々あるね」とイメルが言った。

「まったくだ」

「それにしても、この蓋、開いたままだったのかな」

「宇宙人が戻すのを忘れてたんだろう。あのまま放っておいたら、今ごろバンズが箱からパンを全部出してたさ」

「そうね。気づいてよかった」とイメルが言った。「ところで、それどうするの？」

「何？」

「それよ」と言ってイメルは私の持つているパンを指差した。

「朝飯を作るんだ」と私は言った。

「ハンバーガーでしょ？」

「そう」

「肉はどうするの？ あのニワトリを食べるわけ？」

「いいアイデアがある」

「何？」

「いいから、ちょっと裏の畑でレタスを採ってきてくれないか？ トマトも熟れてるのがあれば一緒に。僕は先にハンバーガー屋のところで待ってるから」

「ふうん、訳ありってことね」そう言ってイメルは小屋を出て、裏の畑へ向かった。パンズもイメルの小さな足を追いかけるようにして勢いよく小屋を出て行った。

私はハンバーガー屋に着くと、パンをまな板の上に置いてから屋台の中にしやがみ込んだ。流しの下に張りつけてある板を外すと、予想通りその中に小型の冷凍庫がはめ込んであった。その中にはカチカチに凍った丸い肉がいくつも詰め込まれていた。私はその中から大きめの肉を二つ取り出すと、それをフライパンに入れて電気コンロにかけた。三十秒ほどでパチパチという音がして、フライパンが温まってきた。

遅れてやってきたイメルは屋台から薄い煙が上がっているのを見て驚いたらしく、ちぎったレタスとまだ少し青いトマトを持って走ってきた。

「どうしたのそれ？」

「冷凍庫があるんだ」と私は言った。「いくら宇宙人でも、毎回ハンバーガーを作るたびにニワトリをさばくのは大変だろう？ だから電気コンロがあるんだから、冷蔵庫くらいあるんじゃないかなって思ってたんだ。小さな簡易式の冷凍庫だったけど、ちゃんと動いてるみたいだ」

「なるほどね」そう言ってイメルは屋台の中を覗き込み、冷凍庫のある場所を確認した。

「これでようやくハンバーガーが食べられるってわけね」

「とりあえずはね。でもまだ問題はある」と私は言った。「冷凍の肉が切れたらニワトリをさばかないといけないのと、パンの数に限りがあること」

「そっか」とイメルは腕組みをして言った。「小麦粉があるのはいいけど、そこからパンを作る方法っていうと、ちよつとね。それにほら、イースト菌とか他にも何かいるんでしょ、パンを作るには」

「そうだろうね。それにもし材料があってパンの作り方を知ってたとしても、電気コンロひとつでパンを焼くのはかなり難しいんじゃないかな。オーブンを使うんだろう、普通は」と私が言うと、イメルは黙り込んでしまった。

「でもまあ、しばらくは大丈夫だ。パンが尽きるまでに助けが来るか、脱出すればいいんだから」

「何かすごく簡単に言うよね」

「仕方ないさ」私は言った。「とにかくハンバーガーでも食べてひと息つこう。そうすればまた次のことが思い浮かぶ」

「そうだね。さすがにお腹も減ったから」

そうやって私たちは丸一日ぶりの食事にありついた。味の方はというと、新鮮な材料のおかげか、これが意外においしかった。採れたてのレタスにはしゃりつとした歯ごたえとみずみずしさがあり、まだ青いように見えたトマトにはしっかりした甘みがあった。冷凍されていた肉にはちゃんと塩味がついていて、味付けはそれで十分だった。確かにイメル

の言う通り、ケチャップとチーズがあればかなりおいしいハンバーガーになるだろう。もちろん一日三回同じものを食べることを思うとうんざりしなくもないが、贅沢を言えるような状況ではない。

ハンバーガーを食べ終わると、私はイメルにホースの先を持ってもらって包丁とフライパンを洗った。予想していた通り、油の混じった水がゴボゴボと足元の管の中を流れていく音がした。私は屋根から吊り下がった針金にフライパンを引っ掛け、冷凍庫のドアを閉めなおし、最後に電気コンロのスイッチがオフになっていることを確認した。

「あれ？ バンズは？」私はバンズの姿をさっきから見えていないことに気がついた。

「畑でニワトリとじやれてる」

「大丈夫なの？」

「仲良さそうに遊んでたよ。間違っても食べたりはしないみたい」

「変わった犬だ」と私は言った。

それから私たちは屋台でホースの水を飲みながら相談した結果、その日の午後は南の浜辺に『HELP』の文字を書いてから、イカダの材料になりそうな木を探すことにした。

南の浜辺は相変わらず美しかった。イメルのいた東の浜辺よりも三倍は広く、砂も均一で、砂の白さも鮮やかに見えた。太陽がよく当たるせいなのかもしれない。

イメルは松の木の下で拾った枝を持って、元気に砂浜の中央へ向かって駆け出した。私はイメルが文字を書くのを松の木の下に座って眺めていた。イメルは東の浜辺に書いたものよりも倍くらいの大きさの、太い中抜き文字を書いた。

出来上がった文字を正面から見ようと立ち上がったとき、隣の松の木の下に黒い箱のようなものが置いてあるのが見えた。近寄ると、それは弁当箱くらいの大きさの旧式のラジカセだった。砂をかぶってはいたが、電源はちゃんと入るようだった。ラジカセをひっくり返して電池ケースの蓋を開けると、四本の単三乾電池が狭苦しそうに肩を寄せて並んでいた。私は遠くにいるイメルに向かって、「おい！ いいものがあるぞー！」と叫んだ。イメルは「何！」と叫んだだけでこちらへ来る気配がなかったので、私は「音楽が聴けるぞ！」ともっと大きな声で怒鳴った。するとイメルは手に持っていたものを投げ出して、一直線に私のところへ走ってきた。

「なになに、何があるって？」

「ほら、これ」そう言って私は黒いプラスチックの箱を差し出した。

「何これ？」

「ラジカセ。古いけど」

「これがラジカセ？ほんとに？」そう言いながらもイメルは目を爛々と輝かせ、ラジカセを手にとって眺め回した。彼女はまずカセットの取り出しボタンを押したが、蓋は開かなかった。それは私もさっき試してみたが、ダメだった。砂を噛みこんでいるせいだろう。

するとイメルは今度はラジオに切り替えて、チューニングをいじり始めた。しかし小さなスピーカーからはザザザザというホワイト・ノイズが聞こえてくるだけで、ラジオの電波を受信する気配はなかった。最後にイメルはカセットの再生ボタンを押した。するとカセットがガジガジと嫌な音を立てて回り始めた。しばらくしてその音が止んだところで、女性ボーカルの声が聞こえてきた。

アーイドンツ、ウオオオオオオウン

「あああ！ フェアグラウンドだ！」イメルは叫んだかと思うと、両手を上げてぴょんぴょんと砂浜の上で飛び跳ね始めた。飛び跳ねながら、彼女は「やったあ、やったあ！」と叫び続けていた。私にはわからなかったが、音楽が聴けるのがよっぽど嬉しかったのだろう。ラジカセからは底抜けに明るい声と軽い楽器の音がイメルの笑顔を煽るように次々に流れ出していた。小さなスピーカーはイメルの手の中で震え、あたりの空気を躍らせた。

一曲目が終わるまでの間、イメルは木陰の中でラジカセから聞こえてくる歌に合わせて英語の歌詞を歌い続けた。ラジカセと声量比べをしているのかと思うくらい、彼女は意地になって声を張り上げていた。おかげで私にはそのボーカルの声がどんな声なのか、最後までわからなかった。

「ねえねえ、ちよつと最高だと思わない？」歌い終わったイメルが息を切らしながら言った。

「好きな曲？」と私が聞くと、「大好き！」とイメルは嬉しそうに声を張り上げた。

私とイメルは松の木の下に並んで座って、そのカセットの続きを聴いた。イメルは残りの曲もよく知っているらしく、歌詞をほとんど覚えていた。

カセットが最後まで回ってしまうと、ラジカセは自動的に巻き戻しを始めた。カセットを出してひっくり返さないと反対の面を聴けないようだった。私は停止ボタンを押して巻き戻しを止め、もう一度カセットを取り出せないか試してみたが、やはり蓋は開かなかった。

「まあ、開かなくてもいいや」とイメルが言った。「何度でも巻き戻して聴けばいいんだし」「でも、困ったな」と私は言った。「電池で動いてるから、電池が切れると動かなくなるんだ。巻き戻しは電力を食うから、できればやめた方がいい」

「そうなの？」とイメルは残念そうに言った。

「そうだよ。昔は電池も高かったし充電式の電池なんてなかったから、巻き戻しをするのがもったいなくて、カセットを最後まで聴いたら手で巻き戻したもんさ」と私は言った。

「それって、いつの時代の話？」

「ソニーがウォークマンを発明した時代」と私が誇らしげに言うと、イメルは首を傾げてその黒いプラスチックの箱を見つめた。

「屋台の電気じゃ動かないんだよね」

「動かないね。電池がいる」

「じゃあ、やっぱり何とかして蓋を開けないと」とイメルは言った。「再生するだけなら、電池ってどのくらいもつものなの？」

「さあ、どうだろう」そう言っただけで私は腕組みをして考えた。「電池が新品だとして、四時間くらいじゃないかな」

「ええー、そんなに短いの？」

「古いタイプだからね。昔のラジカセはみんな電池の減りが早いんだ。これは小さいからもう少しもつと思うけど、まあ最悪そのくらいだと思っただけが気が楽だ」

「っていうことは、一曲四分として、あと――」

「六十回だな」と私は言った。

「少ない！ それじゃ少な過ぎるよ！ 一日一曲で二ヵ月しかもたないじゃない！」とイメルはまた大きな声を出した。私はそれを聞いて、「二ヶ月もいるつもりなのか？」と言いかけたが、何とか踏みとどまった。

「あるだけいいと思わない」と私は言ったが、イメルは聞いていないようだった。その証拠に、しばらく沈黙があった後で、彼女は「ま、いっか、あるだけましだね」と独り言のように言った。私は「そうだよ」と軽く相槌を打っておいた。

私とイメルは砂浜を後にして島の中央部に戻ると、今度は手分けをしてイカダ用の木を集めることにした。私は主に島の中央部を、イメルは浜辺を探すことにした。しかしこの作業は思ったほど難航した。木はいくらでも生えているものの、島の大部分を占める松の木は枝はどれも細く、真っ直ぐでなかったせいもあって、とてもイカダを作るのに適しているようには見えなかった。所々に生えているオリーブの木は松の木よりもさらに細く、イカダ作りには向いていなかった。

結局、三時間ほど島の中を歩き回った末に二人で集められたのは、何の木かわからないようないびつな形の枝ばかりだった。そのほとんどはイメルが西の浜辺で拾ってきたもので、その大半は雨か海水のせいで腐っていて、おまけに長さがばらばらだった。集めた枝を宇宙人の小屋の中に並べてみたが、それは何とも不思議な眺めだった。一体それで何を作ろうとしているのか、事情を知らない人間が見たら何度首をひねってもわからないような気がした。「実はこの中にひとつだけ宇宙人の死体が混じっています」と言えば簡単に納得してもらえそうなくらい、それはそれは奇妙な眺めだった。

「ねえ」とイメルが言った。「これでほんとに作れるわけ？」

「難しいね」私は正直に言った。

「でも、あたしが悪いんじゃないよね。だって、これしかなかったんだもん」

「誰も悪くないよ」

それから私たちは日が暮れるまでにハンバーガーをひとつずつ食べ、畑でニワトリとバンズとじゃれながら過ごした。バンズはイメルがあげたパンを半分だけ食べると、何か大事な用事を思い出したようにどこかへ走って行って、その日は戻ってこなかった。バンズがいなくなると、畑のニワトリは今日の仕事は終えたと言わんばかりに声を揃えて高らかにひと鳴きして、ぴたりと鳴かなくなった。

日が完全に沈んでしまうと、私とイメルは昨日と同じようにわらくるまって眠りについていた。完全に眠りに落ちるまで、私は隣で寝ている宇宙人の死体のことが気になって落ちつかなかった。静まり返った小屋の中は、少しだけ潮の臭いがした。

08



その週末、僕は家から一步も出なかった。土曜日の授業が突然キャンセルになったせいで、外に出る用事がなくなったのだ。おまけに土曜日は昼前から雨が降り出した。今日はもう外に出るなど言わんばかりの雨だった。

僕は雨が嫌いだ。雨自体は嫌いではないけれど、雨が連れてくる大小の付属物が嫌いなのだ。例えば雨雲。いつ途切れるとも知れない厚く長い雲の重みは、僕の心をいとも簡単に憂鬱にしてくれる。空が晴れてさえいれば雨に濡れるのはかえって気持ちいいくらいなのだけれど、大抵の場合そうはいかない。それから傘も嫌いだ。手ぶらを性分としている僕にとつて、傘を持って歩くことは面倒を通り越して苦痛でしかない。しかも自分の傘だけでなく他人の傘がからんでくると、事態はもっと悪くなる。まず傘を持って電車やバスに乗るのは絶対に避けるようにしている。なるべく店にも入らないようにしている。デパートや本屋はもちろん、スーパーにだって入りたくない。万が一避けて通れない場合には、必ず入口に置いてあるビニール袋に傘を入れるようにしている。それがない店には何があっても絶対に入らない。他にもいくつかあるけれど、中でも一番僕が嫌いなのは、雨が跳ね上げる泥がスニーカーとジーンズにこびりつくことだ。もし雨の日には裸足にショート・パンツという姿で街を歩いていいものなら、是非ともそうしたい。素足についた泥は後でシャワーを浴びればすむのだ。でもジーンズとスニーカーの泥は洗わなければとれない。僕はジーンズを洗うのが、母親の下着を洗うよりも嫌いなのだ。

そういうわけで、僕は雨が嫌いだ。

日曜日には雨は上がったけれど、アスファルトに残っている雨を太陽が蒸し返したせいで、僕は朝から部屋中の窓を閉めてエアコンをつけた。翌日の湿度の高さも、僕が雨を嫌いな理由のうちのひとつだ。僕は午前中にビデオで映画を一本観て、昼過ぎにパンを三枚

焼いて食べ、ベッドに寝転んで軽めの文庫本を一冊読んでから、映画を二本観た。映画と映画の間に冷凍のピザを食べ、缶ビールを一本だけ飲んだ。最後の映画のクレジットが流れ出した頃になってふと令美のことを思い出し、長い間開けていなかったCDラックの引出しを開け、エディ・リーダーのCDを探した。でも思っていた場所に、思っていたCDがなかった。間違えて実家に送り返したのかもしれないと思い、CDを探すのをあきらめた。CDの代わりになるものが何かないかと思つて冷蔵庫を開けてみたけれど、中身はほとんど空っぽだった。残っていた最後の缶ビールを飲んで眠くなってきた頃には、日曜日が終わっていた。そういう風にして僕の一日はいとも簡単に終わることがある。

その次の週の前半は、その日曜日が象徴するような退屈の中の王様のように退屈な日が続いた。何もしなくても時間が過ぎ、何も努力しなくても仕事が終わる、何も考えなくても腹だけは減った。天気が続いたのがせめてもの救いだった。

水曜日の夜、夕食を作ろうと冷蔵庫の中を眺めているところに、もう何年も音信不通だった大学時代の友人から電話がかかってきた。松岡という名前のその男は、開口一番「保険のセールスをやってるんだ」と前置きをしておいてから、「ちよつと話を聞いてくれないか」と続けた。要するに、僕に保険を勧めるために電話をかけてきたのだ。

僕は大学時代からずっと同じアパートに住んでいたから、思いがけず受話器越しに懐かしい声を聞くことがある。そういう風に突然かかってくる電話のほとんどは、新しく始めた仕事からみだ。クレジット・カードを作れ、何とかの会員になれ、安い国際電話をかけるならうちにしろ、ひどいものになるとどこかの新しい宗教の勧誘だったりもする。でも残念ながら僕だってクレジット・カードの一枚や二枚は持っているし、メンバーの誰とも顔も合わないような名前だけの集まりに加わるつもりは今のところない。国際電話をかける相手なんか思いつかないし、手始めに電話で勧誘してくるような宗教団体には興味がない。だいたいそんなやり方で一体どこの誰が真面目に話を聞いてくれると思っているのか、僕にはとても理解できない。僕と彼らの間には、時間というどうにも埋めがたい長い距離と、信頼関係というどうにも埋めがたい深い溝がある。そんな二人がたった一本の電話で一体何を始められるというのだろう。もちろんそれを平気でやっける彼らのチャレンジ精神にある種の敬意を表さないではないけれど。

そうは言っても、僕はそういう唐突な電話が嫌いな訳ではない。中にはときどきではあるけれども非常に興味深いものがあるからだ。結婚式や同窓会の案内、友人を探しているのだが連絡先を知っていたら教えて欲しいという旨の電話、知り合いの誰々が株に失敗したとか、何とか取引法違反で新聞に載ったとかいうような頼んでもいない不定期報告。そしてごくごく稀に、昔の彼女からの電話というのもある。内容はともあれ、そのどれもが僕がまだ細くはあるけれども人との繋がりを保っているということを親切に、そして遠回しに教えてくれる。だから興味深い。でも今日の場合は残念ながら僕は彼の顔を覚えて

いなかった。本当に悪いと思っている。

僕はそんなことを考えながら、彼の説明を上の方で、でも一応うんうんと頷きながら聞いていた。長い話が終わりそうな頃を見計らって、僕は「ところでさ」と彼の言葉を遮り、「教えて欲しいんだけど、健康保険と社会保険って、どう違うんだ？」と聞いてみた。すると彼はうまく答えられないのか、バカにしているのかよくわからないような変な間を置いてから、「おまえ、将来を大事にしろよ」と一言だけ言い残すと、大事な花瓶を床の間に戻すようにそっと受話器を置いた。そっと置いたわりには、ブツツという大きな音がして電話が切れた。

木曜日の前半の授業は絵に描いたような授業だった。絵に描いたような授業というのを説明するのはなかなか難しいのだけれど、要するに一度も邪魔が入らず、一度も横道に逸れなかった授業のことだ。家庭教師というのを体験したことのない人（教師としても、生徒としても）には想像できないかもしれないけれど、そういう授業というのは本当にめずらしい。生徒の部屋で授業をするというのは、誘惑との闘いでもあるからだ。部屋の中に置いてある生徒の持ち物のうち、大雑把に言って七割以上は趣味・娯楽の類に分類され、我々家庭教師が授業を円滑に進めるために最も注意を払うのがそれらの――全体の七割の――持ち物なのだ。その七割の誘惑は、机の上はもちろん、部屋のあちこちに潜んでいる。数ある誘惑の中でも一番手強いのはマンガで、次にCDと携帯電話、それに卒業アルバムだ。彼らは隙を見ては「先生、これ知ってる？」の一言を呼び水にして、それらを巧みに取り出してみせる。でも残念ながら僕はマンガには興味がないし、彼らとは聴いている音楽の種類が全然違うし、卒業アルバムを見せられてもどんなコメントを返していいのかわからずさっぱりわからない。他にも変わった趣味を持っていて、それをとにかく僕に見せたがる生徒がいるのだけれど、これも残念ながら話が数分しかもたない。その趣味の独自性のせいで、そもそも会話が発展する見込みが欠如しているからだ。要するに、僕が話を合わせられないのだ。

ただし、もちろん例外はある。

三年ほど前に教えていた高校二年生の男の子の趣味が、ルービック・キューブだった。自慢ではないけれど、僕はルービック・キューブに関してはちょっとした記録を持っている。小学校四年生のときに、町の神社で毎年行われる秋祭りにルービック・キューブを完成させる早さを競うイベントがあり、僕は本番一発勝負の舞台の上で、三十九秒という驚異的な記録を打ち立てたのだ。確かルービック・キューブが異様なほど流行ったのが一九八〇年代の前半だったと思うけれど、そのブームが下火になった頃に父親がふと思いついたように買ってきたルービック・キューブを僕は一目で気に入ったのだった。僕はそれをそれこそ毎日朝から晩まで持ち歩いては暇さえあればいじくりまわした。もちろん学校で見つかると思収められるので、普段はランドセルの底に隠し、登下校のときにだけ取り出し

て下を向いて歩きながら組み立てた。日曜日には友達の誘いを全部断り、部屋にこもってルービック・キューブで遊んだ。何事にも寛容だった両親もその熱狂ぶりにはさすがに心を砕いたそうだが、そんな両親の心配をよそに、僕のルービック・キューブへの執着心は日に日に増していった。食卓はもちろん、トイレや風呂の中にまで持ちこんで遊んでいるうちに、鮮やかな原色だったキューブの色はすっかり落ちてしまい、僕は父親に無理を言っ
て二つ目のルービック・キューブを買ってもらった。

ひとつ目のキューブを捨てるのはさすがに忍びなかったらしく、今度は父親がそのぼろぼろのキューブに挑戦し始めた。いくらやっても攻略できない父親がついに僕に救いを求めてきたとき、僕は「キューブの完成形はひとつしかないんだよ。サイコロと同じさ」とアドバイスした。父親はそれを聞いて「なるほどなあ」とずいぶん感心していたけれど、結局最後までキューブを完成させることはできなかった。その後、そのキューブは飼犬のいい遊び道具になった。

二つ目のキューブの色がいい感じで落ちてきたある日、僕はあることに気がついた。それはキューブを崩す技術についてだった。組み立てたキューブは必ず崩す必要がある。でも面倒臭いからと言って中途半端に崩したキューブは、あつという間に完成してしまう。それはつまり、キューブの崩し方には完成させるのと同様に何かしらのノウハウがあるということだ。しかも、完成形がひとつだけしかないのに対して、崩れたキューブのパターンの数は圧倒的に多い。そのときの僕にはその数を正確に算出するだけの知識はなかったけれど、僕はその崩れたキューブに新たな魅力を見出してしまったのだった。それからキューブを組み立てるよりも、キューブを色々な形に崩すことに時間を費やすようになった。崩れたキューブの美しいモザイク・パターンに魅せられた僕は、バラバラに崩れたままのキューブを嬉しそうに握り締めていた。それから一ヶ月くらいすると、ちよつと見ただけでそのキューブを完成させるのがどのくらい難しいかがわかるようになってしまった。ひとつの境地に到達したということだ。

ある日、僕は学校の帰りに見かけた秋祭りのポスターに『ルービック・キューブ小学生大会・参加者募集』の文字を見つけると、その日のうちに母親に頼んで、町役場に出場の申し込みをもらった。そして次の日から、友達に貸してもらったストップ・ウォッチで完成までのタイムを計るようになった。もちろん自分でバラバラに崩した状態から始めるのだ。難易度が最も高い、文字通りのバラバラの状態だ。はじめて計測したときのタイムは、確か一分二十秒前後だったと記憶している。二、三日のうちにタイムは一分を切ったが、そこからタイムをさらに縮めるのが大変だった。そのときの僕に必要なのは、とても高度なトレーニングだった。ひとつの面を揃えながら、次の面のことを考えるために、キューブの配置を三次元で把握し、何百通りもある手順の中から、一番完成に近いルートを瞬時に選び出していく。さらに素早い脳の動きに反応できるように、目と手の動きを洗練する。そういうトレーニングだ。するとあるときトイレの壁のタイルがパタパタと

動き出すような錯覚を覚えて以来、身の回りにあるありとあらゆるものがキューブに見えるようになった。交差点で足を止めると、信号機の三色のシグナルが頭の中で縦横にぐるぐると回転した。それは一種の病気とも言えるような状態だった。それでも猛特訓の成果はやがてはつきりとした数字になって表れた。本番の前日の時点で、タイムは四十七秒にまで縮まっていた。

本番は土曜日の夕方だった。僕は他の四、五人の小学生と一緒に仮設の舞台上上がり（確か一人だけ女の子がいた）、キューブを手渡された。僕はそのキューブを手の中ですくすく一回だけまわした。その瞬間、僕は言いようのない失望感と、内臓と一緒に吐き出してしまいたいほどの後ろめたさを覚えた。キューブの崩れ方が、僕の難易度でいくと十段階の下から七くらいだったのだ。確かにそれは大人がちゃんと考えて、それなりに崩したものだっただけけれど、僕に言わせればまだ不十分だった。気がつくスタートの笛が鳴っていた。僕は全力を出した。その結果、僕は三十九秒という圧倒的なタイムで優勝した。でもその秋祭りを最後に、僕はルービック・キューブを手放した。「熱しやすく、冷めやすいのよ」と両親が話していたのを覚えている。でもそれは違う。何事も熱しやすく、冷めやすいのだ。

僕が長いブランクの末、次にルービック・キューブを手にしたのは、高校二年生の男子の隣で数学の証明問題を解いていたときだった。彼が机の引出しからおもむろにルービック・キューブを取り出したとき、僕は思わず息を呑んだ。体中から血管が浮き出てくるのかと思うくらいぞくぞくした。その異様なほどの高揚感が収まるのを待つて、彼に「俺、速いんだぜ」と言った。結局、数学の問題を横に置いておいて、彼と勝負することになった。僕はキューブを念入りに崩し、彼に手渡した。すると彼は、「先生が負けたら今日の授業なしね」と言った。僕は快諾した。

そして僕は負けた。完敗だった。机の上にあった目覚まし時計の秒針によれば、僕は一分強、彼は三十秒を少し切ったくらいのタイムだった。僕は約束通り授業をあきらめ、二人で机に向かってマンガを読んだ。

「先生、フィンガー・ショットカットって知ってる？」と彼が言った。

「知らない。何それ」と聞き返すと、「先生にはまだ早いかな」と言って彼はまたマンガを読み始めた。

帰るときに玄関でスニーカーを履きながら、「昔はもっと早かったんだけどな」と僕は言った。彼は「わかってるよ」というような顔をして笑った。そのとき僕がどういう顔をしていたのかは覚えていない。たぶん大人びた嘘っぽい笑みを浮かべていたのだと思う。彼はその翌々年、関西の国立大学の農学部ToStraitで合格したが、それ以来連絡を取っていない。

「チャレンジするのをやめたんですね」と令美が言った。
「何の話？」

「保険屋の松岡さんの話です」

「——ああ、そうかもね」と僕は言った。

「先生だって、あとひと押しで落ちたかもしれないのに」

「それはないね」

「どうしてですか？」

「僕はもう大人なんだ」と僕は言った。

令美は休憩の時間になると、これまで僕が教えてきた生徒の話を書き取った。僕は「そうだなあ」と前置きをしてから、令美が喜びそうな話を選んで話した。それは、いつも着物を着て子供部屋で抹茶をたててくれる母親の話や、トイレに行くと言って一時間以上も帰ってこなかった女の子の話や、一年間に二十三人の家庭教師を雇った家庭の話や、インド象の親子の話や、ルービック・キューブの彼の話だった。令美は興味深そうに話を聞いた後、必ず最後に同じ質問をした。

「それ、本当の話ですか？」

僕は「もちろん本当だよ」と答えた。

それは本当に、本当の話なのだ。

09



その日もよく晴れた。私たちは朝からハンバーガーを食べ、水をがぶがぶ飲んだ後、二人で一緒に島の中をくまなく歩き回った。他にやることはないというのもあるが、もしかしら脱出の方法がひらめくような何かが見つかるかもしれないという消極的な動機に動かされてのことだ。でも島の中で目にしたものは、その期待を見事に裏切る美しい大自然だった。どの砂浜にも人工的な漂流物は見つからなかった。

太陽が島の真上を少し過ぎた頃、私たちは心地よい体の疲れを感じながら東の砂浜の真ん中に寝転がっていた。イメルはラジカセから流れる曲に合わせて、気持ち良さそうに鼻歌を歌っていた。

「これでパラソルとビーチ・チェアがあれば言うことないのにね」とイメルがぼやいた。
まさにその通りだった。

「それにしても」と私は言った。「日焼けをする気がしないと思わないか？」

「うん」と言ってイメルは両腕を上げて白い肌を眺めた。私も同じような姿勢をとって、

自分の手や腕を観察した。イメルほど白くはないものの、この二日間で皮膚の色が変わったようにはとても見えない。

「太陽が弱いのかな」とイメルが言った。

「あるいは我々の皮膚が強くなったか、だ」

「相当おかしな薬を飲まされたんだね」

「まったくだ」と私は言った。

私たち二人はこの時点で、イメルの言った『人体実験説』を受け入れていた。実験の内容やカラクリはわからないにしても、そう考えるのが自然だった。そうすれば、イメルが見たという宇宙人が薬による一時的な幻覚症状ということで説明できなくもない。あるいは精巧な着ぐるみを着た博士一味の仕業だと納得することもできる。世の中には普通の人間にはとても思いつかないようなことを思いつき、無茶を承知でそれを実践できる人間がいる。そしてそれに巻き込まれる役ばかりを引き受ける大多数の人間がいる。私はいつも後者で、前者になりうる素養は持ち合わせていないと思っているが、それにしても孤島に少女に宇宙人とは、ずいぶん変わったことを考える人間がいるものだ。

「その宇宙人、喋ったんだよね」と私は質問してみた。

「うん」とイメルは答えた。

「どんな声だった？」

「だみ声」

「言葉は？」

「標準語。だみ声で、標準語」

「他に覚えてることは？」

「さあ」と言つてイメルは何かを思い出しているようだった。「でもそれくらいかな。この前言った通りのルックスでしょ、だみ声で標準語でしょ、歩いてたでしょ」

そこで一曲目が終わった。イメルはテープを止め、カセットを取り出した。カセットの蓋は、いつの間にか開くようになっていた。あちこち持ち歩いているうちに、噛み込んでいた砂が自然と取れたのだろう。

「そう言えばさ」と私は言った。「宇宙人とは最後にどうやって別れたんだ？」

「最後って？」

「別れ際のこと」

「えっと、どうだったかな」

イメルはテープを指で巻き戻しながら、空を向いたまましばらく考え込んだ。私も空を見た。その向こうに、宇宙があるはずだった。

「あ、思い出した。宇宙人がね、ボクはもう寝るからって言つて店を閉め始めたの。寝るんなら東の砂浜の方が風が弱いからいいよって言われて、それで食べかけのハンバーガーを持ってここまで歩いて来たんだ。そのときにはもう太陽がほとんど沈んでたからすぐ眠

くなって寝ちゃって。目が覚めたのはすごく早い時間だっと思うけど、島の中をちょっと散歩して、絶望的な気分になって、でも何もやることがないからまたここに戻ってきて二度寝してたの。そしたら誰かさんが『おーい！』って叫んでるのを聞いて目が覚めた」

「そうだったのか」と私は言った。「道理で機嫌が悪かったわけだ」

「寝起きだったからね」とイメルは言った。

「こっちは人がいると思って興奮してたからさ」

私がそう言うと、イメルが「え？」と大きな声を出した。「あなたほんとに島には自分だけしかないと思ってたの？」

「そうだよ。どうして？」

「マンガか映画の見過ぎじゃないの？」

「そうかな」

「そうだよ。普通あり得ないでしょ、そんな状況」

「そんなこと言われても——現実はいくら変わらないだろう。人が一人いるか二人いるかの違いだよ」

「その一人の違いが大きいわけでしょ、実際」とイメルは口調を荒げた。その通りだった。返す言葉がなく、私がしばらく足元の砂を蹴りながら黙っていると、イメルがまた思い出したように話した。

「宇宙人のこと、どう思う？」

「どうって？」

「あたしが嘘言ってると思う？」

「さあ、わからないな、正直言って」

「半分は信じてるってこと？」

「まあそうだね」

「ふうん」

「ところで」と私は言った。「家には誘われなかったのか？」

「宇宙人に？」

「そう、宇宙人の家に」

ずっと気になっていた質問だった。

「まさか」とイメルは軽く答えた。「誘われても、行かないよ。あたし、宇宙人と寝るほど趣味悪くないから」

それを聞いて、私はなぜか安心した。趣味が悪いことを考えていたのは自分の方かもしれないと思った。

「でもそのときはまだ頭がぼうつとしてて、あんまり考えずに行動してた気がする。そうでなきゃ、宇宙人を質問攻めにしてただろうし」

「そうか」

私はそれ以上追及するのはやめた。イメルもあまり細かいところまでは覚えていないようだったし、それにそれ以上何を知らうとしているのか、自分でもよくわからなかったからだ。

私は立ち上がって波打ち際に近づいた。海水はやはり生温かった。海に入って沖へ向かって歩くと、十歩くらいで海面が膝のすぐ下まできた。振り向くとイメルも海に入ろうとしているところだった。

「気持ちいいね」とイメルが言った。私は大袈裟に頷いて見せた。

「ここに至つていゝつてのはどう？」とイメルは言った。

「それもいいかもしれないな。海もある。山もある。電気もある。食べ物もある。でも、ずつとつていうのは――どうだろう」

「限界があるつて言いたいんでしょ」とイメルは言った。「わかつてるつてば、そんなこと。ただ言つてみただけじゃない」

それを聞いて私が「ああ、うん、そうか」とぶつぶつ言いながら海の中を覗き込んでみると、イメルがそつと近寄つてきて足を勢いよく前に蹴り出した。海面から水しぶきが上がり、私のTシャツに少しかかった。「やったな」と言つて私は手で海水をすくつて前に飛ばしたが、イメルのところまでは届かなかった。

「濡れたついでに泳げば？」とイメルは笑いながら言った。「泳げるんでしょ」

「たぶんね」と私は言った。

「覚えてないの？」とイメルが言った。

「人並みには泳げる気がするけど」と私は適当なことを言った。

「じゃあ泳げば？ 気持ちいいよ、きつと」

「イメルは？」

「あたしはたぶんだめ。体が海を怖がつてる気がするから」とイメルは言った。

確かにこの海で泳ぐのも悪くないなと私は思った。それを今まで思いつかなかったのが不思議だった。私は一度砂浜に戻り、Tシャツを脱いでその辺に放り投げるとまた海へ戻り、ゆつくりと膝を曲げて海水に体を馴染ませていった。

「どう？」とイメルが後ろの方で叫んだ。

「気持ちいい。泳げそうだ」

足元の砂がどんどん体から遠ざかつていく一方で、私の体はあっさりと海に溶け込んでいった。海面が顔に近づいてくると、波が跳ね上げたしぶきが顔にかかった。そしてついに体が浮いた。

手と足を思いつくままに動かすと、私の体は不思議な開放感とともに海の中を漂った。海水から出ている首から上の部分と、海の中でもがいている首から下の部分がまるで別の生き物のように感じられた。二つの生物は別の世界に生きて、別の世界を見ているようだ

った。ときどき大きな波に飲み込まれて、頭が海水の中にすっぽりと入ってしまうこともあった。そのたびに私は目を閉じ、口を閉じ、息を止めた。その間は時間が止まっているように感じた。砂浜ではイメルがずっと私の方を見ていた。ときどき何かを言っていたようだが、よく聞き取れなかった。五分ほど海に浮いた後、私は海と体をいたわるようにゆっくりと水をかいて砂浜の方に戻った。足が海底につくところまで戻ったところで、イメルが「大丈夫だった？」と心配そうに聞いた。「どうして？」と聞き返すと、イメルは「ときどき溺れてるように見えたから」と言って笑った。

海から上がると、体がずっしりと重くなったように感じた。滴り落ちる海水が砂浜に大小の灰色のしみをつけていった。

「気持ちよかったよ」と私は言った。

「よかったね」

「イメルも泳げば？」

「やめとく。嫌な予感がするから」

「そうか」と私が言うと「浮き輪でもあれば別だけどね」とイメルは言った。その目が、本当は泳ぎたいんだけど、と言っているような気がした。

「丸太でもあればいいのに」と私は言った。

「浮き輪の代わりに？」

「そう」

「そんなものあったら、イカダを作るけど」とイメルが言った。もっともな話だ。

「あ、そうだ」イメルが何かをひらめいたようだった。私はハーフ・パンツを不器用に絞りながらイメルを見た。「ほら、あれを壊すっていうのは駄目？」

「何を？」

「丸太小屋」

「ああ、丸太小屋か。いけるかもしれない」と私は言った。

濡れた体のままTシャツを着ると、私たちは丸太小屋を観察するために東の浜辺を後にした。

「裸足っていうのも案外気持ちいいもんだな」私は前を歩いていたイメルに言った。

「そうだね。自然と触れ合ってるっていう感じがする。そんなに痛くないよね、慣れたのかな」イメルは自分のつま先を見ながら言った。

「痛みに慣れた、か」と私は独り言を言うように呟いた。

「そうじゃないと思うの？」

「いや、普通ならそう考えるのが自然なんだけど、例えば痛みっていうのがどんなものかわからなくなったっていう気はしないか？」

イメルは少しの間考えてから、「わからない」と小さな声で呟いた。「でも、そう言えば

最初にそんなこと言ってたね」

私は頷いた。「でも嫌な感じじゃない。昨日も言ったように、何もかもが新しく感じるんだ。すべての刺激を生まれてはじめて感じているような気がして、それにどう対応しているのかわからないっていうのかな。単純に麻酔にかかっているとこういう話ではない気がする。あまりにも自然過ぎるんだ、この鈍さが」

「うーん」とイメルはうなった。「ちょっと難しいけど——でもね、実はあたしも気になっ
てることがあるんだ」

「何？」

「恥ずかしい話なんだけど、あたし、もう丸一日トイレに行ってないの」

「本当に？」

「ほんとよ。別に我慢してるってわけじゃないの。したくなったら、あたしだってその辺でするよ。トイレがないなんてバカみたいなことはもう言わないし。でも、全然したくないの。これって、病気かな」

「さあ、どうだろうね」と言って私は考え込んでしまった。実際の話、私もそのことに気がついていて。いつもより水分をとる量が少ないとはいえ、私も昨日から一回しか用を足していない。やはり痛みを感じなくなったことと無関係ではない気がする。

「ほんとに薬だけでそんな風になるのかな？」とイメルが誰にともなく訊ねた。私は「ん
ん」と低くうなっただけで、その質問には答えられなかった。

丸太小屋に着くと、私はもう一度小屋のまわりをぐるっとひとまわりしてみた。もとの場所に戻ってくると、今度はイメルが反対回りに歩いた。窓がないことの他に、もうひとつだけ確かなことがあった。それはとても頑丈な丸太小屋だということだった。隙間もないし、建付けの悪いところもない。宇宙人の小屋よりはよっぽどしつかりとできている。特殊な工具でもないと、とても崩せるような代物ではない。

「でたらめに壊すのだって簡単じゃないな」と私は言った。

「そうみたいだね」とイメルは言った。

「気になることがひとつだけあってね」と私は言った。「屋根が妙に低いんだ。この大きさ
の小屋なら、もう少し屋根に高さがあるはずなんだ」

「そう。じゃあのぼってみれば？」

「どうやって？」

「ほら、宇宙人の小屋の中に梯子があったでしょ」

「そうだった」と私は情けなく呟いた。どうも肝心なことばかり忘れているような気がする。
る。

私はすぐに小屋に戻り、横向きに壁にかかっていた木の梯子を持って帰ってきた。横の
壁に立て掛けると、梯子の先がちょうど屋根の縁に引っかかった。

「これなら行けるな」と私は言って梯子のぐらつきを確かめると、一段目に足をかけた。
「気をつけてね。無理しないでね」と言ってイメルは梯子の下のところを手で支えた。

「大丈夫だ。そんなに高くない」

一段ずつ慎重にのぼっている間、みしみしと梯子が鳴り続けた。その音は私の心臓の鼓動を否応なく速めた。偉そうに言ったわりには、高いところが得意ではないのかもしれない。

梯子をのぼりきると、慎重に足元を確認しながら屋根の上を這うようにして歩いた。どこか弱い所があつて、いつわらに足を取られるかわからないからだ。

少し進んだところで、私はその小屋の屋根の低さの正体がわかった。屋根の真ん中に、四角い穴がぼつかりと空いていたのだ。屋根の上半分をよく切れる包丁ですばつと切り落としたものを想像すればいいかもしれない。もちろんその穴の下には、小屋の床が見えた。

私はイメルにその様子を説明した。「どう思う？」と私が聞くと、「どうって言われても」と言つて、梯子を持ったまま上を向いて首を四十五度に傾げていた。私の説明した屋根の形状がうまく想像できなかったのだろう。

「ねえねえ」とイメルが言った。「それってき、貯金箱みたいになつてゐること？」

「いや、穴はもつと大きいんだ」と私は言った。

「どのくらい？」

「屋根の面積の三分の一くらい」

「三分の一？」

「そう、三分の一くらい」私は繰り返した。

「それじゃあ何にも役に立たないんじゃないの？　ほんとに屋根なの？」

「もちろん屋根だ。真ん中に大きな穴が開いてるだけだ」

「雨が降ったらどうするの？」

「そんなこと言われても困るな」

実物を見ないと納得しないだろうと思い、私は屋根の上から梯子を引き上げて、それを穴の中に下ろすことにした。小屋の中からなら入口の扉も開けられるだろうと思ったからだ。

穴の縁に近づくとも小屋の中がよく見えた。最初に目に入つたのは、小屋の真ん中にある丸い石の囲いだった。それが何なのか、屋根の上からでははっきりとわからなかった。梯子を少しずつ下ろしていくと、最後にゴツンという鈍い音がして梯子が地面についた。私は後ろ向きになつて梯子を降りた。

小屋の中の空気はひんやりと冷たかった。私が降りた場所は、正体のわからない丸い石の囲いの真ん中だった。薄暗い小屋の中に目が慣れてくると、その石の囲いは何なのかはすぐにわかった。それは大理石の丸い浴槽だった。

私は浴槽をまたいで外に出ると、入口の扉のところへ歩いた。扉には丈夫なかんぬきが

かかっていた。横木を外すと扉は簡単に開いた。目の前にイメルが立っていた。

「どう？」とイメルが不安そうに聞いた。

「面白いものがある」

部屋に入ると、イメルもすぐにそれが浴槽であることに気がついたようだった。イメルは寒そうに肩をすぼめながら、浴槽の周りを一周した。それから浴槽の中に入っかがみこむと、手のひらで浴槽の底の大理石をつるつると撫でた。

「立派なものだね」とイメルが言った。

「どう見ても風呂場だ」と私は言った。

「うん」とイメルは言った。「でも変な感じ」

「蛇口のことだろう？」

「そう、それに水を抜くところもないよ。こんなのどうやって使うわけ？」

「さあ」

確かにそれは不思議な浴槽だった。浴槽の周囲には蛇口がなく、浴槽の底には排水口がなかった。おまけに上を向くと空が見える。雨でも降れば水は溜まるだろうが、今度は水を抜くことができない。でもそれはどう見ても浴槽だった。他の使い道なんて、とても思いつかない。

するとイメルが急にどこへともなく「あっ」と声を出して立ち上がった。私が「どうしたんだ？」と声をかけると、イメルは何も言わずに逃げるように小屋の外に飛び出した。驚いた私はイメルを追うように小屋を出て辺りを見回したが、イメルの姿はなかった。ザクザクという足音が聞こえたような気がして小屋の裏にまわると、イメルが松林の方へと走っていくのが見えた。私が「大丈夫か！」と叫ぶと、イメルは林の手前で立ち止まって顔を少しだけ横に向け、「何でもない！」と答えた。何でもないはずがないと思いつながらあとを追いかどうか迷っている間にイメルの後ろ姿は松の木の陰に消えてしまい、気がつくあたりはしんと静まり返っていた。すると今度は林のどこから「絶対に来ないですよ！」とくぐもった声が聞こえ、続いて「来たらほんとに本気で怒るからね！」と念を押すように怒鳴るのが聞こえた。あまりに一方的なので、とりあえず何かを言おうと思って「どうしたんだ！」と叫ぶと、何かを迷っているような間があつてから、イメルがさらに声を張り上げて「バカ！ おしっこよ！」と叫ぶのが聞こえてきた。

10



木曜日の夕方五時少し前。いつものようにインターフォンを鳴らした後、「はい」と言っで玄関から出てきたのは令美ではなく、母親だった。彼女は「どうぞお入りになって下さ

い」とうやうやしく頭を下げ、僕を招き入れた。当然僕は「今日はどうされたんですか？」と訊ねたけれど、彼女は「いえ、ちょっと」と言っただけで曖昧な笑みを浮かべただけだった。

母親が家にいるのははじめてのことだった。授業が少し長引いたときに、帰り際に玄関先で鉢合わせたことが一回だけあったけれど、彼女はいつも家にいなかった。おかげで自慢の手料理を断るために気をもむ必要がなかった代わりに、令美が「ご飯食べていけばいいのに」と言っただけで残念そうに見送るのに耐えなければならなかった。

でもその日はちよつと様子が違った。いつもなら玄関まで出迎えに来る令美の姿がなかった。母親は「どうぞこちらへ」と言っただけで僕を一階のリビングへ通してから、チョコレート・ケーキと紅茶を持って戻ってきた。「どうしたんですか？」とさらに目で質問を続ける僕に向かって、彼女はこう言った。

「先生にお伝えするのが遅れたのですが、実は今日から秋の大会へ向けた部活の練習が始まるんです」

「部活ですか？ バレー部の？」僕は思わず上ずった声で聞き返した。「でも、三年生っていうともう部活は終わったのでは？」

「ええ、そうなのですが」と彼女は言った。「秋の大会の練習には、三年生も参加するのが恒例なのでそうです。ちゃんとしたチーム練習をするために引退した三年生が練習を手伝うとかで。現役のチームの人数が少ないのと、もともとそんなに勉強にばかり力を入れる校風ではないのもあるみたいですけど——」

僕はその説明を半分うわの空で聞いていた。もちろん話の筋は理解はできるが、僕が引退かかったのは、令美がそんな素振りを全く見せなかったことだった。令美とは部活の話も少しはしたし、そういう事情なら前もって言ってくれば授業のスケジュールを変えることだってできたのだ。

「お母さん、そういうことは早めに言っていただければ」と僕は責めるような口調にならないように気をつけて言った。彼女は「ええ、申し訳ございません、私もうつかりしております」と言っただけで、ソファに座ったまま深々と頭を下げた。僕は慌てて「やめて下さい、そんなつもりじゃなくて」と、しどろもどろに言った。

「もちろん今日の授業料は——」と彼女が言いかけたので、僕は「結構ですよ。振り替え授業にしますから」と丁重に断った。わかりにくい会話だった。その会話のあと、部屋の中には白々しい沈黙が残った。僕は紅茶を一口飲み、ソーサーの上に戻し、しばらくしてまた一口飲んで、カップを手を持ったまま訊ねた。

「練習はいつまでなんです？」

母親はカップを持った僕の手のあたりを見ながら、「たぶん来週の週末が本番だと思います」と呟いた。最初に僕の家に電話をかけてきたときの、あの暗い声だった。

「それでは来週いっぱいまでお休みいうことにしましょうか」

「すみません、助かります。急な話で申し訳なくて」

その日はそれ以上世間話などする気にもなれず、僕は釈然としないまま家を出た。帰り際にもう一度頭を下げた母親の姿が、なぜかみすばらしく見えた。きれいに着飾り、きちんと髪を整えて上手に化粧をしているのに、なぜかみすばらしかった。後ろめたさを抱えているような、どす黒いエネルギーが体中から噴き出していた。もちろん僕にはその理由なんてわかるわけがない。知りたくもなかった。

その日の帰り道、僕は真っ直ぐ家に帰る気がせずに、駅のそばの焼き鳥屋に入って一人でカウンターに座ってビールを飲んだ。店の中にはテーブル席が八つほどあり、その半分が背格好の似たサラリーマンで埋まっていた。サラリーマン以外の人種は僕だけだった。みんな誰かに頭を下げながらビールを注いでもらって、誰かに断りながら料理をつづいていた。笑い声も同じだった。もしあのまま会社勤めを続けていたら、今ごろ僕もこういう場所でああいう風にしてビールを飲んでいたのだろうかと思っただけ。空いた時間を体を休めるためにだけ使い、肩をすばめて他人の作った隙間に自分をねじ込むような生き方を続けていたのだろうか。

僕は自分の選んだ道を誇りに思う。彼らのようにならないために、僕はこうやってカウンターに座っているのだ。飲みたければ飲むし、食べたくなければ食べない。勘定は自分で全部払うし、帰りたくなったら帰る。誰の邪魔もしないし、誰の邪魔にもならない。いつか僕が道端で力尽きても、誰も気にはかけてくれないだろう。でもそれでもいい。なぜなら僕は孤独とは何かを知っているからだ。孤独というのは独りになることではない。孤独とは、独りになることを恐れることなのだ。だから本当の意味で孤独なのはカウンターに一人で座っている僕ではなく、テーブルに座って背広を脱いで頭を下げながらもまずい焼き鳥をうまそうにかじっている彼らなのだ。

僕はカウンターに肘をついて、気の抜けたビールの最後の一口を風邪薬でも飲むみたいにつまらなそうに飲んだ。フロア係の若い女の子が近寄ってきて、ビールを勧めた。僕はビールをもう一杯頼む代わりに、熱いお茶を頼んだ。彼女は空いたビールのジョッキを下げ、レシートを一枚置いていった。はじめは勘定かと思って無視していたが、あまりに小さいので気になってひっくり返してみると、レシートの裏には電話番号が書いてあった。僕は座ったまま振り返ってみたが、その女の子は店の奥へ消えてしまっていた。

それから僕は愛想で注文した手羽先をつつきながらお茶が運ばれてくるのを待ったが、十分経っても誰も僕に近づいてこなかった。その間にサラリーマンの団体が二組店を出て、代わりに家族連れの客が一組入ってきた。僕は時計の針が七時を指すのを待ってからカウンターを立ち上がって勘定を払うと、彼女が置いていったレシートを折りたたんでジーンズのポケットに入れ、鳥と甘い味の臭いがしみついた暖簾を押しつけて店を出た。外はもうすっかり暗くなっていた。

家に帰るとすぐにシャワーを浴び、脱いだジーンズのポケットからさっきのレシートを出して、それを机の上に広げた。レシートは見覚えのあるスーパーのもので、打刻されたのは昨日の夕方六時過ぎだった。買い物の内訳は、お菓子と衣料品が合わせて千三百円少し。他にはスーパーの住所と電話番号が書いてあった。スーパーに電話を掛ける用事なんてこれまで一度もないし、おそらくこの先もないだろう。スーパーの経営者が意図しているほどには使い道がない、ただの青いインクの眩きだった。レシートを裏返してみると、七桁の数字が書いてあった。それ以外には黒いボールペンを使ったことと、それを書いた人物の筆圧がかなり強いのがわかった。表に印字された文字よりも、その七つの数字の方が多くを物語っている気がした。

僕はとりあえずそのレシートを机の上に置いたまま、ソファに座ってテレビをつけた。ケーブル放送の映画チャンネルに合わせると、リバー・フェニックスがギターを弾きながら歌っていた。すぐに彼の誕生日と彼が亡くなった日は思い出せたが、その映画のタイトルが思い出せなかった。五分くらい画面を眺めた末に、それがリバー・フェニックスが出演した最後の作品だったことをかろうじて思い出した。チャンネルを変えると、ボクシングのタイトルマッチをやっていた。三ラウンドが始まったばかりなのに、挑戦者の顔はボコボコに腫れ上がっていた。五ラウンドの終わりにセコンドからタオルが投げ入れられて、試合が終わった。チャンピオンの顔は無傷だった。次のチャンネルでは天気予報をやっていた。日本全土で晴れのマークが躍っていて、天気予報士も明るい表情で喋っていた。秋晴れが当分続くということだった。

僕はテレビを消し、読みかけの文庫本を手にとってソファに横になった。半時間ほど読んだけど、内容が難しくてスピードが上がらず、おまけになかなか頭に入らなかった。省いても差し支えのなさそうな比喻の連続が僕をいらいらさせた。僕は本を机の上に投げ出して、部屋の電気を消してベッドに横になった。レシートの裏の電話番号が気になったけれど、体を動かすのが面倒だった。今日は何もかもがうまくいかないかと天井に向かってため息をついているうちに、僕はとうとうと始めた。近所の消防署から消防車が一台サイレンを鳴らしながら出動し、そのサイレンがやむと、今度はパトカーが二台通り過ぎた。そしてようやくあたりは静かになった。

天気予報士の言う通り、それからしばらく晴れの日が続いた。週末はやり残した仕事をしに夏が戻ってきたのかと思うくらい蒸し暑く、次の週は打って変わって秋らしい乾いた晴天が続いた。体育館で汗だくになってバレーボールを打ち返す令美の姿をときどき思い浮かべながら、僕は毎日をやり過ごした。

いま僕が教えている生徒は、令美を除けばみんな中学生だった。しかも受験生ではないおかげで、授業を教える方はかなり気が楽だった。勉強の内容は難しくないし、教えるくい生徒は一人もいない。令美のような厳しい質問をする子なんてもちろんない。みんな

おとなしく僕の話聞き、黙って机に向かう子ばかりだった。

水曜日の授業が終わったあと、その生徒の母親から週にあと一日授業の日を増やせないかと相談された。あいにく今は日曜日以外は全部予定が入っていると伝えると、彼女は残念そうに「そうですか」と呟いた。「もし他の曜日が空けば、すぐに連絡します」と伝えると、彼女はうやうやしく頭を下げた。そういうときには、僕なんかになんかに頭を下げる必要なんて、本当にもいいのに、とつい思ってしまう。こんな僕なんかになんかに頭を下げる必要なんて、本当にこれっぽっちもないのだ。

土曜日の夕方、狭いベランダで洗濯物を干しているとところに電話が鳴った。

「こんにちは」という最初の一言で、それが令美だとわかった。

「こんにちは。元気？」と僕は言った。

「先生、明日暇ですか？」

「明日？ 試合じゃないの？」

「ううん。もう終わったんです。今日試合があつて、負けちゃったから」

「そうなんだ。残念だったね」

「残念だけど、私は応援したただけだからそんなに悔しくないんです」と令美は言った。

「それじゃあ来週から授業だね」

「もう、先生、私の話聞いてなかったんですか？」

「何を？」

「私さっき、『明日暇ですか』って聞いたんですよ」

「そうだった。どうして？」

「明日デートしましょうよ」

「デート？」

「そうです。大会が終わったから」

「だって、令美ちゃんはお出なかったんだらう？」

「練習に参加して、応援もしたんですよ」

「ふうん」と一応は頷いたものの、よくわからない理屈だった。「でも外で会うのはまずいんだ。お母さんたちが知ったら絶対にいい顔をしない」

「要は、クビになったら困るってことでしょ」と令美は言った。

「まあ、そういうことだね」と僕は言った。

「でも明日はパパもママもどこか出かけるみたいだから、大丈夫ですよ」

「そういう問題じゃなくってさ」

「じゃあ、うちに来て下さいよ。映画でも観ましょうよ、ね」

「だからそれはもつとまずいんだって。わかるだろ？ そういうの」

「じゃあ、映画観に行きましょうよ。待ち合わせをちよつと遅くして、ほら、そしたら暗

くなつてから帰ればあんまり目立たないし」

「あのねえ」と僕は言った。「そういうばれるばれないの問題じゃなくって、とにかくずいんだ。そうやって授業以外で二人で一緒にいるのが」

「わかりました。それなら――」

令美はなかなか引き下がらなかった。どうしてそんなに僕と遊びたがるのかわからなかった。僕といたって誰も楽しい思いなんてしないのだ。僕は映画ばかり観て、本ばかり読んで、気の利いた冗談のひとつも言えないような退屈な男なのだ。その証拠に、僕が付き合ってきた彼女たちはみんな最後には僕のことを「最高に退屈」という五文字で片付けて、もっとましな男をつかまえて出かけた。僕みたいに退屈な男を探すのはモンゴルの大草原でやしの木を見つくるくらい難しく、僕よりも退屈でない男を探すのは同じ場所で野生のロバを捕まえるくらい簡単なのだ。それなのに、なぜか彼女たちはやしの木に行き着いてしまう。要するに、運が悪いのだ。

散々代案を持ち出した末、ネタが尽きると令美は黙ってしまった。何回か欠伸をしてみたけれど、令美はもう何も喋ろうとしなかった。

僕はテレビをつけた。またボクシングのタイトルマッチをやっていた。この間の試合の録画のようだった。五ラウンドの終わりになって、またセコンドがタオルを投げ入れた。ぼこぼこになった挑戦者の顔が画面一杯に映し出された。

「しょうがないな」と僕は言った。「最初で最後だからね」

「ほんとですか？」大きくひずんだ令美の声が受話器から漏れた。「ありがとうございます！　じゃあ明日の朝、また電話しますね！」

「あ、待った待った。朝じゃなくてさ、昼にしよう。日曜日の朝はゆっくりしたいんだ」

「わかりました。じゃあ、昼から夜までつてことで」

「了解」

「晩御飯もセットですよ」

「オーケー」と僕は言った。

11



私が海ではじめて泳ぎ、はじめて丸太小屋の中に入り、イメルがはじめてトイレに行った日の夕方、島にははじめて雨が降った。その雨は何かを命がけで祝福するような、優しく強い雨だった。雨に打たれた島はひっそりと鳴りをひそめ、その粗い地肌を天に向けてさらけ出した。風はやみ、ニワトリは畑の隅に集まって縮こまり、バンズは私たちと一緒に小屋の中でわらくくるまった。誰もが雨に遠慮するように、小さな声で囁き合った。

薄い屋根を叩く固い雨音は夜が更けるにつれて大きくなり、バンズはその音に怯えたように、クウン、クウンと鳴き続けた。イメルは部屋の隅にいたバンズを呼び寄せると、バンズを片腕に抱いたままわらを全身にかぶった。もちろん小屋の中は真っ暗で何も見えなかったが、私にはそれが気配でわかった。バンズが鳴きやむと、私も眠りに落ちた。ざわざわした浅い眠りだった。

次の日の朝には雨は上がっていた。私はまだ眠っているイメルを起こさないようにそつと小屋を出ると、浴槽のある丸太小屋に向かった。扉を開けると、床の上できらきらと反射する光が目に入った。水浸しになった床の上を、屋根の穴から差し込む光が照らしていた。浴槽の中には予想通り雨水が溜まっていたが、水かさはほんの二センチくらいだった。昨日の雨の降り方から考えれば、少し少ないような気がした。

イメルが寝ている小屋に戻る間、私は雨に打たれた島が昨日より心なしか大きくなったように感じていた。草木の丈が伸び、海岸線が後退し、大地が水を含んで膨張したような感じだ。でもそれはもちろん気のせいだ。久々の雨のおかげで心が潤い、色々なものを改めて観察する余裕ができたのだろう。人間の感覚というのは思いのほかい加減で、天気や体調やそのときの気分に簡単に影響される。私はすがすがしい島の朝の空気を目一杯吸い込みながら、心の中にある柔らかな感覚のひだが島の隅々まで広がっていくのを感じていた。

小屋に戻ると、イメルがごそごそとわらの中から這い出てくるところだった。腕に抱かれていたはずのバンズはもうとっくに小屋を出て、裏の畑で雨だか朝露だかにぐつしより濡れたニワトリと遊んでいた。

「おはよう」と小屋の暗がりに向かって声をかけると、「おはよう」という明るい声が返ってきた。

「いい天気だよ」と私はドアの外を指差して言った。

「そう、よかった」とイメルは起き抜けの低い声で言った。「あたしね、雨の次の日っていつもすごく眠いの。体がぼうつとしてて、血液がぬるい感じがして。いま外に出たら体がびっくりして引きつりそうだから、ちゃんと目が覚めるまでもうちよつとここにいてもいい？」

「いいよ。僕はハンバーガー屋にいるから」と私は言った。

「わかった。すぐ行く」と言って、イメルはわらの上で大きく背伸びをした。私は木箱からパンを四つ取り出して小屋を出ると、入口のドアを静かに閉めた。

小屋の裏でニワトリと遊んでいたバンズに「朝飯の時間だぞ」と声をかけると、バンズは黒い目をくるくると動かし、畑の中を見回してから、私の足元に駆け寄ってきた。抱き上げるとびしょびしょに濡れたバンズの体のあちこちにニワトリの白い羽根がついていた。それを見て、私はふとニワトリには一度も餌をやっていないことに気がついた。パン

ズが食べるくらいだからニワトリだってパンくずくらい食べるに違いないと思い、試しに手に持っていたパンを少しちぎって足元に落としてみた。ニワトリたちはそのパンくずの動きをじっと目で追っていたが、一羽としてそれに近づこうとするものはいなかった。今度は同じようにちぎったパンを畑の中に投げてみたが、ニワトリたちはそのパンの動きに大きく首を動かして反応したものの、やはり近づこうとはしなかった。私はバンズを地面に降ろすと畑に入り、一番近くにいた一羽の真っ白なニワトリを両手で捕まえると、畑から十メートルほど離れたオリーブの木の下に置いて、そのすぐ目の前にパンくずを落としてみた。するとそのニワトリはしばらくそのパンくずを見つめた後、パンくずから目を逸らし、コツコツと首を振って何事もなかったように畑に戻った。そのニワトリが群れの中に紛れ込むと、バンズは私のいるオリーブの木の下までひよこ歩いてきて、落ちていたパンくずをおいしそうに食べた。私は腕を組んでその様子を眺めていたが、イメルが小屋から出てきた音がしたので、またバンズを抱き上げて小屋の入口に戻った。

「何してたの？」と小屋の裏から現れた私に向かってイメルが聞いた。

「ニワトリと遊んでた」

「楽しい？」

「いや、別に」と私は言った。イメルがいぶかしそうにこっちを見ているので、私は「裏の畑のニワトリって、何を食べてるんだろうね」と聞いてみた。すると「ミミズでしょ」という簡単な返事が返ってきた。

「それより、びしょびしょじゃない。どうしたの？」とイメルはバンズの頭を撫でながら言った。

「こいつが先にニワトリと遊んでたんだ。変な犬だ」と私が言うと、「あなたも相当変だと思うけど」とイメルが言った。

毎食食べているおかげで、ハンバーガーを作るのにもすっかり慣れてしまった。ハンバーガーを二つ作るのに必要なのは、トマトがひとつとレタスの葉が一枚。トマトは包丁で輪切りにして、真ん中の一番輪の大きい部分を使う。レタスは一番外側の一枚を取って、適当な大きさにちぎって使う。どちらも残りはそのままサラダ代わりにして食べられるし、バンズにやれば喜んで食べる。トマトのへたとレタスの芯だけは裏の畑に埋めるが、それ以外のゴミは一切出ないし、食べ残すこともない。栄養が偏っていることに目をつぶれば、理想的な食環境だ。

ハンバーガーを食べ終わって洗い物を済ませたところで、「今日は何するの？」とイメルが聞いた。

「砂浜の文字を書き直さないといけない」と私は言った。

「雨で消えたから？」

「そう。それにもっと大きくて、もっと目立つ文字じゃないとだめだと思うんだ。どんなに高く飛んでる飛行機からも見えるような、特大のやつを書く」

「そう。じゃああたしは何しよかな」

「日焼けの続き」

「名案だね」

私は小屋に戻ると壁に掛けてあったスコップを取って、イメルとバンズを連れて東の砂浜に向かった。坂道から見下ろす砂浜の上には、三日前にイメルが書いたはずの『HEL P』の文字はなかった。雨で流されてしまったのだろう。

砂浜に着くと、まず落ちていた松の枝を使って砂浜を横に五等分するような細い線を引き、そしてその線と線の間に同じような細い線で下書きをした。イメルに意見を求めると「P」の丸い囲みが小さいということだったので、それを書き直した。

スコップで試しに足元を掘り返してみると、白い砂の下から黄土色の湿った土が顔を出した。

「もしかして全部それで掘り返すわけ？」私の作業を見ていたイメルが心配そうに聞いた。

「そうだよ。砂浜の見栄えは悪くなるけど仕方ない」と私はスコップを肩に担いで言った。

「こんなにきれいなのに、もったいない気もするけど」

「まあね」と私は言った。「でもやらないわけにはいかない」

「そっか」

イメルは本当に残念そうだった。私だってできればやりたくない。こんな記念物的な砂浜にお目にかかることなんて、これから先そう何度もあるわけではないだろう。しかし今は状況が状況だけに、島の景観の心配をしている場合ではなかった。

「時間が経てば元に戻るさ」と一応私はフォローをしておいたが、イメルは何も言わずに頷いただけだった。

結局、全部の作業が終わるまでに、午前中一杯かかった。坂道をのぼって島の上から見下ろすと、見事な逆さ向きのアルファベットが砂浜の上にくつきりと浮き上がっていた。イメルはそれを見て、「すごいね」と一言だけ感想を言った。浜辺に残って掘り返したばかりの土の上を走り回っているバンズが、食べ残しの皿にたかるハエのように見えた。

その日の午後は曇り空だった。空を見上げると、空の半分が灰色がかった雲に覆われ、半分は青い宇宙だった。それを世間では「晴れ」と呼ぶが、今の私たちにとって、それは気分的には「晴れ」ではなく「曇り」だった。その国にはその国なりの、その土地にはその土地なりの「晴れ」と「曇り」があるものだ。

「ねえ、ほんとにここもやるの？」南の浜辺に下りた途端、イメルがそう言った。

「僕も同じことを考えてた。こりゃあ大変な作業になる」

「明日にすれば？ 今日どうしてもっていうわけじゃないんでしょ」

「そうだな」と言って私はスコップを砂の上に突き刺した。

確かにそれはとんでもない広さだった。この砂浜にさっきと同じ要領で文字を書くとなると、丸一日はかかるに違いない。かと言って中途半端な大ききで書いたのでは意味がない。しばらく考えた末に、とりあえず今日作業することはあきらめることにした。

「休憩がてらに音楽でも聴く？」とイメルが言った。

「それもいいな」と私は言った。

私たちは砂浜の真ん中あたりまで歩いていって、適当な場所に寝転がった。イメルはかぶっていた麦わら帽子を顔の上にのせると、ラジカセの再生ボタンを押した。

アーイドンッ、ウオオオオオオウン――

いつもと同じ声が乾いた砂浜に響いた。イメルは麦わら帽子の中で鼻歌を歌った。私もそのメロディーを覚えつつあった。歌詞はいまひとつ聞き取れないが、とても前向きな内容であることはわかる。少なめの伴奏に張りのある声にはとても好感が持てる。いま世間で流行っている歌とは少し趣が違うのもわかる。古い歌なのかもしれない。

二曲目が終わった後の無音部分になって、イメルがすうすうと寝息を立てているのが聞こえた。私はそっと停止ボタンを押してイメルが起きないのを確認すると、その場でＴシャツを脱いで海へと歩いた。昨日東の浜辺で泳いだときに、ここでも泳いでみたいと思っていたのだ。

私は海に入ると、海面が胸の辺りにくるまで辛抱強く沖へ向かって歩いた。振り返ると、イメルの姿が砂浜の上に半分だけ見えた。もう一度沖の方へ向き直ると、視界が海の色で満たされた。長い海岸線から開いた海は、永遠というものの存在を証明するかのような開放感に満ち溢れていた。海底を蹴ると、体が海に浮いた。

私は体が動くままに沖へ向けて進んだ。海面から規則正しく突き出る手が、小さな波しぶきを立てた。その波しぶきの音が、高い空へと抜けていった。その波しぶきはこの世界で唯一の波しぶきのように感じられ、静まり返った世界の空気を唯一揺らしているのが、その音のように感じられた。私の動きは世界で唯一の動きで、私の音は世界で唯一の音だと感じる事ができた。ここはそういう場所で、私はそういう場所に存在していた。例えば宇宙に始まりがあるとすれば、それはこの場所だ。そう信じることもできた。

怖くはない。足元にはとても届かないような深い場所に海底が横たわり、何かが私を引き寄せようとしている。それは目の見えない闇の手招きであり、空気のない空間の苦悩だった。そこには死があり、その上で私はただひたすらもがいている。それでも私は怖くなかった。私は恐怖を振り払うかのように両手を大きくかきわけた後、手足を動かすのをやめ、体を横に回転させて空を見上げて波の誘うままに身を任せた。目をつぶると、まぶた

の中に残った光が奇妙な形の残像を作った。その残像の輪郭を見ながら、私はこの島で起こった出来事を思い返した。

確かに奇妙なことが多過ぎた。普通に考えれば不可解だと思うような状況の連続でありながら、それでいてそれらがまとまって現れると、どこかに一本の抜け道があるような気がしてくる。どこかに説明があり、どこかに理屈があり、私がただそれに気がついていないだけなのだという気もする。毎日の出来事はあまりに非現実的でありながら、同時にあまりにも現実的な側面を持っていて、その縫目が巧妙に隠されているのだ。

何かを間違ったのだと思う。

私が行きつく所は、そこだった。私は、何かを間違えたのだ。すべての始まりはそこにあって、私はそれに気がつかなければいけない。例え手遅れであったとしても、私はいつかそれに気がつかなければならぬ。しかし私の体はいま、プランクトンのように無力で、小さくて弱々しかった。私はただ海に浮かぶためにここにいるのかもしれないと思った。こうやって海に浮かんで空を見上げているだけで、それでいいのかもしれない。そうすればいつか私はどこかにたどり着くのもかもしれない。

そのとき波の音の隙間に、人間の声が聞こえた。右手を後ろにかいて体をよじると、遠くで誰かが手を振っているのが見えた。イメルだった。私は体を海中でぐるっと回して、自分とイメルの距離を測ろうとした。しかし基準になるものが何もなかった。ただひとつ距離があるとすれば、それは私とイメルの距離だけだった。青く隔てられたその距離には、基準も理屈も数値もなかった。人間が二人いるという単純明快な事実。

「もう！ 早く帰ってきてよ！」イメルは大きく手を振りながら叫んでいた。

私は波の流れに乗って、陸地へ向かって泳いだ。

イメルの表情がわかるくらいに近づいたところで、足が海底に触った。私は足について、手で海面をかき分けるようにして浜辺へと歩いた。

「もう！ 心配したじゃない！」とイメルは顔を真っ赤にして怒鳴っていた。

「すまない」と私は謝った。

「行くなら行くって言ってくれたらいいのに。砂浜で目が覚めてあなたのシャツだけが転がってるっていうのがどれだけ不気味かわかる？」

「悪かった」と私はもう一度謝った。

「ほんとにわかってるの？」そう言って、イメルは腰に左手を当てて、右手に持っていた私のTシャツを差し出した。

「ほんとに悪かった。やることがなかったから、つい——」と私は一応の言い訳をしたが、イメルは口をぎゅっと閉じて何も言わなかった。

私は濡れた体の上にTシャツを着て、髪をばさばさと振った。耳の中に水が入っていた

ので、片足でトントンと跳んで水を出した。イメルはその様子を黙って見ていたが、あきれたようにため息をついて、その場に仰向けに寝転がった。すると、イメルがぱつと投げ出した麦わら帽子の中で何かが転がったのが見えた。

「それは？」と私は聞いた。

「パンくず」とイメルはぶっきらぼうに答えた。

「何のために？」

「餌付け」

「パンズの？」

「パンズはもういいの。十分なついてるから」

「じゃあ何？」

「トンビ」

「トンビ？」

「普通ならどこにでもいるでしょ、トンビくらい。パンくずをちらつかせたら寄ってくるかと思ったの」

「トンビなんて見なかったけど」

「あたしだって見てないけど、そんな気がしただけよ」そう言っただけでイメルは寝返りを打った。

「どうしてまた——」と私が言いかけると、イメルは「やることがなかったから！」と白い砂に向かって怒鳴りつけて、ついに黙りこんでしまった。

私は空を見上げてトンビの姿を探したが、雲と空以外は何も目につかなかった。動いているのは雲だけだった。私は口笛を吹く要領で口をとがらせ、「しゅうしゅう」と息を吐き出した。空の色々な方向へ向けてそれを繰り返していると、何事か気になったのか、イメルがむくつと起き上がった。

「何してるの？」

「鳥寄せの儀式」

「何それ」

「やってみな。鳥が寄ってくるから。しゅうしゅう」

「ねえ」

「何？」

「それ、やめてくれる？」

それからかなり長い時間、イメルは口をきいてくれなかった。私はあえて話しかけようとはせず、海と砂浜を相手に一人で遊んだ。中でも一番時間を費やしたのが、波打ち際の濡れた砂に文字を書くことだった。その文字には、私の指先が魔法を帯びたのかと思うような不思議な趣があった。それを気まぐれに打ち寄せる泡立った波があつという間に流し

去り、あとにはもつと不思議な模様が残った。面白くなって文字の数を段々増やしているうちに、気がつくと私はイメルの寝ている場所からずいぶん遠い場所にいた。最後に書いた長い文字の列が波にさらわれてしまうと、私はその場に足を伸ばして座って海を眺めた。打ち寄せる波がときどきか、とのあたりまで来て、足の下を砂を海へと持ち帰った。そのたびに自分の体の一部が削られたような気がした。

私は小さな声で「しゅうしゅう」と呟いてイメルの方にちらっと視線を走らせたが、イメルはさつきと同じ姿勢のまま動かなかった。空を見上げても、トンビの姿はなかった。さつき砂浜に書いた文字を思い出そうとしたが、たくさん書いたわりには何を書いたのかがさっぱり思い出せなかった。

——私はどこで何を間違ったのだろうか。

イメルの機嫌が直ったのは、夕方になって降り出した雨のおかげだった。雨が降り出す少し前、私とイメルは丸太小屋の中で浴槽にたまった水について論議していた。

「そんなはずないでしょ」とイメルが言った。

「いや、確かに朝はこのくらいだったんだ」そう言って私は浴槽の縁に屈み込み、底から二センチくらいのところを指で示した。

「じゃあ何？ 水が湧いたってこと？」

「その可能性がないこともない」と私は言った。

「見間違えたんでしょ、水かさを」

「そんなことはない。だいたい二センチくらいだなんてそのとき思ったんだ」

「その『だいたい』っていうのが間違ってたんでしょ」

「そういう間違いはしない」

「じゃあこれはどのくらいあるの？」

「四センチから五センチ」

「昼の間に増えたってこと？」

私は頷いた。

今朝、イメルが起きる前にここへ来たときには、確かに水かさは二センチくらいだった。雨の量にしては少ないなと思ったのを覚えているから間違いない。しかし、いま目の前にある浴槽の水の量は、明らかにそのときより増えていた。舐めてみたが海水ではなかった。水が湧いたとしか考えられなかった。雨が降ったはずもない。

そう思っているところに、まるでタイミングを見計らったかのように雨が降り出した。私とイメルは雨粒が浴槽の水面をぼつんと鳴らしたと同時に屋根の穴を見上げ、それから顔を見合わせた。屋根に空いた四角い穴が浴槽よりも若干大きいせいで、降り込んできた雨は浴槽の中と外の床に散らばって、それぞれ違った音を鳴らした。私とその音に聞き入っていると、隣で同じように立っていたイメルが「きれいだね」と言って、浴槽の縁をま

たいで片足を水につけた。イメルは水の温度を確認するように足でそっと水をかき、浴槽の外に残っていたもう片方の足を水につけた。そして浴槽の中央まで歩いていくと、屋根の穴から夕日に照らされた雲を見上げた。

「きれいな空」とイメルが言った。

「きれいだ」と私は言った。

雨は降っていたが、空は明るかった。日はもうすでにかなり沈んでいたが、太陽が雲を裏側から温めているような柔らかい空だった。夕暮れの色が映った灰色の雲から、白く細かい雨が真っ直ぐに降りていた。

しばらくそうやって空を眺めていると、次第に雲が厚くなり、太陽の色が薄れて灰色が濃くなってきた。それに続いて雨足が速まり、水面を打つ音が激しくなってきた。

「さあ、もう帰らない」と私はイメルに声を掛けた。

「うん、わかってる」とイメルは言った。「明日になったらもっと水が増えるね。そしたらお風呂に入れるかもしれない」

「そうだね。この調子なら一晩でかなり溜まるさ」と私は言った。

私たちは雨の中を小屋まで全速力で走った。足が泥まみれになっても、全く気にならなかった。汚れた部分は雨がすぐに流し去ってくれた。

小屋に戻るとドアの前にバンズがうずくまっていた。私がドアを開けると、バンズは体をぶるぶると震わせて小屋に入った。ドアを閉めると小屋の中はほとんど真っ暗になった。イメルはうまく麦わら帽子を使ったおかげで私ほど濡れなかったらしく、「おやすみ」と言っただけのままバンズの隣で横になった。私はわらで足を拭いて泥を落とし、着ていたものを脱いでよくしぼると、裸のままわらにくるまった。悪くない夜だった。

次の日も、その次の日も、夕方になると決まって雨が降った。雨はタイマーをセットしたかのように夕暮れ前の同じ時間に降り始め、朝目が覚めたときにはやんでいた。そして雨が降った日の次の朝には浴槽の水かさが二センチほど増え、夕方になるとさらに水が増えるという奇妙な現象が続いた。どうしても雨の量に対して水の増える量が少ない気がしたが、何日かするうちにあまり気にならなくなった。

イメルは毎日古いラジカセを大事そうに持ち歩き、ここぞというときにだけ再生ボタンを押して、一曲だけを聴いた。回数にすれば一日二、三回というところだろうか。私の大雑把な——とても大雑把な勘によれば、電池があとひと月持つか持たないかというペースだった。



令美とデートすることになった日曜日、正午きっかりに電話が鳴った。電話会社が正午を知らせる新しいサービスを始めたのかと思うくらい正確な正午だった。そのとき僕は台所で朝食の片づけをしていた。起きたのが十時過ぎで、それからのんびりシャワーを浴びて着替えをして、昨日干した洗濯物を取りこんでクローゼットにしまい、トーストとスクランブル・エッグをたらふく食べてから念入りに歯を磨いた矢先のことだった。洗濯物は十月末の夜風に吹かれて、一晩の間に気持ちいいくらいからからに乾いていた。冷蔵庫の横にかけてある洗ったばかりのタオルで手を拭いて、僕は受話器を上げた。

「もしもし」

「令美です。先生、おはようございます」

「おはよう」

「朝礼みたいな挨拶ですね」

「そうですね」

「いつ出て来れますか？」

「一時に駅でどうかな」

「いいですよ。先生、お昼まだですよね」

「一応まだだね」

「食べないで下さいよ。映画の前に行きたい所があるんですから」

「わかった」

「映画、何を観るか決めました？」

「いや。行ってから決めたらいいかなと思って」

「何やってるか知ってます？」

「知らない」

「もう、準備が悪い」

「だって昨日の夕方の話だろう、今日のことが決まったのは」

「私、あれから本屋に行って調べたんですよ」

「すごいね」

「すぐくはないけど。まあいいです、じゃあ一時に駅で。遅刻はなしですよ。天気もいいんだから」

「そっちなね」

僕は天気と遅刻のどこがどう関係しているのかわからなかったけれど、とりあえずそれ以上は何も言わずに電話を切った。僕は約束の時間はちゃんと守る方だし、もし遅れても、天気や交通事情を言い訳にしたりはしない。

確かに雨が降ると遅刻が増えるという傾向が全国的にある気がするけれど、それは事故

のあった高速道路で渋滞が発生するのと同じ原理なのではないかと僕は常々思っている。つまり、雨が引き起こしたみんなの精神状態の歪みが積もり積もった結果としての全体的なずれが、全国的な遅刻を生み出しているのだ。だから遅刻したからといって、ひとりひとりの人間を責める気にはならない。その代わりに僕はますます雨を恨むようになる。

一時五分前に駅に着くように時間を逆算してみると、今から家を出るまでにはちょうど三十分あった。僕はその三十分のうちの五分弱を洗う物の続きに使い、残りは今日着ていくものを選ぶのに使った。選ぶといっても、そう大した選択肢があるわけではない。ズボンはジーンズに決まっているし、靴だってスニーカーが三足あるだけだから、要するにTシャツを何にするかを選べばいいのだ。僕はクロゼットを開けて、高く積み上がったTシャツの山を上から下まで眺めた。夏が終わり、出番の少なくなったTシャツが出番の少ない順に下から並んでいた。二十四色入りの色鉛筆のセットに負けないくらいカラフルなその山の中から、僕は一枚の黄色いTシャツを選んだ。長袖にしようかとも思ったけれど、外の様子を見る限りまだ半袖でも大丈夫そうだった。僕はいつもはあまりつけないシルバーの指輪を人差し指にはめ、腕時計をつけた。腕時計は昔教えていた生徒が大学入試に合格したときに、生徒の両親がお礼だと言って僕に贈ってくれたものだった。自分が大学に合格したときだって誰も何もくれなかったのに、他人の合格のおおぼれをもらうというのも不思議な気分だ。でも僕はそのスイス製の時計を気に入って、年に何度か腕にはめて街を歩く。仕事をしているときにはいつも自分で買った別の時計をしているけれど、誉められたこともないし、「ちよつと見せて」と言われたこともない。そういうものに対する趣味がいいとは口が裂けても言えないと、自分でもよくわかっている。僕は退屈で、センスの悪い男なのだ。

玄関に座って一番白いスニーカーの紐を結び直し、つけたばかりの時計を見ると、予定通りの時間だった。僕はドアを開めると鍵を掛け、その鍵をジーンズの深い右ポケットの中に落とした。左のポケットには財布が入っている。もちろんカバンの類は持たない。

確かに令美の言う通り、空は晴れていた。文句なしの晴れだ。でも部屋の中から見るのとは少し印象が違った。窓ガラスに阻まれた晴れと、そうでない晴れでは、青空の体への染み込み方が違うのだ。もちろん歓迎すべき天気だった。

駅前の角を曲がったところで、ロータリーの向こうに令美の姿が見えた。令美は膝下くらいの丈の黒いスカートに、赤い長袖のカッター・シャツを着ていた。細いストラップのクリム色のポーチを肩から下げ、足をぴたり揃えたままきよきよと辺りを見回していた。体をひねるたびにシャツの銀色のボタンが太陽の光を反射して光った。

手を振ろうかどうか迷っていると、令美が僕を見つけて手を振った。僕はロータリーに停まっていたタクシーの横をすり抜け、令美が立っている階段の下まで来てから「おはよ

う」と声を掛けた。

「おはようございます」と令美が首から先を少しだけ前に傾けて返事をした。「時間通りです
ね」

「もちろんだよ。晴れてるしね」と僕は言った。

「切符買ったときでしたから」そう言っ
て令美は手に持っていた切符を一枚差し出した。

「ありがとう。いくらだった？」と聞きながら切符を見ると、二百二十円だった。

「いいですよ。あとで何かおごって下さい」と令美が言った。

電車に乗ると、令美は行き先の駅の名前を僕に告げた。「その駅じゃ降りたことないな」と僕が言うと、「駅の近くに変わったハンバーガー屋さんがあるんです」と令美が言った。「ママとときどき二人で行くんです。私が好きっていうより、ママが気に入っちゃって」

「どうして？」

「ママが言うには、ちよつとやさつとじゃ作れないハンバーガーなんですって。それでどうしてもあの味を真似したいって、それで偵察っていうかスパイっていうか、レシビを盗むために食べに行くんです」

「そんなにおいしいの？」

「はい。確かにおいしいんです。でも、おいしいっていうより変わった味がするっていうのが私の印象。何て言うのかな、一言で言う
と、食べたことのない味。材料が変わってるっていう感じでもなくて、特殊な器具を使ってるってわけでもなくて、それでも味がちょっと違うんです。店の雰囲気も変わってるんですけど」

「ふうん、よくわからないけど」

「だから、食べてみてください」

「わかった。で、今日はそこへ行くんだろう？」

「その通りです」

僕と令美は改札を抜けた目の前のホームに並んで立った。時刻表によれば、電車はあと二分で来るはずだった。

「お母さんとよく食事に行くの？」と僕は質問してみた。

「はい。二人で歩いてると、よく姉妹みたいだって言われます」

「それはわかるね。はじめて会ったときから思ってたんだけど、ほんとによく似てる」

「そうですか？」

「姉妹は言い過ぎかなって思うけど」

「ママはそう言われて喜んでるみたいだからいいんですけど」と令美は言った。「確かに昔の写真を見ると、私にそっくりな写真があるんです。高校生のときの写真なんかほんとに今の私に似てて、変な気分」

「そうなんだ」と僕は言った。「今度見せてよ」

「いいですよ。たぶん見分けがつかないと思います」そう言っ
て令美は笑った。

電車は予定通りホームに入ってきて僕たちを乗せた後、扉の開閉をぐずぐずと何度か繰り返してから、予定より少し遅れて出発した。

電車が目的の駅に着くと、令美はホームの一番後ろにある出口を出て、人通りの少ない道を歩いた。高架をくぐって信号を二つ越えた先に、その不思議なハンバーガー屋があった。外観からして、それがいわゆる普通のハンバーガー屋でないのがわかった。建物の正面の壁はひよろひよろと伸びたツタでほとんど全部覆われ、入口のドアだけがかるうじてその侵略を免れたといった感じで顔を出していた。見ようによっては緑色の台風の目のように見えるそのドアは、細長い茎や葉が建物の中に入ろうとするのを食い止めている門番のようだった。もちろんドアは内側にしか開かないようになっていた。

「これじゃあ、何屋さんかわからないね」と僕が言うと、令美が「あそこに看板がありませんよ」と言っただアの上の方を指差した。よく見ると、ジャングルのようなツタの隙間に窮屈そうに押し込められている、青錆びたトタンの看板があった。

「どうも読みにくいな。ハンバーガーの絵はわかるけど、えっと――S、P、それから――A？　Hかな？　何て書いてあるの？」

すると令美がもったいぶったような口調で言った。

「スペース・バーガー」

「スペース・バーガー？　宇宙バーガーってこと？」

「訳さないで下さい。スペース・バーガーです」

令美が入口のドアを開けて中に入ったので、僕は看板を見るのをやめてあとに続いた。店に入ると何となく早くドアを閉めなければいけないような気がして、僕は後ろを向いてドアを静かに閉めた。

店の内装は外観とは打って変わって普通だった。灰色の一步手前といった感じの白壁、それをさらにしつこく黄ばませたような色の天井、暗い蛍光灯、打ちっぱなしのコンクリートの床、それに安物のテーブルと椅子、音楽はなし。よくよく考えてみれば、その内観は普通というよりは、いわゆる普通のハンバーガー屋よりも全てにおいて二つくらいランクが低かった。僕たちは「普通のハンバーガー屋」というものを過小評価しているのかもしれないなとふと思った。

店に入って左側にレジの置いてあるカウンターがあったけれど、そこには誰もいなかった。カウンターの奥の厨房から誰かが出てくる気配もなく、呼び鈴のようなものは見あたらなかった。令美はそんなことを気にかける様子もなく、一番奥のテーブルまで歩いて行って、テーブルの向こう側の席に座った。僕はきよろきよろと店内を見渡しながら、令美の正面の席に座った。何となく正体のわからない敵に背中を向けている気がしたので椅子に半身に座ると、視界の両隅に令美と入口のドアが収まった。目の前にはツタに視界を完全に塞がれた窓ガラスがあった。向こうが見えない以上、役割で言えばまわりの壁とほと

んど変わりが無いように思えた。

「誰も来ないね」僕はたまりかねて言った。

「そのうち来ますよ」と令美は言って、テーブルの上にある油の染み込んだメニューを手にとった。「お勧めはフィレロ・フィッシュ・バーガーとホット・チキン・バーガーですけど」

「フィレロ・フィッシュ？」

「どういう意味かはわからないけど、おいしいんですよ」

「どうせタルタル・ソースがかかってるんだろう？」と試しに僕は言ってみた。

「よくわかりますね」と令美が感心して言った。

「ホットなんとかっていうのは辛いわけ？」

「辛いです。でもめっちゃくちゃおいしいんですよ。先生、辛いのは平気ですか？」

「平気だよ。かなり食べれる方だと思う」

「じゃあホット・チキンがいいと思います。毎回辛さが微妙に変わりますけど」

「じゃあそれにするよ」

席について五分以上待っても、誰かが近づいてくる様子はなかった。ふと天井を見上げると、天井にはめ込むタイプのスピーカーがいくつかあるのが見えた。スピーカーを見てみると、何となく音楽が聞こえてきたような気がした。でもそれは間違いだった。音楽はさつきからずっとかかっていたのだ。でも、ボリウムがおそろしく小さいせいで、気付かなかったただけなのだ。この店が強い緊張感のせいだろうか。僕はあらためて耳を澄ませてみた。

確かにそれは音楽だった。でもそれが音楽だとわかって、どんな種類の音楽なのかはわからなかった。流行りの歌のようにも聞こえるし、軍歌のようにも聞こえるし、南方の国の国歌のようにも聞こえる。ただ確かなのは、必要なのは音楽と呼ばれる空気だけで、それ以上には何も求められていないということだった。ある種類の場所において、音楽というのはそういう使い方をされることがある。

「あ、来ましたよ」

令美がそう言ったとき、僕は入口に背中を向けて奇妙な名前ばかりが書いてあるメニューを上から順番に読んでいるところだった。僕がメニューを置いて振り返るより先に、頭の上から声が聞こえた。

「お待ちせいましたよ」

声の主は女性だった。二十代後半だけれど、意味もなく苦勞をしているせいで三十代前半に見えてしまうタイプの女性だった。髪型や服装をきちんとしていても、そういう体に染み込んだ苦勞というのはどこからかにじみ出るものだ。制服代わりらしい赤いエプロンには念入りにアイロンをかけてあったけれど、汚れたままのエプロンにアイロンをかけた

せいで汚れがどうしようもなく染み込んでしまっているように見えた。そのエプロンが彼女の推定年齢を引き上げるのにまた一役買っていた。

「ご注文はお決まりですか？」と彼女が言った。声は悪くなかった。

「えっと、ホット・チキンとダブル・シュリンプと、ファンタ・オレンジと——先生は？」

「同じのいいよ」

「じゃあファンタ・オレンジを二つ」

「かしこまりました」

そう言って彼女がカウンターの奥へ消えてしまうと、また店の中は静かになった。

「ダブル・シュリンプって何？」僕は令美が注文したハンバーガーがどういうものか見当がつかなかったので聞いてみた。

「そのままですよ。エビが二つ」

「すり身じゃなくって？」

「エビが二つパンに挟んであるんです」

「寿司みたいだね」

「まあ、そうですね。発想は同じかもしれないですね」

注文したものができあがるまでの間、僕はメニューを見て、その名前からどんなものか想像できないものをいくつかあげて令美に解説してもらった。令美はほとんど全種類を食べたことがあるらしく、丁寧に説明をしてくれた。例えばこういう具合だ。

『キッキリッキ・バーガー』

——パイナップルの入ったチキン・バーガー。

『トマト・トマト・バーガー』

——トマトを二枚挟んだだけのベジタリアン。

『チーズ・エックス』

——二枚のチーズと分厚いベーコンを挟んだもの。

『親子バーガー』

——目玉焼ののったチキン・バーガー。

『ガガーリン・バーガー』

——いわゆる普通のチーズ・バーガー。

ネーミングのおかしいものがいくつかあったけれど、興味を持たせるという意味では見事に成功しているのかもしれない。

「変わってるね」と僕は言った。

「でも、どれもおいしいんですよ」と令美が言った。

他にもハンバーガーはいくつかあって、メニューの欄外には『スペシャル・スペース・

バーガー』という名前のハンバーガーが写真つきで載っていた。写真を見ても中身は全くわからないけれど、サイズだけとはかく大きいみたいだ。値段を見ると、どうやらこの店で一番高価なハンバーガーのようだ。『スペシャル』なんてつけなくても、それだけでかなり特別なハンバーガーだというのがわかる。

「ガガリンって、何だっけ？」僕はメニューを指差して言った。

『地球は青かった』の人」

「宇宙飛行士？」

「そう。世界初の有人宇宙飛行をした人」

「アメリカ人だっけ？」

「ロシア人です」

「ほんとに？」

「ほんとです」

そんな話をしていると、さっきの女性が大きなトレイにハンバーガーとフアンタ・オレンジの瓶を載せて戻ってきた。注文を聞きにくるまでの時間を考えれば、調理にかかった時間はかなり短かった。彼女はトレイごとテーブルの上に置いて、何も言わずにまたカウンターの奥へ引っ込んだ。余計なことは一切しない主義なのかもしれない。

「すごいボリュームだね」と僕は言った。

「でもいつもちゃんと全部食べるんですよ、私でも」と令美は言った。

確かにそれはハンバーガーにしては大きすぎた。まず最初にどこからどうやって食べ始めればいいのかを考えてしまうような大きさだった。

「いただきます」と令美が言ったので、僕も「いただきます」と言っせずしりと重いハンバーガーを持ち上げた。

まずパンが大きい。大き目の茶碗か、下手をすればどんぶりくらいの大きさだ。そして当然のことながら、挟んである具はパンから飛び出している。レタスとトマトはパンよりも一回り大きく、メインの鶏肉のフライが分厚過ぎた。おかげでハンバーガー全体が構造に欠陥のある高層ビルのようにぐらついていた。僕はそのホット・チキン・バーガーという名の巨大なハンバーガーを両手でぎゅっと抑えつけ、はみ出したレタスとトマトごとがぶりと噛みついた。一口目は鶏肉まで到達せず、三口目でようやく鶏肉にありついたと思ったら、その瞬間、ぬるっと熱いものが舌の上に溶け出した。その予期しなかった感触に驚いて、僕は思わずのけぞった。鶏肉のフライの中から出てきたソースは、熱かったのではなく、ものすごく辛かったのだ。

「辛いね」と僕は言った。

「そうですか？」と令美は涼しそうな顔で言った。「全部一緒に食べるのがコツですよ。上から下まで全部」

令美の言う通り、上のパンと下のパンに挟まれたものを全部まとめて噛みちぎるように

すれば、ソースの辛さを他のものがうまく中和してくれた。辛いソースがパンに染み込んだり、レタスやトマトの水分に薄められて、ちょうどいい辛さになるのだ。それでも辛いものは辛い。

「確かにおいしいね」僕は半分ほど食べたハンバーガーの断面を眺めながら言った。

「そうでしょ」と令美は嬉しそうに言った。

「ちよつとタイ・カレーの味がする」と僕は言った。「ココナツっぽい甘さと、タイっぽい香辛料の香りがする」

「そうそう、ママも同じこと言っていました。でもちよつと違うんですって。そこから先が、このお店の味の不思議なところだって」

「詳しいことはよくわからないけど」と僕は言った。「確かに不思議な味だね。タイ・カレー風味のチキン・バーガーっていうのは。食べたことのない味だ」

ハンバーガーを食べ終わると、忘れていた辛さがやってきた。僕は残っていたファンタを一口で飲んだ。舌に残ったほのかな辛さをファンタが流し去り、改めて新しい辛さがやってきた。

「辛いものを食べたら水を飲んじやダメなんですよ」と令美が言った。

「そう、僕も同じことを考えてただけだよ、飲まずにはいけないねこれは。水、もらえと思う？」と僕が言うと、令美は「さあ」といった顔で首を傾げた。

僕は席を立ててカウンターの前まで行き、奥の厨房に向かって「すみません」と声を掛けた。しばらくしてさっきと同じ女性が顔を出したので、「お水いただけますか？」と聞いてみた。彼女は黙って領いて、また奥に引込んだ。僕がテーブルに戻るのと同様くらいに、彼女が水のたっぷり入ったグラスを二つ持ってきた。彼女は「どうぞ」と一言だけ言ってまたカウンターの向こうに消えた。

「私の分も飲んでいいですよ」と令美が言った。

「うん、もううよ」と僕は言っ、て、グラスの水を飲んだ。舌の上がひんやりと冷たくて気持ちよかったけれど、水が過ぎ去ったあとにはまた別の辛さがやって来た。それでもそれを何度か繰り返しているうちに、舌のしびれは少しずつ軽くなった。僕がグラス二杯分の水を飲み終わると、令美がハンバーガーを食べ終わるのがほとんど同時だった。

「おいしかった？」僕はダブル・シュリンプ・バーガーの味について聞いてみた。

「おいしかったですよ。いつも通りの味」

「エビは好き？」

「好きですよ。どうですか？」

「いや、ただ聞いてみただけけど。エビののったハンバーガーって、どういう味なんだろうって思ってたさ」

「また来ましようよ。他にも食べて欲しいのがたくさんあるから」と令美が言った。

「スペシャル・スペース・バーガーって、食べたことある？」

「ないです。でも値段も高いし、たぶんめちゃくちゃ大きいんですよ。ちよつと怖くて頼めないですね」

「でもさ、この店の目玉商品って感じだよね。おいしいのかな」

「今度試してみたらどうですか？」

「そうだね」

僕はもう一度メニューのスペシャル・スペース・バーガーの写真を見た。何が入っているのかわからない不敵な不気味さが、UFOや宇宙船を連想させなくもなかった。

そろそろ店を出ようかという頃になってタイミングよく例の女性が現れたので、僕は彼女に声を掛けて勘定を頼んだ。

カウンターで支払いを済ませると、彼女が丸いガラスの容器に入ったガムを持って帰るように勧めた。僕はガムを三枚つかむと、「ごちそうさま」と言って店を出た。彼女は笑顔で見送ってくれたけれど、「ありがとう」とも「またお越し下さいませ」とも言わなかった。

入口のドアを開けようとしたとき、ドアの右の壁に掛けてある一枚のポスターに目が留まった。ポスターの上半分には「I WANT TO BELIEVE」という文字が書いてあって、下半分には全体にピントのぼけた写真がプリントしてあった。写真には空と山の一部らしき緑が写っていて、その真ん中に小さなUFOらしき物体が浮かんでいた。僕がその写真を興味深そうに見ていると、後ろに立っていた令美が小さな声で「面白いでしょ」とささやいた。

駅へ戻る途中、僕は舌に軽いしびれを感じ、うつすらと口を開けたまま口で息をした。辛さがまだどこに残っているのだ。吸い込むときに冷たい風が舌の上を通るのが気持ち良かった。何も喋らずに歩く僕を不思議そうに見ていた令美に向かって、僕は「まだひりひりしてるんだ」と呟いた。

「そんなに辛いなら我慢しなければよかったのに」と令美はあきれ顔で言った。

「無性に歯が磨きたい」という僕の独り言に対して、令美は「私、携帯用の歯ブラシ持ってますけど、使います？」と妙なことを言った。怪訝そうに令美の顔を見つめる僕に向かって令美が続けた。

「うちは他人の歯ブラシを平気で使う家なんです。歯ブラシは人数分あるのに、誰がどれを使うかっていうのは決まってくなくて、毎回そのときの気分で歯ブラシを選ぶんです。だから私、パパの歯ブラシだって平気で使うんですよ。そういう話をするの大抵みんな嫌な顔をするけど、ずっとそれで慣れてるから別に何とも思わなくて」

「変わってるね」と僕は言った。本当に変わっている。世の中には色々な家族がいるものだ。

「先生、私の使います？」と令美が少し間を置いてから言った。

「いや、いいよ。遠慮する。コーヒーでも飲むから」と僕は答えた。

僕はすぐ目の前にあった自動販売機の前で立ち止まって、缶コーヒーを買ってその場で飲んだ。「あれだけ飲んだのに、よく飲みますね」と令美が言った。僕はコーヒーを口に含んだままうんうんと何度か頷いた。ぬるくなったコーヒーを飲み込むと、胃の中がさらにややこしくなった。

駅まで戻ってきたところで僕はガムをもらったことを思い出し、二枚を口の中に放り込み、一枚を令美に渡した。味がなくなるまでガムを噛むと、ようやく僕の口の中は落ち着いた。

「映画、どうする？」

「これ持ってきたんです」そう言って令美はポーチの中から小さく折りたたんだ新聞の折り込み広告のようなものを取り出して広げた。「映画のページだけですけど」

「見せて」

令美が持っていたのは、情報誌の映画紹介欄の切り抜きだった。そこには市内の映画館のリストと、それぞれの映画館で観ることのできる映画のスケジュールが載っていた。ページの下の方には映画とは全く関係のない派手な広告が無関心に躍っていた。

「どれが面白そうですか？」と令美が顔を近づけて聞いた。

「さあ、いまやってるのはあんまり知らないからな」と僕は切り抜きを見ながら答えた。

「先生、映画詳しいんじゃないんですか？」と令美が僕の横顔に向かって話しかけた。

「うん、何ていうかな、別に詳しいわけじゃないんだ」と僕は言った。「映画は観てるけど、大体古いのばかりだから、新作の映画になると全然ダメなんだ。三年くらい遅れて話題についていってる感じだから」

「そうなんですか？」

「うん。正直に言うかね」

「じゃああんまり映画館には観に行かないんですか？」

「行くよ、もちろん。でも名画座が多いかな」

「名画座？ 何ですか、それ」

「ああ、令美ちゃんは知らないかな。最近ずいぶん数が減ったからなあ」

「映画館ですか？」

「そうだよ。立派な映画館さ。でも新作はやらないんだ。公開が終わった映画を安く上映するんだ。九百円とか七百五十円とか、そういう値段で。場所によつては二本立てとか三本立てでやるところもあって、そこへ行けば一回入場しただけで全部の映画が観れるんだ。うまくやればビデオを借りるよりも安いこともある」

「ほんとですか？ 知らなかった」

「でもそういうところはあんまり宣伝もしないし、場所も不便なことが多くてね。知る人ぞ知るって言うとか大袈裟だけど、まああんまり若い人は行かないよね。同じスクリーンで

日替わりでポルノをやったりするところもあるし」

「ポルノって何ですか？」

「え？ わからない？」

「知りません」

「ほんとに？」僕はそう言って頭をかいだ。「まあ——簡単に言えばエッチな映画だよ」

「アダルトってことですか？」

「そうそう」

「ふうん」

令美の頭の中で不慣れな単語が二つ、カチンと音を立ててくっついたみたいだった。ポルノという言葉も名画座とともに絶滅しつつあるのかもしれない。

「まあ、とにかくどの名画座も少し変わった場所にあるから、若い子は——特に女の子が一人でいるのはあんまり見たことがないな」

「ねえ、先生、私そこに行きたい」

「名画座？」

「そう」

「ちょっと待ってよ」そう言って僕は手に持っていた切抜きの最後の方のページをめくった。「名画座はこういうのに載ってないこともあるんだ。載っててもすごく小さくて、何をやってるかわからないこともあるし——ああ、あったあった」

令美は僕が指差したページの細長い欄を食い入るように見つめた。

「シネマ・しんこうえん？」

「そう。名前がいかに名画座っぽい」

「何をやってるか書いてないですね」

「電話して聞か、行ってみるか」

「そんなに遠くないし、行ってみませんか？」

「いいよ」

「ポルノやってたら、引き返しますよ」

「大丈夫だよ。ここはやらないところだから」と僕は言った。

それから僕たちはまた電車に乗って、さらに市内の中心部から離れた。電車が進むにつれて同じ車両に乗っている人の数が減っていき、線路の継ぎ目でガタガタと鳴る音が大きくなった。同じ駅で電車を降りたのは、僕たちを含めて五、六人だった。ホームに降り立つと、令美は辺りをきよろきよろと見渡した。

「どうしたの？」と僕は令美に話しかけた。

「え？」

「めずらしいものを見るような顔してたから」と僕は言った。

「めずらしくはないけど、何か懐かしい感じがするんです」

「どうして？」

「うちは転勤族だから、よく引越しをするんです。前の前の家があった駅のホームの感じにすごく似てて、ちよつとびっくりしたんです」

「ああ、そうなんだ」と僕は言った。「お父さんの仕事の関係？」

「そうです。ここに引っ越してきたのは、私が高校に入る少し前なんです。今は仕事落ち着いたからしばらく動くことはないみたいですけど、それまではほんとに引越しばかりで。中学校のときに二回、小学校のときに三回、その前にも何度か。あちこちに友達できるのはいいんですけど、やっぱり学校が変わるっていうのは大変で」

「そうだろうね」と僕は言った。「ところでさ、お父さんは何やってるんだっけ？ 聞いてもいい？」

「あれ、知らなかったんですか？ 学校の先生です」

「先生？」僕の上ずった声がひと気のないホームに響いた。

「何でそんなに驚くんですか？」

「あ、いや、意外だったから」

「どうして？」

「だってほら、これは僕の思い込みかもしれないけど、学校の先生は家庭教師を雇わないんじゃないかって。何となくだけど」

「そうですか？」と令美は言った。「でも先生を呼んだのはママだし、たぶんパパは先生が来てることさえも知らないと思いますよ」

「嘘だろう？」

「あ、そんなことはないか。でもパパがいるときに先生の話が話題になったことはないし、普段はあまり顔を合わさないから」

僕がその言葉の意味をあれこれ考えていると、令美がちゃんと答えを教えてくださいました。

「パパはね、定時制の高校の先生なんです」

僕は口の中に残っていたガムをくちやくちやくと噛んだ。

——なるほど、そういうわけか。

道理で父親の存在感がないなと思っていたら、そういうことだったのだ。令美の父親はおそらく昼過ぎに仕事に出掛け、夜遅くに帰ってくるのだろう。だから僕が家にいるときには会わないのだ。

「先生、ガム出します？」

「ん？ ああ、ありがとう。」

僕は令美がくれたガムの包み紙にガムを出し、近くにあったゴミ箱に捨てに行った。

「まあ、そういうことなんです」と令美が言った。

「変なところで身の上話をしちゃったね」と僕は言った。

「私が話したんだから、あとで先生のことも話してくださいよ。今日はプライベートなんだから、プライベートな質問はありなんですよね」と令美がニヤニヤしながら言った。僕は頷くしかなかった。

駅から十分ほど離れた場所に『シネマ・しんこうえん』はあった。映画館とはいえ『シネマ』の文字と、窓という窓に貼ってある映画のポスターがなければ、絶対に誰も近づかないようなみすばらしい建物だ。僕も最初に来たときには、どこが入口かわからなくて建物をぐるりと一周してしまった。何のことはない、入口のドアにもポスターを貼ってあるせいで、窓と見分けがつかなかったただけなのだ。令美もその建物を見て同じようなことを思ったらしく、「入口はどこですか？」と聞いてきた。僕が目の中のドアを押し開けると、令美は忍者屋敷でも見るような顔をして僕のあとに続いた。

『シネマ・しんこうえん』の内観は、『スペース・バーガー』ほど期待を裏切らない。外観が想像させるものそのままだからだ。ロビーは暗くてひと気がなく、何かの機械がブウウンという不快な低音をぶちまけていて、チケット売り場のおばさんはしかめっ面でおまけにどこもかしこもタバコ臭い。そして映画を観ること以外——たとえばトイレとか、売店とか自動販売機とかいったもの——には、何も期待できない。トイレには汲み取り式かと思うような悪臭が漂い、売店には賞味期限の切れたスナックやジュースが当たり前のように置いてある。ときどき映画のパンフレットやポスターもおいてあるけれど、明らかにどこかで使い古された中古品で、ポスターの裏にはテープの糊が残っていたりもする。自動販売機で何かを買おうとしても半分は売り切れで、札を入れる部分は二年前からずっと壊れていて、つり銭切れのランプがしょっちゅう点灯している。つまりは——そういう風に接続するしかないけれど——ここはそういう場所なのだ。映画をスクリーンで安く観たいという強い動機なしには成り立ち得ない空間なのだ。

「すごいところですね」ロビーに立ったまま館内を観察していた令美が言った。

「でもちゃんと映画は観れるから大丈夫だよ。音は良くないけど、映像は問題ない」

「何をやってるかわかりますか？」

「ああ、そうだった。ちよっと待ってね」僕はそう言ってチケット売り場のおばさんに声を掛けた。おばさんの発音が悪いせいでタイトルを何度も聞き返した末、どうやらいま上映しているのが『ケープ・ファイア』で、三十分後に始まるのが『ギルバート・グレイプ』らしいことがわかった。

「どんな映画ですか？」

「サスペンス・ホラーとヒューマン・ドラマ」

「すごい組み合わせですね」

「どっちもジュリエット・リュイスが出てる。きっとそれがテーマなんだ」

「ヒューマン・ドラマはどっちですか？」

「ギルバート・グレイブ」

「どんな話ですか？」

「ちっちゃな町の家族の話だね。青春ものってことになるのかな。とにかくすごくいい映画だよ。ジョニー・デップはこの頃からいい芝居をしてたし、ディカプリオが演技らしい演技をしたのはこの映画が最後じゃないかな。ジュリエット・リュイスなんか、清純そうな役をもらったのはこの二本だけだね。僕はすごく好きなんだけどね、ジュリエット・リュイス」

「豪華なメンバーなのに、聞いたことがないですけど」と令美が不思議がった。

「みんなまだ売れっ子になる前の作品だからかな」と僕は言った。「確か最初に公開されたときにはミニ・シアター系だったと思うよ、ロード・ショーじゃなくって」

「じゃあ、それにします」

「オーケー」

二人分のチケットを買ってロビーの長椅子に座って待っていると、十分ほどして劇場の入口が開いて、そこから何人かの中年の男性がぞろぞろと出てきた。みんな昼休みが終わって監獄に戻される囚人のように固い背中を丸めていた。ある者はトイレへ消え、ある者はロビーに立ったままタバコを吸い、あるものは建物の外へ音も立てずに出ていった。誰もが沈黙を守り、目を合わさないようにしていた。もちろん映画の感想や評論を口にする者はいなかった。何の映画を観たのか、あるいはここに何をしに来たのか、それさえももうどうでも良くなったといった風だった。

僕と令美は長椅子から立ち上がり、彼らと入れ替わるように劇場に入った。劇場の中にはまだ何人か残っていて、そのまま次の映画が始まるのを待っているようだった。場内は映画が終わって少しは明るくなったはずだったけれど、目が慣れるまでは足元を見ながら歩かなければいけなかった。床の上にはビールの空き缶やお菓子の包み紙やパンの食べ残しが当たり前のように落ちていて、注意しないとそれを踏みつけてしまうからだ。僕たちは前から八列目の真ん中あたりの比較的美しいなシートを選んで座った。それより前には誰も座っていなかった。

後ろの方の席で誰かがポップ・コーンをバリバリと食べる音がやまないで、「映画が始まったらちゃんと静かになるからさ」と僕は令美に耳打ちした。

「大丈夫ですよ。私そういうの結構平気ですから」と令美が言った瞬間、ポップ・コーンとは別の場所で誰かが大きなくしゃみをするのが聞こえた。それからまた別の場所で誰かが具合悪そうに咳をし始め、その咳が五回続いた後、ついに令美が息を殺して笑い出した。

「ほんと、すごいところですね」令美は前かがみになって苦しそうに笑いながら言った。

「今日はとくに賑やかだね」と僕は言った。

あと十分くらいで始まるかなと思ったとき、突然けたたましい音量のブザーが鳴り響き、

場内の照明が落ちた。そしてスクリーンにうつすらと明かりが灯ったかと思うと、予告も宣伝もないままいきなり本編が始まった。チケット売り場のおばさんが教えてくれた時間が間違っていたのだ。誰かが文句を言うかと思ったら、その代わりにポップ・コーンとくしゃみと咳の音がやんだ。

『ギルバート・グレイブ』を最初に観たのは、確か僕が中学三年生のときだったと思う。場所は隣の小さな映画館で、一緒に観に行ったのは、そのとき仲が良かったクラスメイトの女の子だった。わざわざ電車に乗って隣町まで行ったのは、その映画が僕が住んでいた町では上映されなかったからだ。映画に詳しい彼女に連れられて観に行っただけとはいえ、それは立派な、そして純粋なデートだった。でも僕たちの間では、そのときにはまだデートとしては認識されていなかった。言うならば友達を同伴しての映画鑑賞だった。と同時に、僕たちがただの友達同士だというには親密過ぎるということもわかっていた。気分によっては手をつなぐこともあったし、そうやって映画を観る以外にも二人きりでどこか遠くへ出掛けたこともあったからだ。意識している互いの距離感と事実上の関係との温度差に戸惑っている時期だったのか、あるいはまだ恋愛における自己表現の矛盾というものを受け入れられていなかったのか、とにかく僕たちの間にはそれ以上のことは何もなかった。僕たちは中学三年生で、いくら背伸びをしてもそれ以上にはなれなかったのだ。僕がどういうつもりで彼女と一緒に時間を過ごしていたのかはあまりよく覚えていない。もちろんその映画を観に行ったことは覚えているけれど、その前後の文脈となると、てんであやふやだ。ただ、ひとつだけ覚えていることがある。映画が終わってから公園で映画の話をしているときに、僕は最後のシーンが好きで、彼女は最後のシーンが余計だと言ったことだ。彼女は「後日談的なものが嫌いな」と言って説明しようとしたが、僕にはもうひとつよくわからなかった。僕にはどうしても映画の一シーンについて、それが必要でないなんていうことは思いつきもなかったのだ。だからいくら彼女に「あれは絶対無駄よね」といくら言われても、最後まで「そうだね」とは言えなかった。僕にはどうしても最後にトレーラーが土埃を巻き上げて近寄ってくるシーンが必要に思えたのだ。散々考え抜いた末、最後に僕は彼女に向かって「そもそも必要ないシーンなんて、あるはずないじゃないか」と言った。その気持ちは今も変わらないし、映画というのはそういう風にして観るべきではないと思う。でも中学三年生だった彼女は、その僕の最後の言葉に対しては何も反論しなかった。「そうね」とも「そうかな」とも言わず、ただ公園の砂場を見つめているだけだった。

その彼女とは高校二年生の冬になって、セックスをした。前後の文脈はこれまた覚えていないのだけれど、とにかく僕たちは『ギルバート・グレイブ』を観た二年後の冬、はじめてセックスをした。これは彼女に言わせれば、後日談ということになるのだろうか。

隣で令美が大きく背伸びをした。映画はいつの間にか終わっていた。

「どう？」と僕は短い質問をした。

「すごくいい映画ですね」と令美は言った。

「どのシーンが好き？」

「ええと——三人が湖に入るところかな」

「そうだね。きれいだよ」と僕は言った。「ところでさ、昔、あの最後のシーンが必要なんじゃないかっていう友達がいたんだ。どう思う？」

「一年後にまたトレーラーが帰ってくる場所ですか？」

「そう」

「ないと寂しい気がしますけど」と令美はしばらく考えてから言った。

「そうだよ」と僕は言った。

それから僕たちは近くのイタリアンで夕食を食べた。ピザが焼けるのを待つ間、令美は僕を質問攻めにした。令美が授業中に再三我慢してきた、プライベートな質問ばかりだった。僕はそれに正直に答え、令美はそれにいちいち感心していた。助け舟のピザが運ばれてきてからも、令美は質問を続けた。「僕のことなんか聞いてどうするの？」と何度も横やりを入れたけれど、令美は「いいんですよ」と言っ取り合わなかった。結局、僕はほぼ二時間、断続的に喋り続けた。ちよつとした自伝が書けるくらいの量だった。

九時を過ぎて質問のペースが落ちてきたところで、僕は令美を帰すことにした。もちろん令美は「まだ早いですよ」とごねたけれど、僕は「続きはまた今度にしよう」といい加減な約束をして、何とか令美を説得した。

昼間待ち合わせをした駅で電車を降りると、時計は十時近くを指していた。

改札を出たところで令美が立ち止まって、「先生、今日はどうもありがとうございました」と言った。

「遅くなっちゃったから、寄り道しないようにね」

「はい。次は木曜日ですね」

「うん、じゃあまた木曜日に」と言っ僕は手を振った。令美の後ろ姿がロータリーの向こうに消えるのを見送ってから、僕は深いため息をついた。空に浮かんでいるはずの星の輝きは、駅前の野放図な明るさにひとつ残らずかき消されていた。



島の生活に変化が起きたのは、丸太小屋の浴槽に水が溜まり始めてから十日後のことだった。

朝目が覚めると、いつも聞こえるニワトリの鳴き声が聞こえなかった。何となく違和感を感じて小屋の裏に回ると、ニワトリはちゃんと畑にいたが、まだら模様のニワトリが一羽いなくなっていたのだ。

前日の夜から前兆はあった。夕方になっていつものように雨が降る前に小屋に戻り、早めにつけておいたハンバーガーを食べていると、バンズが裏の畑で急に吠え始めた。何事かと思つて小屋を出ると、ちょうどバンズが小屋の前を西の浜辺へ続く坂道の方向へ走り去るところだった。小屋の裏にまわってみたが、特に変わったことはなかった。ニワトリはちゃんといたし、畑が荒れた様子もなかった。バンズを追いかけてみたが、雨が降りそうだったのであきらめて入口のドアを少しだけ開けて眠ることにした。しかしその夜、結局バンズは帰ってこず、おまけに雨が降らなかった。そして次の日の朝、つまり今日の朝になって、ニワトリが一羽消えていたのだ。

「どうしたんだろうね」心なしか広くなったような気のする畑を見ながら私は言った。

「逃げたのかな」とイメル。

「あんなに畑から出たがらなかったニワトリが、突然逃げたりするかな」

「何かあったのかもしれないね」

「昨日の夜、バンズがずいぶん吠えてただろう。バンズも戻って来ないし、何か関係があるかもしれない」と私は腕組みをして言った。

「肉でも焼いてればそのうち匂いをかぎつけて戻って来るよ」とイメルが言った。

裏の畑でトマトとレタスを採ったあと、私はニワトリの数をもう一度数えてみた。二十ニ羽だった。真っ白が十九羽と、まだらが二羽と、茶色が一羽。

「あれ？ あのニワトリ、びっこ引いてる」とイメルが畑の中を指差して言った。

「どれ？」

「あの茶色のやつ」

確かに様子がおかしかった。一羽しかない茶色のニワトリが、他のニワトリと明らかに違う動きをしていた。私が畑に入るとニワトリたちはさっと波が引くように私のそばから離れたが、茶色のニワトリだけが畑の隅に残った。そのニワトリはいつものように平然と悟りを開いたかのように私を見ていたが、足が一本しかなかった。

「足がない」

私より先にイメルがそう呟いた。茶色いニワトリの右足が、まるで手術をしたみたいに根元からきれいになくなっていた。

「かわいそう」

「どうしたんだろう」

「喧嘩でもしたのかな」

「ニワトリ同士が？」

「じゃあどうして？」

「さあ——でもまだらのニワトリがいなくなったのと関係はあるだろうな」

そうは言ったものの、何かが具体的に思いついたわけではなかった。ニワトリの足の数
が四十三に減ったことに目をつぶれば、目の前の風景はいつも通りだったし、ニワトリた
ちにとつてはどうでもいいことのようにも見えた。

「あ、ちよつと待つて。嫌な予感がする」イメルが突然そう言つてハンバーガー屋に向か
つて駆け出したので、私はあわててあとを追つた。屋台のところでイメルに追いつくと、
屋台の向こうでしゃがんでいたイメルが渋い顔をして立ち上がつて言つた。

「ねえ、驚かないでね」

「どうした？」

「肉が増えてる」

「まさか」

「ほら、見てよ」そう言つてイメルは冷凍庫のドアを開けた。私は屋台の正面から体を乗
り出して、冷凍庫の中を覗きこんだ。確かに肉が増えていた。残りの数がかなり少なくな
つていたので、この先どうしようかと悩んでいた矢先の出来事だった。

「これって——」

「ああ、そうかもしれない」と私が言うと、イメルは眉をしかめた。

いくら考えても、どうしようもない問題だった。いなくなったニワトリのことを忘れて、
増えた肉をありがたく頂戴するしかなかった。それにしても気味が悪いことには変わりな
かった。

「食べたくない」とイメルが小さな冷凍庫の中に並んでいる肉の塊を見ながら言つた。「あ
たし、やめとく」

「大丈夫だよ。いつものと同じだ」と私は言つた。それは自分自身へ向けた言葉でもあつ
た。

結局私はいつもと同じようにハンバーガーを食べ、イメルは「明日はちゃんと食べるか
ら」と申し訳なさそうに言いながら肉抜ききのハンバーガーを食べた。

ハンバーガーを食べてしまうと手早く片づけをして、丸太小屋の浴槽の観察に向かった。
それはいつからか毎朝の日課になっていた。

丸太小屋の扉を開けると、イメルが「ああっ！」と声を上げた。昨日の夕方には五十セ
ンチほど溜まっていた水が全部なくなっていたのだ。浴槽の中はまだほんのり湿っていた
が、水は一滴も残っていなかった。

「あーあ、こんなことなら昨日お風呂に入ればよかった」とイメルがくやしそうに言った。

「今日はおかしなことばかり起こるな」と私は言った。

「もったいないことした」

「雨が続けばまた水も溜まるさ」

「そうだといいけど」そう言っただけでイメルはその不思議な浴槽をじっと見つめていたが、もちろんどこからも答えは返ってこなかった。

私たちは浴槽のことはあきらめて、今日の仕事にとりかかるところにした。今日の仕事というのは、雨ですっかり崩れてしまった浜辺の文字を丁寧に修正することだった。

南の浜辺の文字は三日前によく完成した。雨のせいで前日書いた部分に修正を加える必要があったので、作業が思うようにはかどらなかったのだ。完成した日も夜には雨が降ったので、次の日にはまた部分的に書き直さなければならなかった。作っては壊されるという繰り返しのうちにさすがに嫌気が差してここ数日は手抜きをしていたせいで、昨晩は雨が降らなかったのに浜辺の文字は崩れたままだった。それでもスコップの扱いにすっかり慣れたおかげで、午前中だけで東の浜辺と南の浜辺の半分を手直ししてしまった。昼になると私たちは朝と同じように別々の種類のハンバーガーを食べ、南の浜辺の残りの半分を書き直してしまうと、浜辺を歩いたり寝転がったり海に石を投げたり泳いだりしながらゆっくりと進む午後の時間を過ごした。

その日は夕方近くになってもバンズは帰って来なかった。さすがに心配になって、いつもはあまり行かない西の浜辺まで探しに行ったが、バンズの姿はなかった。ちょうど夕日が沈む頃だったので、私とイメルは西の浜辺に並んで座って夕日を見ることにした。十日ぶりの夕日だった。

「久しぶりだね」と私は言った。

「何が？」

「こうやってゆっくりするのが」

「毎日ゆっくりしてるだけだ」

「そうだけだ。ほら、ちよつとニュアンスが違うだろう」

「そう？ 毎日退屈で死にそうだけだ」

「退屈？ そういう風には見えないけど」

「まあ、それなりにね。それでも頑張ってるんだから」

「そうだな。確かによく頑張ってる」そう言っただけで足を組むと、上げた方の足の裏から砂がぼろぼろとこぼれた。つま先の向こうに見える夕日の色が上の方と下の方で違って見えた。

「ねえねえ、そう言えばさ、はじめて会った日に家族のことを覚えてるって言ったでしょ。何か他に思い出した？」

「家族のことです」

「そう」

「残念ながら何も」

「奥さんと子供がいるとかいないとか、そういうのも？」

「娘がいる」

「ほんとに？」

「ああ。でもそれ以外は何も思い出せないんだ。名前も年齢も、妻のことも」

「そう——でも娘さんのことを覚えてるってことは、大事にしてたんだね、きっと」

「そうだといけれど」

「ねえ、娘さんとこんな風に夕日を見たことある？」

「さあ、どうかな」

「じゃあさ、いい話教えてあげるから、今度こういう機会があったら話してあげてよ」

「いい話？」

「そう。子供向けのいい話。お父さんなら知っておくべきね」そう言ってイメルが夕日を見ながら話しはじめた。「地球っていうのは丸いでしょ。でも、地球が丸いってわかるずっと前には、海のずっと向こうに何があるのかっていうのはすごく大きな謎だったんだって。その中でも一番信じられていたのが、世界は丸い円盤で、海の上をずっと進むとどこかで海が突然滝みたいに終わってて、その下に巨大な龍が住んでるっていう話なの」

「龍？」

「そう。龍が海の終わりの滝壺の中に住んでて、そこに迷い込んだ船とか人間を全部食べちゃうって話。だから海の果ては危険だって信じられてたんだって。それからその龍は、太陽を吐き出して、太陽を飲み込むって信じられてたんだってさ」

「どういうこと？」

「太陽が昇るときにはその龍は東の海の果てにいて太陽を吐き出して、それが一日かけて西の海の果てに飛んでくる間に、龍はそこまでぐるっと海を回りこんで、今度は太陽を飲み込むの」

「朝日を吐き出して、夕日を飲むってこと？」

「そう。だから龍が太陽を飲み込んでる間は、世界は闇に包まれるの。だからその龍は船や人間を飲み込む恐ろしい怪物であると同時に、太陽をくれるありがたい存在でもあったんだって」

私は「ふうん」と呟いた。水平線に夕日が触れ、夕日の色が空の中にじわっと滲むように広がる場所だった。

「その話を聞いてから、あたし夕日を見るたびにあの下に龍がいて、夕日を食べようとしているの思い浮かぶの。地球が丸いなんて思うより、よっぽど夢があると思わない？」

「それじゃあさ」と私は言った。「星や月はどうして現れると思われてたのかな」

「さあ、どうかな。どう思う？」

「龍がもう一匹いて、それは夜の専門で、星とか月を吐き出してるとか」

「なるほど。あ、でもそれだと太陽と月が一緒に出てるときには喧嘩にならない？」

「喧嘩？」

「だって、そのときは龍はどっちも暇なわけでしょ。太陽と月を吐き出してるわけだから。

だから沈むのを待ってる間に喧嘩になるよ。海の向こうの滝壺で龍が噛みつき合ってるのって、ちょっと恐いけど」

「そうだな」と私は言った。「でもその間は龍が喧嘩に夢中で、そのときだけは船に乗って海の果てまで行っても龍に食べられずにすむってのはどうかな」

「あ、それも面白いね」とイメルは言った。

「そしたら船は滝壺に落ちて、そこには別世界が広がって——みたいな」私がそう言うのと、イメルは「うん」と頷いて、目の前に落ちていた小石を拾うと海に投げた。

「そういえば、ここに来てからまだ星とか月を見てないな」と私は言った。

「日が暮れるとすぐ寝るからじゃない？ 夜はずっと天気が悪かったし」とイメルは言った。「あたしは一度だけ見たよ。ここへ来てすぐのとき。夜中に目が覚めて、そっと外に出たことがあるの。真っ暗だったけど、星は見えた。危なくて歩けなかったからすぐ戻って来たけど」

「そうか」と私は言った。「それじゃ、今日はちょっと夜更かししようか。星か月が見えるまで。雨も降らないみたいだし」

「いいよ、たまにはね」

それから私たちは水平線へゆっくりと沈んでいく太陽を見送り、無言のまま闇が世界を包み込むのをじっと待った。

夜が近づくにつれて、空にぼつぼつと光が灯りだした。砂浜の白とは違う、深く輝く白だった。そして夜が訪れ、闇の中に無数の星たちが姿をあらわにした。

「きれいだね」と私は呟いた。

「すごくきれい」とイメルが言った。

「月がないのに明るい」

「ほんと」

「これなら月なんていらんじやないかなって思うね。星だけでいい」

「——じゃあ龍は三匹いるんだね」

「どうして？」

「太陽と月と星を、別々の龍が吐き出してるから」

「んん——なるほど、そうだ。そうかもしれない」

「ってことは、今は昼間に太陽と月の龍が喧嘩をしてるってことよね。だから、いま脱出するなら昼間にしないとね、喧嘩に夢中で気づかれないから。太陽が出てる間に海の果てまでたどり着けたら、別世界に行ける」

「でも夜はダメだ」

「夜はダメ。星の龍が星を吐き出して暇を持て余してるから」イメルはそう言うと、少し残念そうに美しい夜空を見上げた。「ねえ、星座ってどのくらいわかる？」

「あいにく全然だめなんだ。北極星も怪しい」と私は答えた。

「ふふ、同じようなものだ」とイメルは笑って言った。「もしこういう夜空が毎日見れたら、もっと覚える気になるんだろうけど」

「まったくその通りだ」

島には虫一匹いないらしく、透き通った空気が星のきらめきを静かに浴びていた。星の明るさは海面にも映り、海の中で小さな生命体がうごめいているように見えた。涼しい風がさつと砂浜の砂を揺らし、背後の林の中へと流れていった。

そのとき、「ねえ、何か聞こえない？」と言ってイメルが突然立ち上がった。

私は耳をすませたが、何も聞こえなかった。イメルは唇に人差し指を当てて、耳を島の中心へ向けたまま静止した。

「何も聞こえないけど」と私が言いかけると、イメルが「しっ！ バンズかもしれない」と言って暗い砂浜の上を走り始めた。私はあわてて立ち上がってイメルの後を追った。

坂道を駆け上がると、イメルは小屋には寄らずに真っ直ぐに島の中央へ向けて走った。

私は黙ってイメルの後をついていった。ハンバーガー屋の前を通り、短い松林を抜けたところで、イメルが走りながらこちらを振り向いて浴槽のある丸太小屋を指差した。そのとき、丸太小屋の中からクウンと犬の鳴く声が聞こえた。

「バンズ！」とイメルが叫んだ瞬間、その鳴き声がびたりとやんだ。

イメルは小屋の正面にまわって扉を開けると、暗い小屋の中を見渡した。私はそこでイメルに追いついて、彼女の肩越しに小屋の中を覗き込んだが、そこにはバンズの姿はなかった。

「ここから聞こえたよね」とイメルが言った。

私が無言で頷いたところで、小屋の中に一歩だけ踏み込んだイメルが大きな声で「ああっ！」と叫んだ。

「見て！ 水が溜まってる！」

「本当だ」そう言って私はイメルと一緒に浴槽のところへ歩み寄った。今朝は空っぽだった浴槽の中に、溢れんばかりの水が溜まっていた。イメルが手をつけると、水面に大きな波紋が立った。波紋は浴槽の反対側まで進んでいって、ぱちんと弾けるようにして別の方向へ跳ね返った。

「ねえ、触ってみて」とイメルが私の方を振り返って言った。

「どうした？」

「すごく温かいの」

イメルの言う通り、その水は温かった。手ですくって口につけると、やはり淡水だった。

「ねえ、お風呂入ってもいい？」

「それはもちろん——」

「じゃあちよつと後ろ向いてて」

「あ、ああ」そう言っただけで小屋を出ようとする、服を脱ぎかけていたイメルが「一人にしないでよ、怖いんだから」と言ったので、私は扉に向かって立って待つことにした。Tシャツとスカートをすると床に置く音が聞こえ、それから水面が揺れる音がした。水が少しだけ溢れたようだった。

「うわあ、気持ちいいな」というイメルの声が穴の開いた小屋の中に響いた。「あ、ごめん、もういいよ。ありがとう」

私は振り向いたものの、あまり見るのも悪いと思い、扉にもたれたまま薄い闇の中をぼうつと見ていた。ときどき水面の光とイメルの白い肌が動くのが見え、そのたびに私は視線を移し、なるべく他事を考えるように努力した。

はじめはそれでよかったのだが、しばらくしてイメルが「ねえ、一緒に入ったら？」と言ったのを私は聞き逃し、彼女の機嫌をほんの少し損ねてしまった。私が「いいよ。やめとく」と言うと、イメルは妙に大人ぶった声で「どうして？ 入ればいいのに」と私を誘った。「娘と同じ年頃の子と風呂に入る趣味はないから」と私が言い返すと、イメルはけらけらと笑って言った。

「あ、どうせあれでしょ。ここから逃げ出して帰ってから、あたしが『この人、あたしとお風呂に入りました』って誰かに言っちゃうのを警戒してるんでしょ」

「そんなことを考えてないさ」と私は言っただけで軽く笑い返した。

「ねえ、いま『娘と同じ年頃』って言った？」

「え？ ああ——言っただけ。どうしてだろう」

「そんな気がしたの？」

「さあ、どうだろう。お決まりのフレーズだから思わず言っちゃったんじゃないかな」するとイメルは「ふうん」と言っただけで、浴槽の水をかき回した。また水が少し溢れた。

夜はどんどんと更け、星の明かりが強くなっているような気がした。目が慣れてきたせいか、イメルの体の線が闇の中にくっきりと見えるようになってきた。私はできるだけ浴槽から目を逸らそうとしたけれど、イメルが話しかけてくるせいでうまくいかなかった。話の内容は覚えていないが、私はずっと「ああ」とか「うん」とか、短い相槌ばかりを打っていた気がする。イメルが「そろそろ出ようかな」と言っただけには、私の体はかちかちに固まっていた。

丸太小屋を出ると、イメルは裏へ回ってバンズの名前を何度か呼んだ。その声は静かな

島中に響いたはずだったが、バンズはどうとう現れなかった。寝るときにも小屋のドアを少しだけ開けておいたが、眠りにつく直前に風でぱたと閉まってしまった。起き上がろうとするとイメルが「閉めとこうよ」と言ったので、私は閉じたドアをそのままにして睡魔を待った。気の短い睡魔はすぐにやってきた。

14



順風満帆に見えた令美の授業の風向きが変わり始めたのは、令美と映画を観に行った週の火曜日のことだった

その夜、僕はいつもより早く寝る支度を済ませてベッドに入って本を読んでいた。時間は十一時半を少し回ったところだった。何度も欠伸をしながら、もう少し、もう少しと意識を本に集中しようともがいているところに電話が鳴った。電話は令美の母親からだった。「もしもし。夜分遅くにすいません」

その声を聞いた瞬間、日曜日のデートのことや、火曜日の夜十一時半という時間や、母親の元気のない声などが、ひとつの不吉な兆候の塊となって僕の脳の中を駆け巡った。

「どうかされましたか？」と僕は言った。とっさに適切な言葉が口について出たのには自分でも少し驚いた。

「もしよろしければ、明日、先生にお話ししたいことがございまして」
彼女はそこで沈黙を作った。僕はわざと咳をして、その一方的な沈黙をつないだ。

「お時間はございますか？」

「はい。五時過ぎまでなら」僕はそう言いながら、もう一度頭の中で明日の授業の時間を確認した。明日は六時から授業がある。いつもの通りだ。

「それでは三時頃にうちまで来ていただけますでしょうか？ お時間は取らせませんので」

「ええ、わかりました。伺います」

「ありがとうございます」

「あの——大丈夫ですか？」

「え？」

「具合が悪そうですけど」

「あ、いえ、大丈夫です。ちょっと風邪気味でして。本当にこんな時間に失礼致しました。それでは明日」

「はい、三時に」

「おやすみなさいませ」

「失礼します」

ガチャ。

どこが気味が悪いのかわからない、だからこそ余計に気味の悪い電話だった。僕は冷蔵庫の牛乳を飲み、もう一度歯を磨いてベッドに入った。ベッドに入ってから、受話器の裏側に張りついたような彼女の声がまだ耳の奥に残っていた。

結局その夜は明け方まで寝つけず、次に目が覚めたときには正午をとくに過ぎていた。

昨日の電話の内容や令美の母親の声は、起きたばかりの頭の中のものやもやと一緒にぼやけていた。僕は何も考えずにシャワーを浴び、朝食を食べ、髭を剃ってから歯を磨いた。順番がいつもと違うような気がしたけれど、あまり深く考えないようにした。こういうときには余計なことを思い出さないように、どんどんと新しい情報を脳に送ってやった方がいい。

僕は着替えを済ませると外に出て、近所をぶらぶらと散歩した。いつも夕方になるとひと気のなくなる公園には子供を連れた母親たちの姿があり、賑やかな声が点々と生えた木々の間に響いていた。自転車やバイクが僕の横を器用に走り抜けていき、やがて視界から消えてなくなった。鳥たちが空を舞い、鳴き声とともに風に運ばれていった。世間はいつになく平和で、その中で僕の心だけがそわそわしているように思えた。

駅前を通り過ぎたところで、タバコ屋の角の電柱に貼ってある派手な広告が目に入った。先週、電話番号を書いたレシートをもらった焼き鳥屋の広告だった。それによると、来週から平日の七時まではビールと日本酒が半額になるらしい。短期のアルバイトを募集しているというようなことも書いてあった。時給は九百円だった。

僕はあのフロアの女の子のことを思い出した。彼女は僕の飲んだビールのジョッキを下げ、注文を聞いたまま戻って来ず、代わりに電話番号を置いていった。自分の持っている一時間という時間を、彼女は焼き鳥屋で九百円と交換し、僕は他人の家で三千円と交換する。でもそこには教訓なんて何もない。どちらが賢いということもない。ただ生き方に違いがあるだけだ。

僕はいつもは通らない駅裏の道を通って家に戻った。いつもより五分ほど余計に時間がかかったはずだった。玄関に入ったところで時計を見ると、二時三十分だった。僕は机の上にならかったいた細々したものを片付けながら、裏に電話番号の書かれたスーパールのレシートを探した。レシートは真ん中で斜めに折れた格好で雑誌の入った紙袋の下敷きになっていた。僕は受話器を上げ、その番号を回した。

ルルルル、ルルルル。

呼び出し音がしばらく続いた後、誰かが向こうで受話器を取った。

「もしもし」

「店の広告を見て思い出したんだ。遅くなったけど」

「――」

「いいかな、話しても。何か、すごく嫌な予感がするんだ」

「――誰のこと？」

「誰？」

「そう」

「たぶん僕じゃないと思う。誰か――他の誰かのことだと思う」

「どうして心配なの？」

「さあ、どうしてだろうね」

「あのととき声を掛けようとしたんだけど、やっぱりやめたの。電話番号を渡したこと自体、後悔してるの」

「どうして？」

「嫌な予感がするからかな」

「――とにかくさ、またビールを飲みに行くよ」

「うん。今度は上手く声を掛けられると思う。私、これでも恥ずかしがり屋だから」

「わかるよ」

「ありがとう」

沈黙。

「あなたの顔、好き」

「ありがとう。あんまり言われたことがないけど」

「そう？　時計のセンスが良くないけど」

「ありがとう。それはよく言われるんだ」

「それじゃあまたね」

そして電話が切れた。午後二時四十分だった。

僕は受話器を置き、Tシャツを着替え、石鹸で顔を洗った。

玄関のところでどの腕時計をつけるかどうか迷い、結局いつもの時計をはめて外に出た。

インターフォンを鳴らすと、母親はすぐに出てきた。どこかに出掛けるような格好をしていた。念入りに化粧をしているのが僕にでもわかる。

「お手数ばかりおかけいたします。こちらへ」

そう言って母親が指差したのは、車庫へ続く扉だった。彼女は扉を開け、先に中に入ると車庫の電気を点けた。

車庫に停まっていたのは銀色のマツダ・ユーノス500だった。彼女は助手席のドアを僕のために開けてから、車の向こう側にまわり込んだ。もちろん乗るしかなかった。新車の臭いの残った低いシートに座ると、消毒したばかりの尋問室にいるような嫌な気分にな

った。彼女の真似をしてシートベルトを締めたところで目の前の車庫のシャッターがガラガラと開き、彼女が喋り出した。

「山の手にいいレストランがあるんです。今日はそちらに行こうと思ひまして。ここところずっと忙しくて、家の中が片付いていないもので」

黙って頷くと、彼女の香水の臭いが鼻の中にすうっと染み込んできた。シャンプーの臭いも少し混じっていた。

グリップの良さそうなタイヤをはいたユーノス500は、信号のない交差点で何度も一時停止し、右折と左折を繰り返しながらすると滑るように走った。見覚えのない風景が現れては消えるのを窓の外に見ながら、僕はできるだけ静かに呼吸をするように心掛けた。視線は常に正面より左に定め、彼女の手や髪の毛が揺れるのが視界に入らないようにした。

運転はとても静かで、優雅だった。彼女の存在意義を自ら保証するような丁寧な走り方だった。僕は大きなシートに体を押しつけて目をつぶり、すぐ右にいる彼女の存在感を感じた。彼女がハンドルを切るたびに僕の体がほんの少しだけ揺れ、こそこそとシートが擦れる音がした。その音がなぜか僕を興奮させた。

十分ばかり走った末に彼女が車を停めたのは、山越えをする有料道路の入口の手前にある広い駐車場だった。車を降りると、道の反対側に一軒のレストランがあるのが見えた。駐車場の隅にはワゴン車と軽自動車が何台か停まっている。まわりには民家らしきものは何もない。

「先生、お昼はお済みですよね」と彼女が車の向こう側でドアをロックしながら言った。

「食べました」と僕は嘘をついた。

「じゃあ裏のテラスにしましょう」

そう言いながら彼女はそのレストランに向かってすたすたと歩き出した。僕は彼女の後ろについて歩きながら、広々とした駐車場にぽつんと停まったユーノス500をちよつとだけ振り返ってみた。ピカピカに磨かれたボンネットが眩しい光を空に向けて跳ね返していた。

店内には思ったより客がいて、賑やかだった。ほとんどの客が食事を終えて、ケーキやプリンを食べながら紅茶をすすっているところだった。彼女は店の一番奥のテラス席まで歩いていって、まわりをきよるきよる見てからその中の二人掛けのテーブルを選んだ。

「今日はどうもすいませんでした。わざわざ来ていただいて」

彼女はさっき聞いたのと同じような台詞を繰り返した。

「いえ、とんでもありません。次の授業が六時からですから、昼間は暇なんです。大体いつも同じような感じですけど」

「うらやましい限りですわ」

「そうですか？ これでも大変なことが色々あるんです」

彼女が微妙な愛想笑いを浮かべたところで、ウェイターが注文を聞きに来た。彼女は僕にケーキと紅茶の好みを訊ね、僕がそれに適当に答えを返し、彼女がウェイターに何かを注文した。何を注文したのかははつきりと聞き取れなかった。

「それで——」

ウェイターが立ち去るのを待ってから僕は言った。その一言で十分意味は通じたはずだった。彼女は肩で小さく息をして、それから口を開いた。

「実は、急な話で申し訳ないのですが、今週から授業を金曜日だけにしていただけないかと思ひまして」

彼女は僕の目を見ていなかった。視線は丸いガラス・テーブルの上のどこかをさまよっていた。太い鉄製の足に支えられたガラス越しに、スカートから出ている彼女の細い膝がぴったりと揃っているのが見えた。

「そうですか」と僕は言った。もつと悪い事態を想像していたせいで、安心して口調が少し明るくなってしまった。僕はあわてて「もちろん問題はあります」と付け加えた。

「すいません、本当にいつもいつも」

「謝らないで下さい。色々ご都合があるのはわかっていますから」と僕は言った。

ガラス・テーブルの下で彼女の足がもぞもぞと動いたのが見えた。僕はテーブルの上で手を組み、興味のないメニューをいかにも興味ありそうに手に取った。表はドリンク、裏はデザートメニューだった。

「あの——」

「はい」

「明日から、毎週木曜日の放課後に補習が始まるんです。それで令美の帰りが遅くなるので、それから先生に来ていただくとし遅くなりますし、あまり無理はさせたくありませんので」

僕は彼女の喋っている口元をじつと見ていた。彼女は目を合わそうとしなかったけれど、唇が何か別のことを言おうとしているのがわかった。

「大丈夫ですか？ 顔色が悪いようですけど」と僕は言った。

「え、ええ。すいません。今週に入ってから令美の体調が悪いみたいです。風邪だと思うんですけど、それが私にもうつったのではないかと」

そう言っただけで彼女はコンコンと小さな咳をした。

「無理をなさらなくても良かったんですよ。そういうことは電話口でおっしゃっていたなければそれで——」

そこでさっきと違うウェイターが近づいてきて、テーブルの上にレア・チーズ・ケーキと紅茶を二つずつ置いていった。

「どうぞお先に召し上がってください」

「いただきます」

僕がケーキにフォークをつけるのを待って、彼女は紅茶を飲んだ。

「ああ、おいしいですね」僕はケーキを一口だけ食べて言った。すると彼女が少しだけ表情を明るくして頷いた。口紅の色が真っ白いカップの縁にほんの少しだけ残ったのが見えた。

「このケーキはうちの学校の卒業生が作っているんです。卒業生っていつでも、もう何年も前の生徒ですけど」

「そうなんですか。そういう楽しみがありますね、学校の先生っていうのは」

「そうですね。活躍している子ばかりではないですけど、やっぱり嬉しいものです」

僕は彼女が料理学校で料理を教えている風景を想像した。きりつと背筋を伸ばして喋る彼女の顔が目につかぶようだった。

「学校では生徒さんから何て呼ばれているんですか？」と僕は聞いてみた。

「そうですね、『記子先生』って呼ばれることが多いと思います。私も気に入っている名前なので、やっぱりそう呼ばれるのが一番嬉しいんです」

「そうですか。令美ちゃんが言っていましたよ、お母さんはすごく料理が上手いんだって。

だからいつも僕が夕飯を食べていけないのが不満みたいです」

「あら、そんなことを令美が？　——そうですか。仕事が忙しくてなかなか先生がいらしやる時間に帰れなくて」

「またいつかチャンスがあれば是非ご馳走になります」

「そうしてください。遠慮なんてなさらずに」

「ところでお母様——」

「先生、もし嫌でなければ、記子って呼んでくださって結構ですよ」

「え？」

「その方が私も気が楽ですし、何となく恥ずかしくて」

「わかりました」と僕は言った。「記子さん、ひとつだけ相談があるんです。聞いていただけますか？」

「ええ、どうぞ」

「最初に令美ちゃんの成績表を見せていただいたときに、日本史と英語が悪いという話で授業の方針を決めたのですが、本当はそうではないみたいなんです」

「と言いますと？」

「実は、色々あって英語の先生のが好きではないみたいで、それで反抗というか、わざとテストで悪い点を取っているようなんです。本人の口から聞きましたし、全国模擬のような学校外の試験だと点数がいいですから、それは本当だと思うんです。ですので、あまり学校の成績表のことは気になさらないでください。たぶん一時的なものですし、僕が

说得しておきますから、これからはさらに悪くなるようなことはないと思います。高校の成績も提出するとはいえ、受験には大して影響はないと思いますし、それに――」

僕はそこまで話したところで、彼女があまり話を聞いていないことに気がついた。彼女は確かに僕の話当真剣に聞いている素振りはしていたが、目がどこか違うところを見ているようだった。相槌にも力が入ってなかった。

「記子さん？」

「はい」

「まあそういうわけなので、心配はないと思いますが、一応報告ということ。もちろん令美ちゃんには黙っておいてください、僕が言ったっていうのは」

「ええ、もちろんです。大丈夫です」

そう言って記子さんは紅茶を飲んだ。まだ半分以上カップに残っていた。僕のカップは随分前から空っぽで、カップの底にコシヨウのような小さな茶葉が残っているだけだった。

「いい眺めですね」と言って僕は窓の外を見た。記子さんは黙って頷いた。

大きい窓の外には秋の山の色が一面に広がっていた。紅葉が始まったばかりの木々が、季節の変わり目のそわそわした雰囲気漂浮しているのがわかる。その山を背景に、僕と記子さんの姿が窓ガラスに透き通って映っていた。

「紅茶、いかがですか？」と記子さんが聞いた。僕は「いえ、大丈夫です」と答えただけで、口の中はなぜかからからに乾いていた。

急に令美の顔が頭に浮かんだ。窓ガラスの中の記子さんの顔がぐにやぐにやと曲がって令美になった。確かに二人はともよく似ている。喋り方は少し違うけれど、それは些細な違いだ。鼻立ちや目の流れ方がそっくりだ。令美の方が唇が少し薄い気がするけれど、パーツパーツでわけて見比べると、ますます似ているように思う。遺伝子というものの存在を信じざるを得ない瞬間だった。

「先生、令美を教えるにいくっていうことはありませんか？」と記子さんが言った。突然の質問だったが、僕はすぐに首を振った。

「そんなことはありませんよ。模範的な生徒さんです」

「そうですか」

「どうしてですか？」

「あ、いえ」

「僕がいるときだけおとなしくしているようには見えませんし、そういうお子さんはすぐわかりますから」僕がそう言うと、記子さんはうんうんと頷いてまた黙ってしまった。ちらっと腕時計を見ると、四時を回っていた。

「あの、授業日の話に戻るんですが」と僕は言った。「実は別の生徒さんから、もう一日授業を増やして欲しいと頼まれているんです。もしその木曜日の補習が長く続くようなら、木曜日に別の授業を入れても構わないでしょうか。もちろん補習が終わればすぐに元に戻

せるようにしておきますので」

すると記子さんは何事かを考え始め、しばらくして顔を上げて言った。

「はい、先生のご都合のよろしいようにしてください。多分補習はしばらく続くと思いますので、また状況が変わるようでしたら早めに連絡いたします」

「わかりました。それではそういうことで」

「あの——先生」

「はい？」

「令美はどんな子ですか？」

「え？」

「あ、いえ、その——授業中に令美と話をされますか？」

「もちろんですよ。例えばどういうことでしょうか」

「学校のこととか、家のこととか」

「そうですね。休憩時間にしか喋りませんが、どちらかと言うと僕が喋ってる方が多いですね。令美ちゃんが大学のことや家庭教師の仕事について色々と質問をするので、それに答えているという感じです。あまり自分のことは話しません——どうしてですか？」

「いえ、何でもないんです。すいません」

それがレストランでの最後の会話だった。その直後、僕がトイレに行っている間に記子さんが勘定を済ませてしまったのだ。もちろん僕は半分払うように言っていたけれど、取り合ってくれなかった。

レストランを出て道路を渡り、駐車場でおとなしく待っていたユーノス500に乗り込むと、静かな車内で僕は礼を言った。彼女は「いいえ、こちらこそ」と言って頭を下げた。

「何か相談があれば、遠慮なく言ってください。僕でよければいつでも伺いますので」と僕が言うと、記子さんは「はい」と短く答え、キーを回してエンジンをかけた。車はブルブルと車体を揺らした後、また静かになった。

次の授業までは少し時間があつたので、僕は駅まで送ってもらうことにした。車が町の中心部へ戻る間、僕は記子さんがわざわざあのレストランまで僕を連れて行った理由について考えていた。どうして彼女は木曜日の授業をしばらく休みにして欲しいと電話で言わなかったのだろうか。電話でも何も問題はないし、むしろ直接会うよりも話しやすかったのではないだろうか。電話では失礼だと思ったとも考えられるけれど、それならば夜遅くに電話をするに対してもっと気を遣うだろう。とにかくバランスが悪い。結局のところ、それが僕の記子さんに対する正直な印象だった。色々なことが、ものすごく不安定でちぐはぐなのだ。それに何かに怯えながら暮らしているという感もある。何か差し迫ったものが彼女の背後にいて、それが彼女の思考や行動を不安定にさせている。

「記子さん」

「何でしょう」

「このあいだの日曜日、令美ちゃんと二人で映画を観に行ったんです」

「そうですか」

「名画座に行ったことがないっていうので、ちょっと遠くまで。めずらしい映画館を見て喜んでるみたいでした。最近の映画館はどこも小ざれいですから」

「そうですか」と彼女は言つて、しばらく間を置いてから続けた。「先生が来てくださるようになってから、令美が前より明るくなったみたいで、私も喜んでいるんです。兄弟がいらないせいで家では退屈そうですし、学校の友達ともそんなに遊んでいる様子もないですから」

それから彼女は何も言わなくなってしまった。何かを考えている風だったけれど、それ以上はもう語らないという雰囲気だった。僕もそれ以上話しかけるのをやめ、窓の外に目をやつて次の授業のことを考えることにした。

駅のロータリーで車を降りると、僕はもう一度礼を言つた。記子さんは今度は何も言わずに頭を下げただけだった。記子さんの運転する車が視界から消えるのを見届けると、僕は駅前のパン屋でベーグルと缶コーヒーを買い、家に向かつて歩きながら食べた。

家に戻ると玄関先で着ていた服を全部脱いで洗濯機に放り込み、熱いシャワーを浴びた。泡だらけになるまで体をこすつてそれを全部流してしまうと、少し体が軽くなった気がした。

バスルームを出ると僕は濡れた髪のまま受話器を上げ、ダイヤルを回した。

電話に出たのは生徒の母親だった。僕は風邪を引いて体調が悪いことを伝え、今日の授業ができないことを丁寧に謝つた。それから木曜日に空気ができたことを母親に伝えた。明日からでも来て欲しいということだったので、僕は「体調次第ですが、また明日お電話します」と答えておいた。最後に「お大事に」という一言があつて、電話が切れた。

僕はそのままベッドに転がつて目を閉じた。記子さんの顔や言葉が次々に思い浮かんだ。彼女は何かを語りがっている。何かを言おうとしている。それだけは間違いない。でも僕にはそれが何なのか、見当もつかなかった。令美に関することだというのはわかるけれど、それ以上のことはさっぱりわからなかった。二人で映画に行ったことが問題になっている様子はない。むしろ僕と令美が二人でいるとすれば、それが喜ばしいと感じている様子さえある。ただ僕は、記子さんの一言が気になっていた。

「令美はどんな子ですか？」



次に目が覚めたのは、まだ夜が明ける前だった。私を起こしたのは、イメルのうめき声だった。私は暗がりでイメルの居場所を探し当てると、額に手を当てた。ものすごい熱だった。いくら呼びかけても返事はなく、イメルは苦しそうに喘ぎながらわらの中で何度も寝返りを打った。私は小屋を飛び出し、ハンバーガー屋へ走った。着ていたTシャツを脱いでホースの水でしっかりと濡らすと、それをよく絞って小屋に戻り、イメルの額にのせた。イメルの体を動かそうと背中に手を触れると、Tシャツがぐっしりと濡れていた。私はもう一度ハンバーガー屋へ走り、今度はフライパンに水を溜めて戻つてくると、水を手ですくってイメルに飲ませた。それを何度か繰り返しているうちに、イメルがようやく目を開けた。

「イメル、イメル」と私が呼びかけると、イメルは「すごく熱い」と闇に消え入るような小さな声で呟いた。

「熱があるみたいなんだ。風邪を引いたんじゃないかな。とにかくじっとしてるんだ。頭を冷やすから」そう言つて私は額にあてていたTシャツをひっくり返した。Tシャツの片面は生ぬるく湿っていた。

それからイメルはまた眠りだし、私は明け方まで看病を続けた。私はわらでイメルの体をミイラのように包み、わらの中から突き出た顔を麦わら帽子で扇いだ。途中で冷凍の肉を使うことを思いつき、小屋を飛び出して屋台まで走って行つた。戻つてきて冷凍の肉をTシャツで包んで額にのせるとイメルは少し楽になつたらしく、喘ぐのをやめて小さな寝息を立て始めた。私はとりあえず胸を撫で下ろし、イメルの隣で横になった。気がつくと埃っぽい朝日が窓から差し込んでいた。

次に目が覚めたときも、イメルは私の横で同じ格好で寝ていた。顔色は特に悪そうではなかった。額の上のTシャツを取ると、冷凍肉の表面が少し溶けてぬるくなっていた。私は冷凍庫にそれを戻し、新しい肉をTシャツに包んで小屋に戻った。入口のドアを開けると、イメルが「ううん」とうなづいて起き上がるところだった。

「大丈夫か？」と私は聞いた。

「うん、大丈夫みたい。まだちょっと体がぼうつとしてるけど」とイメルは低い声で言つた。

「雨の日の次の朝みたい？」と私が聞くと、「それよりちょっと悪くて、頭が重い感じ」とイメルは首を回しながら言つた。

「気のせいかな、鳥肉の臭いがするけど」とイメルが言つた。

「ああ、すまない。いいアイデアだと思って」と言つて、私はTシャツにくるまった冷凍肉を見せた。

「すごい数の鳥に囲まれて襲われるような夢を見た気がするんだけど、たぶんそのせいだ」とイメルは言って少し笑った。

「よく冷えてるからいいかなと思って。僕も必死だったんだ。あんまり苦しそうだったから」と私が言うと、イメルは「ありがとう」と札を言った。

「朝ご飯、食べられそう？」

「うん。でもパンはちよつといいかな」

「サラダだけでも作ろうか」

「それがいい」

「了解」私はそう言って裏の畑へまわり、トマトを二個とレタスの葉を何枚か採った。

屋台でサラダを作っていると、麦わら帽子をかぶったイメルがよろよろと歩いて来るのが見えた。「寝てた方がいいよ」と私が言うと、「あそこ、埃っぽいから余計悪くなりそう」とイメルは眩しそうに太陽を見ながら言った。

それから私とイメルは東の浜辺にある一番大きな松の木の下で朝食をとることにした。朝食のメニューはちぎったレタスの葉の上に輪切りにしたトマトをのせ、それに塩を振っただけの簡単なサラダだった。食べている間、イメルの額に当てていたTシャツを海水で洗い、それを松の木の枝に引っ掛けて乾かした。私は最後にひとつだけ持ってきていたパンをかじり、残ったレタスを全部食べた。イメルは口の中のをゆっくりと噛み、ゆっくりと飲み込んだ。

「大丈夫？」と私は言った。「顔色は悪くなさそうだ」

「うん。大丈夫だよ」とイメルは言った。

「昨日のお風呂がまずかったかな」

「そうかもね。ちゃんと体拭かなかったから」

「これ以上は待てないな。急がないと」

「急ぐ？」

「島を出るんだ」

「脱出するの？」

私は頷いた。「やっぱり船も飛行機も通りかかる気配がない。魚も鳥も虫もいないくらいだから、よっぽど辺りな場所なんだろう。助けを待ったって——」

「鳥はいるよ」

「鳥？」

「何言ってるの。ニワトリが二十二羽もいるじゃない」

「ああ、そうだった」

「しばらく見てないけど、犬も一匹いるし、あと宇宙人も一人いるよ」

「それに人間が二人。オスとメス」

「そうだった」

「変な所だな」と私は言った。

「ほんとにね」とイメルは言った。

イメルの体調は良さそうだったが、大事を取って小屋で休ませることにした。その間、私はパンをしまつてあつた棺のような木箱を小屋から苦勞して引きずり出し、小屋の前で分解した。木箱からは大きな三枚の長方形の板と二枚の小さな長方形の板が取れた。私はその大きい方の板を一枚持つて南の浜辺へ行き、試しに海に浮かべてみた。板は浮いたが、その上にバランスを取って乗るのは大変だった。じつと寝そべっている分には問題ないが、少し大きな波が来たり、板の上で体を動かそうとすると、たちまちバランスを崩して転覆してしまう。

私は一旦小屋へ引き返して板を全部持つて砂浜に戻ると、大きな長方形の板を三枚並べて置き、その上に小さな長方形の板を二枚横向きに渡して、それをひと巻きのロープを全部使つて繋ぎ合わせた。安定は悪かったが、何とか板はくつついた。大きさも二人が十分寝そべることができる大きさだった。

私はそれをずるずると引きずりながら、また海へ戻つた。それを海に浮かべて乗つてみると、ぐらつきはするものの、少々の波には耐えられそうだった。寝返りを打つスペースはないが、手足を少しくらい動かしても、板はちゃんと海の上に浮いていた。私はそれを砂浜に戻すとロープを一旦ほどき、板をもう一度頑丈に縛り直した。ロープがギリギリと悲鳴を上げ、五枚の板ががちりと組み合わさつた。

小屋に戻ると、私はイカダの完成をイメルに報告した。

「意外としつかりしてる。大丈夫だと思うよ」

「あれを使うつて、いつ思いついたの？」イメルがわらひの中で眠そうに目をこすりながら言つた。

「ついさつきさ。パンがたくさん入つてるうちは気がつかなかつたんだ。丸太小屋を壊すよりはずつと簡単だった」

「うまくいきそう？」

「たぶんね。ここで作れるベストだと思う」

「じゃあそれに賭けるしかないね」

「波が静かなら、かなりもつと思うよ。陸地か、少なくともここよりましな島が見つかるまで漂流するしかない。その間に助けも見つかるかもしれない」

「ここに留まるのはほんとにもう限界かな？」脱出する目途が立つたとはいえ、イメルは不安そうだった。

「限界だと思う。確かに水と食料はあるけど、パンももう少なくなつてきたし、ニワトリも減つて。食べてるとはいつても栄養は足りてないから、体力がなくなる前に動かないと手遅れになる」

「それにあれだよね、人体実験説」

「そうだ。これが一種のゲームだっていう可能性もまだ残ってる。漂流を始めた途端にヘリコプターか何かがやって来て『ゲーム・オーバー』なんていうことも十分考えられるんだ。僕たちは十分にやったよ。何に使うのかわからないけど、研究データもいくらかは取れただろう。悪いがこれ以上はつきあつてられない」

「そうだね」とイメルは言った。「でもさ、島を出るなら天気の良いときがいいね」

「それになるべく早いほうがいい。風邪が治ったらすぐに出よう」

「うん」とイメルは最後に頷き、「もう少し寝てていいかな」と言つて目を閉じた。

私はイメルが寝息を立てるのを見届けて小屋を出ると、そつと入口のドアを閉めた。

「さて――」

大きな深呼吸とともにいつかと同じ台詞を吐き出し、私はハンバーガー屋に向かった。

今日の仕事は、脱出の前に島のことで気になっていたいくつかのことを確認することだった。前々からやろうと思つてはいたが、イメルと一緒にいるとやりにくいことがあつたのでチャンスがうかがつていたのだ。今日はまさにその日だった。

ハンバーガー屋の前に来ると、私は屋根から吊り下がっているハンバーガーのイラストの描かれた看板を力任せに引っ張つた。看板はガリガリつという音とともに屋根のトタンの一部をひきちぎつて地面に落ちた。私はその看板を表にして地面の上に置き、そのイラストを指先でなぞつてみた。一言で言うところ、それはいわゆる普通のペンキだった。筆の跡も色のむらもペンキの丸い立体感もある、自然なペイントだった。人間の手で作られた看板だ。私はその看板をそこに置いたまま、今度は屋台の裏にまわつて、崖の下に向かつて伸びている管のうちの一本をつかむと、それを綱引きの要領で思いきり引っ張つてみた。

しかし管はほんの数センチ手前に動いただけでぴたりと止まつてしまった。強い風が崖の下にぶら下がっている管を振り回す感触が伝わってきた。残りの二本も同じようにしてみたが、やはりびくともしなかった。私は崖に近寄り、うつ伏せになつて崖の下を覗き込んだ。無機質な三本の管が大自然の中に飄々と浮いているのはやはり奇妙な眺めだったが、切り立った崖にぶつかる波は我関せずとも言いたげに相変わらずの轟音を響かせていた。

私は松林まで行つて、手のひらより少し大きいくらいの石を四つほど拾つてくると、それを持つてまたさつきと同じ姿勢で海を見下ろし、管が崖の中に消えたあたりをめがけてその石を投げた。石は崖にぶつかりながらどんどん小さくなつていき、やがて泡立つ波間に消えた。宇宙人が下の崖から顔をひょっこり出して――というようなことを期待していたのだが、どうやらそんなに簡単ではないようだ。

石を全部投げ落としてしまうと、私は立ち上がつて管のうちの一本を反対向きに――屋台と綱引きをする格好で――引っ張つてみた。すると管は拍子抜けするくらいすると手前に動き、屋台の足元の地面が少しめくれて、埋まつていた管の中から内側の細い管が

現れた。排水か、電気の通っている管だ。もう一本の管も同じように引っ張ってみたが、外側の管だけがあつけなく地面から抜けてしまった。どうやら管を伝って崖の下に降りるという無謀な作戦もあきらめなければならぬようだった。

私は一旦小屋に戻って小屋の外に立てかけてあつた木の梯子を持つと、今度は浴槽のある丸太小屋へ向かった。島の中心に位置するこの奇妙な建物に何も意味がないはずがないとずっと思っていたのだ。はじめて目にしたときに感じた不自然な印象はまだあるし、特に浴槽に水が溜まりだしてからは、ますますその気持ちは強くなった。何か特別な目的があつて造られたとしか思えないし、水の量や屋根の穴には何か意味があるに違いない。

浴槽には昨日と同じように溢れんばかりの水が溜まっていた。屋根に空いた穴のせいで小屋の中は外と同じくらい明るく、天井の様子がよくわかる。質の悪い洗濯板のように見えるわらぶき屋根はよく見るとところどころに詰まり方の薄い場所があつて、そこから空の光が漏れている。繊細さが明らかに壁のそれとは違い、屋根の穴の断面もあまりきれいに切り揃っているという感じがしない。材料が足りなくなつたので仕方なく別のものを混ぜたような不揃いな感じさえある。私は持ってきた梯子を壁に立てかけてのぼり、天井の四隅や屋根のわらの隙間を隅々まで観察してみた。小型のカメラやマイクが仕掛けてあると思つたのだが、三十分近く調べてみても何も見つからなかった。

私は梯子を床に置いて、浴槽の中に足を入れた。水の温度は昨日と同じように生温かく、この島を囲む海水と同じような、すつと体に染み込んでくる心地よさがある。自分の体が何に触れているのかわからなくなるような不思議な感触だ。私は浴槽から足をそつと出し、波紋が静まるのを待ってから注意深く浴槽の底を眺めた。浴槽は間違いなく本物の大理石でできており、しかも繋ぎ目がない。これだけの面積の大理石をここまで正確な円形に切り出すのがどれくらい大変かは、事情を知らない私でも容易に想像できる。しかも見ようによつては浴槽の底と壁の繋ぎ目さえないように見える。そうすると、この容積の大理石を誰かがどこから切り出し、その中をくり貫いて浴槽を作つてここに運び込んだということになる。不可能とは言わないが、それは限りなく不可能に近い作業だ。そもそもこの場所ですんなることをやる理由がさっぱり思いつかない。もしこれが本当に宇宙人の作業なら、少しは納得できるのかもしれないが。

私は外へ出て、壁のすぐ下の地面を一箇所だけ掘り返してみた。柔らかく湿った黒土を雑草と一緒に横にかき出していると、しばらくして基礎部分のコンクリートが顔を見せた。私は同じ作業を繰り返しながら小屋をぐるりと一周した。電線か何かが埋めてあるかもしれないと思っていたのだが、結局何も見つからず、小さい土の山が小屋をすっかり囲んでしまった。

私は腕組みをして丸太小屋を眺めた。しかしいくら眺めてみても、見た目以上のことはもう何もわからなかった。それは屋根に穴の空いた、ただのわらぶき屋根の丸太小屋だと

いう風に納得するしかないようだった。

イメルが起きてきたときには、もう夕方近くだった。イメルに具合を訊ねると、体調は悪くはないが、まだ少し頭痛が残っているということだった。汗をかいたので風呂に入りたいと言ったが、まだやめた方がいいと言って何とか説得した。代わりにハンバーガー屋のホースの水で体を軽く拭くくらいはいいだろうということになり、その間、私はイメルに背中を向けてハンバーガーを作った。

「昼間は何してたの？」

「何もしてない」と私は答えた。

「バンズは？」

「見てないな」

「お風呂はどうだった？」

「まだ水はあるよ。昨日の夜から変わってない」

「そういえばさ、その看板、どうしたの？」屋台の横に無造作に置いてある看板を見てイメルが言った。

「風が強かったみたいでぐらぐらして危ないから外したんだ。別に必要ないだろうと思って」

「まあそうだけどき。でも、かわいいイラストだからもったいない気もする」

「必要なら宇宙人が直しに来るだろうから、とりあえずはここに置いておくよ」と私は言った。

「ねえ、宇宙人のこと、ほんとに信じてる？」

「信じるっていうより、もうどっちでもいいって思うね。現れてくれないんだから、何か事情があるんだろう」

「っていうことは、あたしが見たっていうことは信じてるの？」

「信じてるよ。疑ってない」

「ふうん。まあいいや、ありがとう」

「どういたしまして」

私たちは屋台の前でハンバーガーをひとつずつ食べると、さっさと小屋に引き上げた。私はイメルのことか心配だったし、イメルもまだ外をうろろする気力はなさそうだった。寝る前になって、イメルがイカダのことを聞いてきたので、私は「重いから浜辺に置いてきた」とだけ答えておいた。イメルは続けて何か質問をするつもりだったようだが、しばらく沈黙した後で、妖精に甘い息を吹きかけられたように突然寝息を立て始めた。日が暮れたらもう一度島をまわってみようと考えながら、わらの中で体を伸ばして力を抜くと、私もいつの間にか深い眠りに落ちていた。



次の日、僕は本当に風邪を引いてしまった。朝起きると体が重たかった。髪を乾かさずに寝たのがまずかったのかもしれない。僕はうんうんと唸りながらも何とかベッドから這い出て、台所の引き出しの奥に埋もれていたほとんど飲んだことのない市販の風邪薬を飲んだ。冷蔵庫の中にまともなものが何もなくあったので、電話でそばの出前を頼んだ。風邪よりも前に、空腹で気を失いそうだった。

出前が届くと、大盛りのそばを飲みこむようにして食べた。鼻が詰まっているのと喉の痛みのせいで、そばの味はよくわからなかった。細切れの麺がばらばらと胃の中に沈んでいくのだけがわかった。つゆを全部飲み干してしまうと、またベッドに横になった。

翌日の金曜日になると体調はすっかりよくなっていた。令美の授業があるからというのが理由でもないだろうけれど、まんざらでもない気がした。僕は朝から久しぶりにご飯を炊き、冷凍庫にしまっていた冷凍の豚肉を解凍して、生姜炒めにして食べた。キッチンに立ちのぼった煙を出そうと窓を開けると、部屋の中の温かい空気と入れ替わりに、冷たい秋風がすうっと入ってきた。近所で誰かが金槌で釘を打つ音が聞こえた。

秋風と金槌の音に誘われて、僕は起きたままの格好のまま何気なく外へ出た。家の前の通りでは何かの工事が始まっていて、道端には工事の詳細を書いた大きな看板がいつの間にか立っていた。作業服を来た何人かの男の人がしかめっ面をして、手に持っている器械と地面を交互に睨んでいた。その様子を何となく眺めていると、一台の車が目の前をさつと走り過ぎた。それは記子さんが運転していた銀色のマツダ・ユーノス500だった。僕ははじめそのことに気がつかず、随分たつてからはっとして車を目で追ったけれど、車はもうすでにどこかの角を曲がってしまっていた。確かに珍しい車ではないが、この町にそう何台もある車でもない。しかも、運転していたのは男性だったような気がする。本当に一瞬のことだったので、今さら確認のしようがないのだけれど、何かが引つかかった。たまたま同じ車が通りかかったと考えるのが自然なのはわかっている。でも、何かが引つかかった。

——父親？

僕はその場に立ったまま、工事の看板が立っているあたりに視線を向けて腕組みをした。でもそれ以上何かが思いつくわけではなかった。しばらくそうしていると、目の前で作業をしていた人の一人がいぶかしそうにこちらを見る視線を感じたので、僕は何かを思い出した振りをして、そそくさと家に戻った。

その午前中の出来事を洗い流すかのように、午後になって雨が降り出した。降り出した

ときにはまだ晴れ間が見えたので通り雨ならいいなと思っていたけれど、結局雨は令美の授業が始まる十五分前になってもやまなかった。僕は風邪がぶり返さないように用心していつもはかぶらない帽子をかぶり、傘を持って家を出た。家の前の工事は終わっていて、作業をしていた人たちの姿はなく、掘り返された地面の破片が路肩に積み上げられていた。

令美の家に着くと、玄関に入ったところで令美がタオルを持ってきてくれた。僕はそれで腕のあたりを拭いてから家に上がった。記子さんはいなかった。

「嫌な雨だね」と僕は言った。

「雨は全部嫌ですけどね」と令美がすかさず答えた。「勉強する気もなくなりますよね」

「まあね。でもちゃんとやるからね」

「わかってますよ」そう言って令美は僕に先に二階に上がるように言ってから、いつものようにキッチンへコーヒークッキーを取りに行った。授業を始める前にコーヒークッキーを二人で飲みながら、僕と令美は雨の悪口を一通り言い合ったあと、話はいつの間にか授業料の話になった。

「——それでね、先生に来てもらうのだから安くないんだからってママが言うんです。補習のあるときくらい休んでもらってもいいでしょうって。でも、授業がなくなると先生のお給料が減るでしょう？」

「まあそれはそうだけど」

「時給三千円って、すごい額じゃないですか」

「え？ お母さんそんなこと喋ってるの？」

「うん。そういうのも知っておいた方がいいって」

「ふうん」

「だから、私の授業が週に一回減るだけで、先生は月に映画館で映画を十三回観るだけのお金を損するわけでしょう？」

「まあそういうことになるね」と僕は感心して言った。「でもそんなこと、令美ちゃんが心配することじゃないよ。現に木曜日には別の子の授業が入ったからね」

「え？ そうなんですか？ なんだ、心配して損した。私の方が損したみたい」

「それでも結構人気者だね」と僕は冗談っぽく笑って言った。

「あ、そういえば、ママの仕事、今週から金曜日だけになったんですよ。だから補習が終わって先生がまた木曜日に来るようになれば、ママの料理が食べれますよ。やっとなさね」

「そうだね」

「本当においしいんですよ、ママの料理。先生信じてないでしょう」

「そんなことないよ」

「とにかく食べておいて損はないですよ。先生が食べるっていったらママ、張りきると思いますよ。来月になったらまた仕事の日が変わるかもしれないし、とにかく早い方がいい

ですね」

「そうだね」

僕は適当な相槌を打ちながら、父親についての質問をどうやって切り出したらいいか考えていた。

「ねえ、令美ちゃん」

「何ですか？」

「お母さんの料理学校って、どういうところ？」

「どういうって？」

「ほら、料理学校っていったって、色々あるだろう」

「私も三、四回しか行つたことないんですけど、小さいけどすごく立派な学校です。ほら、カルチャーセンターでやってるような料理教室ってあるでしょう。ああいうのじゃなくて、ちゃんとした学校です。授業料も結構高いらしいですよ」

「ああ、そうなんだ。てっきり『お料理教室』みたいなものを想像してた」

「違いますよ」

「どこにあるって言つたっけ？」

「駅の向こうの国道沿いを少し行つたところですよ。駅から歩いて五分くらいかな」

「じゃあいつも歩いて通つてる？」

「そうですよ。ママ、あんまり車は好きじゃないし」

「そうなの？」

「どうしてですか？ ママが車好きそうに見えます？」

「あ、いや、そういうわけじゃないんだけどさ」僕はそこまで言つてから、おととい記子さんと山の手のレストランに行つた話をするべきか一瞬迷つた。その微妙な間が気になつたらしく、令美がじつとこちらを見ているのがわかつた。

「実は、この間お母さんと会つたんだ。色々と相談したいことがあるからつて言われてさ」
と僕は言つた。「そのときに車に乗せてもらったんだけど、何ていうかな、すごく慣れてるっていうか、運転が丁寧だったから。すごく車を大事にしてるっていうか。だから好きなのかと思つたんだ」

「ママ、どんなこと聞いてました？ 私のこと？」

令美は僕が本当は車の話なんてどうでもいいと思つてるのがわかつたらしく、すぐに話の方向を変えた。

「いや、聞くんつていうより僕が報告しただけだよ。授業はこういう雰囲気、上手くいつてますとか、そういう話。当たり障りのない話ばかりだったけど」僕がそう言うと、令美は小さくため息をついてから言つた。

「ママは心配性なんです。何でも深刻に考えすぎて、一人でよく落ち込んだりするんです。それを行動力でカバーするから、ときどきまわりの人が巻き込まれて話が大量になつた

りして——まあ、いいときはいいんですけどね。先生も何か相談されたりしませんでした？私の進路とか将来とか」

「いや、それはなかったよ。何か言いたそうにしてた気はするけど。とにかく大丈夫ですよ令美ちゃんは、って答えておいた。お母さんもはじめての家庭教師だから心配だったんじゃないかな。令美ちゃんっていうよりは、僕のこと。よくあるんだ、そういうの」

「ふうん」と令美は半分は納得したけどといった感じで、少しぬるくなったコーヒーを静かにすすった。僕は令美がカップを机に戻すのを待ってから次の質問に移った。

「そういえばさ、お父さんの職場って、どの辺なの？」

「どうしてですか？」

「ただ聞いてみたんだけど」

「電車で三十分くらいはかかりますね。市内ですけど」

「いつも電車？」

「はい。いつもお昼過ぎに出て、夜中に帰ってきます」

「大変だね」

「そうなのかなあ。ママが朝早くから仕事に出るのに、パパはうちでごろごろしてるっていうイメージですけど」

「でもちゃんと働いているんだからさ、一緒だよ」

「でも絶対先生よりは時給低いですよ、うちのパパ」

「お父さんは時給で働いてるわけじゃないだろう？ だから比べてもしょうがないし、そもそも比べる意味がない」

「まあね、それはですけど。——あれ、何ですか？ 先生、パパに興味持ったんですか？」

「まさか。お母さんには興味があるけど」

「もう、そういう冗談を言わないで下さいよ」そう言って令美は楽しそうに笑った。「あ、すいません、先生、私ちょっとトイレ。コーヒー飲み過ぎたかな？」

「まだ授業始めてないよ」

「すいません、すぐ戻ってきます」そう言って令美はさっと椅子から立ち上がると、部屋を出て一階へ下りた。令美が戻って来るまでの間、僕は椅子の背もたれに体を預けたまま、ぼうっと天井を見上げた。天井にいつもと同じ場所に作り物の星が貼りついているのが見えた。外ではまだ雨が降っていて、窓には大小の水滴がぼつぼつと浮かんでいた。

前半の授業が終わって令美が新しくコーヒを淹れて戻ってきたとき、僕は令美に学校について尋ねてみた。

「一言で言うと退屈です」と令美は言った。「毎日復習とかおさらいとかばかり。同じことを何回も何回もやるんですよ」

「そういうものさ、受験勉強っていうのは。考えることより覚えることが大事なんだ。そ

れには何でもかんでも反復するしかない。僕もそうやって勉強してきた」

「それっていいことなんですか？」

「決してよくはないけど、避けて通れないのが事実だよね」

「あ、模範解答」

「悪いね。でもこう言うしかないんだ」僕がそう言うのと令美は眉をしかめた。僕は横目で令美を見ながらコーヒーに口をつけた。

「それは大学生になったら変わるんですか？」

「もちろん変わるよ。選択肢が増える。自分で選ばないといけなくなる」

「選択肢が増えたって、やることは同じでしょう？ 単位取って、テスト受けて」

「でもそれを言ったら社会人だって同じさ。みんないつまでたっても同じことやってる」

「いいんですか、先生そんなこと言って」

「いいさ。令美ちゃんにはわかるだろう、そのニュアンス」

「まあ、少しは。でもそれって受験生に向かって言う言葉じゃないですよね」令美は軽く笑いながら言った。

「悪かった。ついつい令美ちゃんには言っちゃうんだ、こういうこと」

「あーあ、やる気なくした」そう言って令美は椅子に座ったまま両手を伸ばして背伸びをした。「先生のせいですよ」

「ごめん」

「先生、本当に彼女いないんですか？」

「唐突だなあ」

「答えてください」

「いないよ」

「どうして？」

「僕も知りたいけどね」

「高校生には興味あります？」

「ないよ」

「どうして？」

「どうしてって言われても——」

「私、世界中の男の人がみんな女子校生に興味があるのかと思ってた」

「冗談だろう？」

「半分だけ」

「んん——そうかもね。半分は本当かもしれない。でも僕はダメなんだ」

「どうしてですか？ 嫌な思い出があるとか。あ、生徒と何かあったとか？」

「ないない。それだけはない。選手生命に関わってくるからね」

「真面目ですね」

「慎重なだけだよ」と僕は言った。「令美ちゃんは彼氏いないの？」
「いません」

「どうしてだと思う？」

「さあ、お手軽に見えないからかな。いつも難しい顔してるって友達によく言われるんです」

「お手軽に見えない？ 難しいこと言うね。僕が高校生のときは、とりあえず美人ならみんな飛びついたけどな」

「慎重になったんですよ、男の人がみんな」

「そうかもね」と僕が妙な顔つきで言ったところで、令美が突然「あ、もう一回トイレ行ってきます」と言って立ち上がり、部屋を出て行ってしまった。僕は窓の外を見ながらクッキーをひとつ口の中に放り込んだ。

結局、後半の授業はまともな授業にならず、僕と令美はそれを雨とトイレのせいにした。そして僕は相変わらず母親の顔も父親の顔も見ぬまま、令美一人を家に残し、ひと気のない家を後にした。

17



翌日の朝にはイメルはすっかり元気になっていた。私が目覚めるよりも先にイメルは起き出して、裏の畑でハンバーガーの材料を集めていた。

「ごめん、先に食べちゃった」眩しそうに目を細めて歩いてきた私に向かってイメルが謝った。

「食べた？ まだ作ってないじゃないか」

「これ、二つ目の」

「そういうことか」と言って私は笑った。「構わないさ。お腹減ってたんだろう？」

「すごく食欲があるの。あと三つくらい食べられそう。食べすぎかな？」

「そんなことはないさ。それよりも平気になった？」

「何が？」

「ニワトリの肉」

「ああ、もう忘れちゃった。それより感謝しなきゃって思うようになった」

「前向きだね。いい傾向だ」

「それにこれが最後かもしれないと思うと、食べとかなきゃって思う。このハンバーガー、結構おいしいよね、今さらって感じだけど」

それから私もイメルにつられるようにハンバーガーを二つ食べ、それとは別にトマトを

丸々ひとつ食べた。畑の中でトマトを齧っていると、何となくニワトリの数がまた減ったような気がしたが、数えてみるとニワトリはちゃんと二十二羽いた。片足のない茶色のニワトリは前よりも威張っているようにも見えたと、他のニワトリの機嫌をうかがってびくびくしているようにも見えた。食べ終わったトマトのへたを群れの中に投げ込むと、その茶色のニワトリだけが興味ありげにひよこひよここと片足で飛び跳ねながらトマトのへたに近づき、くちばしで何度かつついた後、また群れの中に戻っていった。

「またニワトリ？　ほんと好きだね」と私のすぐ後ろでイメルが呟いた。

「好きってわけじゃないさ。でも何て言うか、仲間のような気がしてきてさ」

「わかるけど」

「名前でもつけてやったらよかったなって思ってる」

「そんなこと言ってる、見分けつくの？」

「つかない」

「じゃああきらめたほうがいいと思うけどな」とイメルはため息混じりに言った。「それにさ、いなくなったニワトリのことを考えると辛くならない？　名前なんかつけなくてよかったって思うけど、あたしは」

「そうだね」

「それよりさ、最後なんだから泳ぎに行こうよ。こんなきれいな海、もう二度と見れないかもしれないよ」

「確かに。でもその前にひとつだけ質問してもいいかな」

「どうぞ」

「ここのニワトリ、最後まで卵を産まなかったんだ。どうしてだと思ってる？」

「何言ってるの。全部メスじゃない、ここのニワトリ。知らなかったの？」

「え？」

「メスが何十羽集まっても卵は産めないの。知ってるでしょ」

「——イメル、それ冗談で言ってる？」

「何が？」

「ニワトリはオスがいなくても卵を産めるんだ」

「嘘でしょ？」

「本当だよ。有精卵とか無精卵とか、そういう話だけど。とにかく産むんだ、ニワトリは」私がそう言うと、イメルがいぶかしそうにこちらを見て言った。

「嘘じゃないよね？」

「嘘じゃない。理科の授業で習ったはずだ」

「あたしは習ってない」

イメルはそう言うで大袈裟に踵を返し、大股で歩き出した。私はニワトリの様子をちらちらと見やっつてから、早足でイメルの後を追った。

南の浜辺に着くと、私たちは波打ち際に立って、ほとんど同時に大きなため息をついた。

「これじゃ泳げないね」とイメルが言った。

「やめた方がいい」と私。

澄みきった空とは対照的に、海はひどく荒れていた。これまでに見たこともないほど波が高く、海の表面があちこちで白く裏返っているのが見えた。風が吹いているのをほとんど感じないせいで、海が一人で勝手に荒れているような印象を受ける。

「風なんてほとんど吹いてないのに」と、私は思ったことをそのまま口にした。イメルも同じようなことを感じていたらしく、隣で黙って頷いた。

「海も何となく濁ってる気がする」

「僕もそう思う」

海岸線を見渡すと、海水に濡れた砂浜の部分がいつもより広く、波打ち際が三メートルほど後退しているのがわかった。海に近づくと、海中に引き込まれた白い砂がどんよりとした海の色に汚されて底に沈んでいくのが見えた。

私とイメルはどちらからというわけでもなくその場に腰を下ろし、いつもと違う海をぼんやり眺めた。海は昨日までの孤高なまでの美しさを失ってはいたが、このままこの眺めに背を向けて立ち去ることがどうしてもできなかった。

私は海に運ばれてこの島へやってきた。そしてイメルと二人で海に囲まれて生活をした。私は海で泳いだ。海の音を聞き、海を見て毎日を過ごした。雨が海を打ったこともあった。砂浜を海が洗うこともあった。空と海の色が混ざり合うのも見た。夜になると海が青さを失うのも見てきた。そうやってこの島に来てからのことを思い出していると、目の前にある

海の表情が我々にいま何かを伝えようとしている気がしてきた。隣を向くとイメルが遭難者を探しているような険しい顔で海を見ていた。

「ねえ、イメル」

「何？」

「宇宙の缶詰って、知ってる？」

「宇宙の缶詰？」

「そう。ある有名な芸術家の作品」

「知らない。どういう絵？」

「絵じゃない。立体なんだ。『物』だよ」そう言って私は砂の上に人差し指で角の丸い長方形を描いた。

「オイル・サーフィンって、わかる？」

「缶詰の？」

「そう。四角くて、底の浅い缶詰」

『Hello Nasty』のジャケットのやつでしょ」

「何？」

「——いいや。ごめん、続けて」

「オイル・サーディンっていうと、油漬けのイワシが何匹か入ってる缶詰だよ」

「うん、たぶん合ってると思う」

「じゃあ、ひとつ想像して欲しい。その缶詰は一応ちゃんとした缶詰なんだけど、その外側にはラベルが何も貼ってなくて、しかもプルタブが外側ではなくて内側についてる状態っていうとどういうものか、わかる？」

「ラベルもプルタブもないっていうと、アルミが剥き出しの缶詰ってこと？」

「そう、その通り」

「で？」

「それが宇宙の缶詰」

するとイメルは眉をしかめ、それと同じ位の角度で首を傾げた。

「缶詰っていうのは、何かを閉じ込めるものだろう」と私は言った。「イワシとかマッシュルームとかピーナッツとか、そういうものを密閉しておくのが缶詰。でも、そのアルミが剥き出しの缶詰っていうのは、内側からしか開けることができないんだ。内側にしかプルタブがついてないから」

イメルは私の話を興味深そうに聞いているように見えた。私は濁った海を見ながら続けた。

「もしイメルが親指くらいの大きさになって、その缶詰の中に入ったらどう思う？」

「どうって——」そう言ってイメルは腕を組んだ。「たぶん暗いよね。真っ暗だよね」

「そうだろうね」

「息苦しくて、寂しいかも」

「そうだな」

「でもあたしのいる方にはプルタブがついてて、あたしは缶詰を開けられる」

「そういうこと」

「——何が？」

「わからない？」

私がそう言うと、イメルは少し悔しそうに私を見て、それからどぶ色の波打ち際を見つめたまま動かなくなった。私は砂の上に描いた長方形の中に指先で小さな点を打った。イメルはそれをちらつと横目で見て、それからまた視線をもとに戻した。

太陽はまだ低い位置にあった。太陽はその遠い場所から私とイメルの影を白い砂浜に長く描いているが、その熱はあまり感じない。風が吹いているような気はしないが、海は白く波打っている相変わらずの景色。目に見えているものと、自分の肌が感じている感触と

のバランスの悪さは、島に来てからずっと感じていることだ。体の中で何かが鈍っているのは間違いないのだと思うが、その正体はというと、まったく見当がつかない。生温かい液体につかっているうちに体中の感覚を奪い去られたような、それでいてどこか心地よい思い。とくにイメルのおそばにいますと、それをさらに強く感じる。

私は息を大きく吸い込んでみた。わずかな潮の臭いとわずかな海の音が、私の体の中にすうっと混じり込んだ。

「あ、わかった！」

イメルはそう叫ぶと、手をぱちんと叩いて私の方を見た。

「その缶詰は、あたしを閉じ込めてるんじゃないかって、あたしが缶詰の外のものを閉じ込めてるんですよ。どう？ 正解？」

「正解。すばらしい解答だ」私がそう言って手をぱちぱちと叩くと、イメルは得意げに続けた。

「つまりあれだよ、缶詰の中のあたしから見れば、地球だって宇宙だって缶詰の中に——ほんととは外側なんだけど——閉じ込めてるってことだよ。だから宇宙の缶詰」

「その通り」

「よく考えたね、その人」

「まったく」

「何ていう人？」

「忘れた」

「何それ、ひどいじゃない」

「そんなこと言われても困る。忘れたんだ」

「帰ったらちゃんと調べて教えてよね」

「ああ、帰ったらね。約束する」

イメルは指先を海の方に向けて空中に何かを描いていた。彼女なりの宇宙の缶詰のイメージを固めているのだと思う。直方体のアルミが閉じ込めた空間。その中に自分がいて、自分以外のすべてを閉じ込めているという感覚。空間の広さから考えると常識的には閉じ込められているのは自分なのだが、それをプルタブとラベルの存在が逆転させてしまう。

「さっき、ふと思ったんだ」と私は言った。「この島にいるのはとても孤独だけど、もしかしてそれは間違いで、自分たちが隔離されてるんじゃないかって、本当は自分たちが世界を隔離してるんだっていう気がしてき。それで思い出したんだ、缶詰の話」

「なんとなくだけわかる気がする。でもそれってどういう意味？ あたしたちが缶詰の中において、つまりこの島が缶詰で、それで外の世界を閉じ込めてて——」イメルは早口でそう言った。

「だから、これから開けるんだ、缶詰を。そして外に出る。中身を出す」

するとイメルは小さくため息をついた。「要するに、脱出するってことでしょ」

「そう」

「あなたが喋ると、何でもややこしく聞こえるのよね。そういうところあるって誰かに言われたことない？」

「さあ、どうだろうね」と私は言った。「ついでにもうひとつややこしい話をしてもいいかな」イメルの視線は前を向いたままだったが、唇が「どうぞ」という形に動いたように私には見えた。

「もしかしたら、僕は自分の意思でここに来たのかもしれないって思うんだ。何かに巻き込まれたっていう風に考えてたけど、実はそうじゃないのかもしれないって思うようになった」

「来ようとして来たってこと？」イメルは顔を前に向けたまま独り言を言うように呟いた。私も前を向いたまま頷いた。

「誤解しないで欲しいんだけど、もしかして、僕はイメルに会うためにここに来たんじゃないかっていう気がする」

「あたしに？」

「そう。それも、僕が会いたいって思ったんじゃないって、ものすごく強大な力に引かれて、引きずり込まれるように」

イメルは首を傾げて言った。「それって、あなたの意思じゃないじゃない。引きずり込まれたっていうのはそういうことでしょ」

「確かにね、そうとも言える。でも、引きずり込んだのも僕自身なんじゃないかって」

「——ややこしい話だね」

「だから最初に断わっただろう」

「そうだね」とイメルは言った。「でもさ、あたしはやっぱり自分がここへ来た理由なんて思いつかない。全部が全部唐突だし、不自然だし、非常識だし。何て言うかな、底無し沼に足を取られたみたいな感じがする。要するに、巻き込まれたってことだけだ」

「底無し沼か」

「あ、でもそれも正しくないのかも。もしかしてあなたが底無し沼で、そこに足を踏み入れたのがあたしなんじゃないの？　そういうことってあり得ない？」

「逆じゃなくて？」

「逆って何よ、あたしが沼ってこと？」

「例えばの話」

「ないわ。あたしは巻き込まれたの。あなたか博士か宇宙人か知らないけど、誰かの陰謀に」

イメルはそう言って立ち上がると、短いTシャツの裾から白い脇腹が見えるくらい大きく背伸びをして、それから「あーあ」と大きな声を出してから言った。

「まあいいや。とにかく、要するには島を出るってことだよな」

「そう」

「でも、要するには今日は海が荒れてるからやめた方がいいんでしょ？」

「よくわかったね」

「あなたの言いたいこと、だいたいわかるようになった」とイメルは言った。

その後、私はイメルを連れて残りの二つの浜辺にも行ってみたが、海は同じように荒れていて、とてもイカダを浮かべられるようには見えなかった。

丸太小屋にも寄ってみたが、浴槽の中には昨日と同じ位の水が溜まっていて、不思議なことに水は昨日と同じように温かいままだった。イメルがもう一度入りたいと言ったが、また熱を出したら困ると言って何とかやめさせた。小屋を出るときに入口の扉の足元にパンの食べ残しが落ちていたのを見つけたが、私はそれをイメルには黙っておいた。あとは島を出ることだけを考えればいいんだと自分自身に言い聞かせ、丸太小屋をあとにした。

昼の時間が過ぎ去り、もう少しで夕方が顔を出そうかという頃になって、雨が降り出した。雨は海の向こうから吹いてくる速い風に連れられたようにやってきて、島の上で突然立ち止まった。雨が降り始めたのと同時にあたりが暗くなった。龍が太陽を間違えて早めに飲み込んだんだよとイメルが呟いた。

私とイメルは小屋に戻り、濡れた体をわらで拭いた。体を拭いて濡れたわらはは入口近くに集め、晴れた日に外で乾燥させることも、いつの間にか二人のルールになっていた。わらを集めながら、部屋の中に数十個のパンが無造作に転がっているのを見て、私は木箱をイカダ用に解体したことを思い出した。私はパンをかき集めると、それを壁際に十個ずつ丁寧に積み上げた。イメルはその間ずっとわらにくるまって何かを考えていた。そうやって私は残ったパンの数を数えながら、イメルは屋根に当たる雨の響きを聞きながら、じっと雨と時間が過ぎていくのを待った。

あるまとまった量の時間が流れても、雨音は一向に弱まる気配がなかった。イメルはときどき目をつぶり、動かなくなつた。そしてしばらくするとまた目を開け、黒い天井を見つめ、そしてまた目をつぶった。それを何度か繰り返した後、イメルの口が小さく動き、「おやすみ」という音が私の耳に届いた。私は「おやすみ」と小さな声で返事をして、音を立てないようにその場に横になった。

そして次に目が覚めたのは、その夜が明ける随分前のことだった。



電話が鳴る音が聞こえた直後、僕は自分が暗闇の中にいて何も見えないことに気がついた。そしてそのすぐ後に、今が土曜日の夜中だということを思い出し、続いてこの時間に電話が鳴っているということに対してほんの小さな疑問を持った。そうやってもしかたしている僕をせかすように電話は鳴り続け、その音のせいで僕の動悸は速まった。僕は体を起こして暗闇の中の音源に向けて手を差し伸べた。固いプラスチックの感触が手の指先に伝わった。僕はそれをつかみ上げると、何も言わずに耳に当てた。女性の声が聞こえてきた。

「――センセイ」

その声はそうやって話しかけてきた。僕は体中の皮膚が一瞬にして縮み上がるのを感じた。

「センセイ」

とその声はもう一度同じ言葉を繰り返した。僕が「はい」と答えると、その声は「はあ」と息を吐き出し、そこで息を止めた。

僕は床に腰を下ろし、その冷たい声がそれ以上何も言おうとしないのを確認してから言った。

「記子さん？」

少し間を置いて、同じ声が少しだけ温度を上げて答えた。

「先生――」

「どうしたんですか？」

「――すみません」

「何かあったんですか？」僕のその問いに対して、彼女は今度は無言で答えた。

その沈黙はしばらく続いた。ゴソゴソという低音のノイズだけがときどき聞こえ、そのたびに僕は記子さんの表情や唇の動きや受話器を持っている姿勢や着ているものや部屋の様子や想像した。僕の想像する世界の中で、彼女は闇の中にいた。彼女は僕と同じような闇の中にいて、僕と同じように受話器を握り締めている。彼女は何かを怖れている。何かが起こるのを怖れている。闇がその恐怖を喚起している。その恐怖から逃れようと、彼女はさらに深い闇へ逃げ込もうとしている。

「記子さん」

耳に感じている丸いプラスチックの感触が、冷たい鉄板に張りついているような感触に変わりつつあった。

「部屋の明かりをつけて下さい。その方がいいと思います」と僕は言った。

何かがゴロゴロと転がる音がした。受話器を床に置いた音だと僕は思った。ズ、ズズと

何かを擦るような音が聞こえたあと、受話器を持ち上げる音がした。

「先生」

「記子さん？」

「――」

「どうしたんですか？」

「先生、お願いがあるんです」と記子さんは言った。「来てもらえませんか」

「え？」

「いますぐ、うちに来てもらえませんか」

「いますぐって、夜中ですよ」

「わかっています」

「何かあったんですか？ 誰かいないんですか、そこに」

記子さんはその質問には答えず、最後にこう言って電話を切った。

「先生に、お話があるんです」

床に落ちていた冷たいジーンズをはき、着ていた長袖のTシャツの上から薄いセーターを着て真水で顔を洗うと、ポケットに家の鍵だけを入れて外へ出た。玄関の時計が二時と三時のちょうど真ん中を指していた。

外は思ったよりも寒かった。僕はポケットに入れた鍵がカチャカチャと鳴るのを右手で押さえながら、街灯に照らされた道を早足で歩いた。少し霧がかかっているせいで街灯の光がぼやけて大きく見えた。交差点を渡り、何度か角を曲がってその家に近づくにつれて街の雑音が小さくなっていった。

その家の部屋の明かりはすべて消えていた。耳を澄ませてみたけれど、物音ひとつしなかった。まわりを見渡すと、明かりのついている家は一軒もなかった。巨大な人工的な箱が僕を冷たく見下ろしている。そのとき僕は自分が恐ろしく緊張していることに気がついた。冷え切ったつま先は靴の中で感覚を失っていて、膝がきしみながら震えていた。両手を擦り合わせたり深呼吸をしたりしてみたけれど、気持ちい落ち着かなかった。もう一度表札を確かめて門に手をかけようとしたとき、玄関に明かりがついた。そして扉が開き、そこから普段着の記子さんが現れた。

「どうぞ」と彼女はかすめるような声で僕に言った。僕は門を開け、それをそっと閉め、足音を立てないように家の中に潜り込んだ。玄関に入ると、記子さんはまるで金庫でも扱うような手つきで玄関に鍵をかけた。

「大丈夫ですか？」僕は弱々しく動く彼女の手を見ながら言った。

「ええ、すいません。非常識なことは十分にわかっています。でも先生にはどうしてもお話ししたくて」

僕は頷き、記子さんが招くままいつものようにスリッパを履いた。彼女は廊下の電気をつけ、代わりに玄関の電気を消した。明るく照らされた廊下の奥へ向かって彼女は何も言わずに歩き始め、階段の下まで来たところで今度は階段の電気をつけ、廊下の電気を消した。階段のところで彼女が振り返って「どうぞ」と言うまで、僕はその部屋の明かりがパチパチとついては消える様子を黙って見ていた。

二階に上がると、記子さんは令美の部屋を開けて僕を招き入れた。僕が部屋に入ったところで彼女は階段の電気を消し、ドアを閉めた。部屋の中ではベッドサイドに置かれたテーブルランプに小さな明かりがついていて、そのおかげで何とか部屋の中の様子がわかった。カーテンは閉まっていて、いつも授業で使っている机の上には大きな紅茶のポットとカップが二つ置いてある。ベッドの上はきれいに片付いている。もちろん令美の姿はない。

「どうぞ」と記子さんはいつも授業のときに座っている椅子を僕に勧め、いつも令美が座っている椅子に腰を下ろした。

「今日は夫は出張なんです。令美は友達のところへ勉強会をしています」と彼女は言った。

「そうですか」と僕は相槌を打った。

「先生には本当に申し訳ないと思っています。私、こんなことをしている自分が信じられなくて——でも、もう限界なんです」

僕は記子さんの表情を薄闇の中で追いながら、小さく息をした。

「どうしたんですか？」僕はもう一度聞いてみた。

「先生にしか話せないことなんです」と記子さんは言った。

僕は記子さんの目を見て頷いた。その瞳は濡れた氷のように冷たく輝いていた。その表面には不安定な形のオレンジ色のテーブルランプの光が滲んでいて、瞳の上で瞼が滑るたびにその光が消えては現れ、くると滑るように回って見えた。その瞬きのひとつひとつが空気の流れを淀ませ、そのせいで僕の体は固くこわばり、部屋の静けさが増していった。その静けさには誰も邪魔することのできない説得力と深さがあった。僕は椅子に座ったまま、その静けさを淀んだ空気とともにただ吸い込んでいた。時間が経ち、空気が完全に停止してしまうと、今度は体の中に貯まった静けさが集まって胃の上のあたりに鉛のようにへばりつき、やがて熱を持ち始めた。鼻腔から否応なく熱い息が漏れ、呼吸が浅くなり、僕は段々と息苦しくなった。息をいくら深く吸い込もうとしても、吸い込むべきものがもうこの部屋には残っていないような気さえた。

「誰にも言わないで下さい」

その冷たく鈍い声は部屋の中に響くことなく、僕の耳に直接語りかけた。まるで頭蓋骨に直接口を当てて話しているような、余計な距離感のない声だった。僕は息を飲んだ。そして記子さんが話し始めた。

「九月の終わりの金曜日のことでした。金曜日にはいつも料理学校の授業があるので、私はその日も午前中には家を出ていました。夫は昼過ぎに家を出るので、時間が合えばお昼には一度家に戻って一緒に食事をすることもあるのですが、その日は忙しくて学校を出られませんでした。夕方の授業の準備がいつもより大変だったのと、その前の週に風邪を引いていたので仕事が溜まっていたせいもありました。」

朝、学校に着いてまずしなければいけないのは、教務室の掲示板を見てその日のスケジュールを確認することなんです。生徒さんや先生方の休みや授業内容の変更などが結構頻繁にありますし、学校からの重要な連絡にも掲示板を使います。でもその日はいつも乗っている電車が遅れたせいで学校に着いた瞬間からばたばたしていたので、掲示板を確認しなかったんです。昼食を外で食べて学校に戻って——たぶん二時前だったと思います、いつも通り夕方の授業の準備をしているところに他の先生から声を掛けられて気づいたんですが、実はその日は午後の授業が全部休みだったんです。空調機の定期点検が何かだったと思います。もちろん以前から連絡はあったのですが、すっかり忘れていたんです。もちろん私は授業の準備をやめて、すぐに片付けをしました。授業がないとなると他にすることはありませんから、三時過ぎには学校を出て、真っ直ぐ家に帰ったんです。

玄関を入ったところで、令美の靴があることに気がつきました。おやつと思いましたが、学校が早く終わることもたまにはあるので、特に声を掛けずに家に上がりました。玄関でスリッパを履いていると、二階から男の人の声がした気がしたので、令美がめずらしく友達を連れてきているのかと思うて何気なく荷物を持ったまま二階に上がりました。ところが階段の踊り場まで来たところその声が夫の声に似ていることに気がついたんです。夫は仕事に出掛けているはずですし、おかしいなと思いながら耳を澄ませました。声は令美の部屋からでした。何かをこそそ話している声と、何か物音も聞こえました。部屋の手前で立ち止まると、令美の声が聞こえたんです」

僕はうつむいたまま淡々と喋る記子さんの顔が次第に険しくなるのを見ながら、手を膝の上で合わせた。

「私はその瞬間、その部屋の中で何が起きているかを知りました。もちろん私が聞いたのは物音や声だけで、私の勘違いかもしれないとは思いました。でもその次に何かがぶつかる音がして、夫が『向こうへ行こう』と言ったのが聞こえた瞬間、私はとっさに斜め向かいの寝室のドアを開けていました。寝室に入るとドアを閉めて、左手にあるクローゼットの中に潜り込みました。クローゼットは私しか使っていませんし、中がどういう風になっているかは私がよく知っていますから、とっさにここに隠れるしかないと思ったんです。反射的にそうしたんです。そこに隠れることがどういうことかなんて、まったく考えませんでした。下に降りたらよかったとは一瞬思いましたが、もう遅過ぎました。クローゼットの隅に座りこんでじっとしていると、部屋のドアが開く音がしました。二人がもつれるように部屋の中に入りこんで来て、そのままベッドにどさっと倒れる音がしました。クロ

ーゼットの中は真っ暗なので、もちろん何も見えません。隙間もないので部屋の中の様子もわかりません。でも音だけが聞こえてくるんです。暗闇の中で、音だけが聞こえてくるんです。それで――わたし、わたし――」

記子さんの体が震えていた。僕は彼女の腕を握った。体の震えが僕に伝わった。記子さんは震える手を顔の前に当てて、声を引きつけて泣き始めた。

言葉が出てこなかった。僕は記子さんの肩に手を置いた。いくら時間が経っても彼女の体の震えは止まらなかった。硬直した筋肉がどんと固くなり、両足が吸いつくように合わさっていくのがわかった。手のひらの間から涙がこぼれ、着ている服がみるみるうちに黒く湿った。

「記子さん」

僕は彼女の耳元でしわがれた声でそう囁いた。彼女は何度か首を縦に振って、大きく息を吸い込んだ。僕は机の上の紅茶のポットを持ち上げ、彼女の右手の甲に当てた。彼女はそれを震える手で抱えるようにして持つてそっと頬にあてた。彼女はその姿勢のまましばらく動かなかったが、やがて震えが少しずつ収まり始めるとポットを机の上に置いて、また話し始めた。

「――怖かったんです。本当に怖かったんです。私はクローゼットの中でずっと震えていました。途中から耳を塞ぎましたがダメでした。そうすると色々なものが余計に聞こえてくるんです」

彼女は喋りながらときどき体を引きつらせた。僕は彼女の肩から腕を外し、丸めた背中をゆつくりとさすった。

「たぶん十五分くらいだと思います。急に部屋の中が静かになって、それから二人が部屋を出ていくのがわかりました。どこか別の部屋のドアを開ける音と、階段を降りていく音が聞こえました。部屋の中が静かになって、私はようやく体を少しだけ動かすことができました。骨が折れたのかと思うほど体が痛みました。床に手をついたときに、体の下に授業に持って行っていたバッグがあるのに気づきました。その瞬間、玄関に脱いだ自分の靴のことが心配になりました。気がつかないで欲しいと思いました。耳をクローゼットにあてて、もっと注意して外の音を聞くようにしました。そのすぐ後で、玄関の扉が閉まるのが聞こえて、それから車のエンジがかかる音が聞こえてきました。エンジンの音が遠ざかったのを確認してクローゼットから這い出ると、私はドアに近づきました。令美の部屋で音楽が鳴っているのが聞こえたので、私はそっと部屋を出て一階に下りて、そのまま靴を履いて外に出ました」

「外に？」

「はい。家にそれ以上いたくなかったのもありますし、何よりも明るくて人がたくさんいる場所に行きたくて――それで駅まで歩いて行って電車に乗ったんです。どこへ行ったのかはあまりよく覚えていません。適当に來た電車に乗って終点まで行って、それから戻っ

てきました。駅に着いたときにはもう暗くなっていました」

彼女の手の指のシルエツトが闇の中で昆虫の触手のようにカサカサと動いていた。僕は彼女の名前を小さく呼んだつもりだったけれど、口の中がからからに乾いていたせいであまり音が出なかった。

「はじめは二人を恨みました。私を裏切ったということを恨みました。でも私にはそれを夫に言う勇氣はありませんでした。他の誰かと関係したならともかく、相手が娘では私も何と言って責めたらいいのかわからなかったんです。もちろん令美を責めることなんてできませんし、考えれば考えるほど辛くなるんです。それからしばらくするうちに二人が私の前で平然としてることが段々怖くなってきました。三人で食事をしながら話をしていても、夫と令美は今までと何も変わりが無いように見えるんです。もちろんその関係はもつと前からあったのかもしれませんが、とにかく私はその日まで何も知らなかったんです」

「でもそのとき記子さんは二人の姿は見なかったんですよね」と僕は言った。

「はい」

「それが勘違いだったとか、人違いだったっていう可能性はありませんか」

「ありません」と彼女はきっぱりと言った。「それくらいはわかります」

「でも姿は見えないんですよね」

「間違いありません」彼女は厳しい口調で言った。「そのうち二人が私がそのことを知っているということをわかっていて、わざと素知らぬ振りをしているのではないかということまで疑うようになりました。そういうことを考えはじめると、もう二人と一緒にいるのが苦痛でしかないんです。それで、先生に来てもらうことにしたんです」

「———どういふことかわかりませんけど」

「私が家にいない間、令美を一人にしたくなかったんです。令美が夫と二人きりで家にいないようにしたかったんです。夫はいつも昼過ぎに家を出ますが、あの日のようにちよつと家を出るのが遅いと、早く帰ってきた令美と顔を合わすことがあるんです。もちろんしよつちゆうあるわけではないですが、とにかく夫と令美が二人で家にいるかもしれないと思っただけで不安でたまらなかったんです。もちろんそのことがあつてすぐに、私は学校に辞表を提出しました。でもたくさん授業を持つていたのでさすがに無理も言えず、とりあえず週に二回まで減らしてもらうのがやつとでした」

僕はその言葉を聞いてようやく納得した。「なるほど。それで料理学校の授業のある日に僕を雇った。そういうことなんですね」

「———すいません」

僕はため息をついた。ため息をついてみても、どうしようもなく疲れた体力が力を取り戻す氣配はなかった。

「でも私、それだけではどうしても不安で———本当はそんなことするべきじゃなかったんです、後悔しているんです。でも他にはもうどうしようもなかったんです」そこで彼女

は言葉を切った。彼女の作る重く冷たい沈黙が部屋の空気をどす黒く濁らせていた。

「私、令美の部屋に盗聴器を仕掛けました」

「盗聴器？」

「はい。先生がはじめて来てくださった次の日です」

「そんな、盗聴器なんて使っても何も——」

「ええ、おっしゃる通りです。盗聴したところで何も変わらないのはわかっていました。さらに辛い思いをするだけだというのもわかっていました。でも、令美が本当はどういう子供なのか自分が全然わかっていないんじゃないかって思うようになって、それが一番辛かったです。だから盗聴を——」

僕は令美と授業中に話したことを思い出してみた。そのすべてをどこかで聞いている記子さんの姿を想像してみた。その会話の中に、記子さんが知リたかったことがひとつでもあったかどうか思い出してみた。でもその中に目の前の彼女を救える何かが見つかるとはとても思えなかった。

「こんなこと、するべきではなかったのはわかっています。でも私がとっさに思いついたのはこういうやり方だったんです。でも、もう限界です。令美が誰かと話しているのをこっそり聞くのは思ったよりも苦痛でした。友達や先生と話している内容や、聴いている音楽や、それに合わせて口ずさむ令美の声を聞くのは本当に孤独でした。夫と令美が寝たあとに、その日録音したものを一階のリビングで聞くんです。暗い部屋の中でソファに座って、令美の声を聞くんです。令美は楽しそうに話して、楽しそうに歌っているのに、私だけがその場にいないんです。ふと気づくと周りは真っ暗で、何の音もしないんです。私の耳にささっているイヤホンだけが音を立てているんです。嫌らしい音を立てているんです。それを私が聞いているんです。一人で、闇の中で。今日も先生に電話をするまで、そうやっていました。でもふと我に返った瞬間、怖くなったんです。もしかしたら今も夫と令美が一緒にいて、どこかで抱き合っているかもしれないと思い始めて——それで先生に」

震えながら話す彼女の体をさすっていると、彼女はゴホゴホと苦しそうに何度か咳をした。

「記子さん。はっきり言いますけど、僕にはどうやって助けてあげたらいいのかわかりません。でも、とにかく盗聴だけはやめた方がいいです。今すぐです。その盗聴器を外しましょう。どこにあるんですか、僕が外してきますから」

すると彼女はまた首を横に振って、力なくこう言った。

「いいえ、もう外しました、先生が来る前に外しました。どうすればいいのかわからなかったのでリビングに置いたままです」

「それならもう今日は終わりにしましょう。盗聴器は僕が捨てておきます。明日の朝また来ますから。体調も良くなさそうですし、今日はもうやめましょう」

そう言って記子さんの腕をとって立ち上がろうとすると、彼女は急に背筋を伸ばして僕

の目を見上げ、しっかりと声で言った。

「先生」

「何ですか？」

「いま私が何を考えているか、わかりますか？」

僕は彼女の目を見た。あの濡れた氷のような瞳が二つ、僕の目のすぐ前で妖しく輝いていた。唇がほんの少しだけ震え、そして小さく開いた。

「私を抱いて下さい」

「え？」

「私を、抱いて下さい」

「――な、何ですか？」

「先生、もう私――」そう言って記子さんは椅子を引いて立ち上がると腰の後ろに手を回し、ホックを外してスカートを床に落とした。

「ち、ちょっと記子さん」

僕があわてて椅子を引いて立ち上がった瞬間、記子さんは僕の目の前で崩れるように倒れた。

*

救急車が来るまでの間に、僕は彼女が脱いだスカートを引きずり上げてホックを留め、ブラウスの一番上のボタンを留めた。それから寝室にあった彼女のハンドバッグから家の鍵を取り出してポケットに入れた。盗聴器のことを思い出してリビングを少し探してみたけれど、それらしいものは見つからなかった。

遠くでサイレンの音がやみ、静かに救急車が近づいてくると、僕は一階に下りて玄関の扉を開けた。担架を持った救急隊員が家に上がって二階から記子さんを下ろして運び出すと、僕は家の中の明かりを消して玄関の扉に鍵を掛け、救急車に乗って一緒に病院へ向かった。

「軽い貧血と脳震盪です。今日は病院に泊まってもらいますが、明日の朝には帰れるでしょう」医師の簡単な説明を聞いたあと、僕は支払いや保険証のことなどをいくつか尋ね、最後に短く礼を言うと言診察室を出た。

薄暗い無機質な部屋の奥で、記子さんは顔を窓の方に向けて寝ていた。近寄ると小さく息をしているのがわかった。向かいのビルの明かりがブラインドの隙間から差し込んで、ベッドの上を縞模様にも照らしていた。僕は小さな声で「記子さん」と呼びかけてみたけれど、記子さんはぴくりとも動かなかった。僕は床の上に転がって動かなくなった彼女の姿を思い出した。

そのときどこかのベッドがギシギシときしむ音が病室の中に響いた。僕は息を止め、その音が止むのをじっと待ってから、そっと病室を出た。

病院の正面出口を出ると表の駐車場にタクシーが一台だけ停まっただけで、白い帽子をかぶった運転手が退屈そうに新聞を読んでいた。僕が近づくとその運転手は新聞をたたみながら後ろのドアを開けてくれた。「ちょっと訳があつて、いまお金がないんです。着いてからでもいいですか」僕がそう尋ねると、運転手は黙って頷いて何も言わずに車を出した。タクシーが家の前に着くと、運転手にしばらく待ってもらうように頼み、僕は急いでタクシーを降りた。家になると、生徒の連絡先を書いた住所録の中から令美のページを探し、自宅の住所と電話番号をメモ用紙に書き写した。もちろんそこには父親の名前はなく、父親の勤務先の住所も電話番号も、令美の通っている学校の名前もなかった。僕はその紙と一緒に財布をポケットに入れると、キッチンで水をコップに一杯飲んで家を出た。

令美の家の少し手前でタクシーを停めると、僕は運転手に多めに運賃を渡して何度も礼を言った。運転手は頷きながら顔色ひとつ変えずにそれを受け取ると、パタンとドアを閉めて静かに走り去った。

家の門は開いたままになっていた。気が動転していたせいで、閉め忘れたのだと思う。玄関の扉に鍵を静かに差し込んで回すと、カタンという音がして鍵が外れた。家へ上がると玄関の電気だけをつけ、リビングのドアを開けたままにして玄関の明かりを頼りに部屋の中をもう一度調べてみた。でもきれいに片付いた部屋の中には盗聴器らしきものはやはり見つからなかった。リビングを出ると二階に上がり、記子さんの寝室の中を探してみた。部屋の明かりをつけ、クローゼットの中やベッドの下、化粧台の引出しの中を調べてみたけれど、盗聴器は見つからなかった。

僕は令美の部屋に置きっぱなしにしていた紅茶のポットとカップを持って一階に下りるとキッチンへ向かった。キッチンの電気をつけたところで、壁に取り付けた電話と電話の真下に茶色い紙袋が置いてあるのが目に入った。紙袋を開けると、中には小さなマイクと、細いケーブルが巻きついた黒いプラスチックのケースが入っていた。僕は紙袋をつかみ上げると、それをキッチンの台の上にあつたまな板の上に置いて、そばにあつた包丁の柄の部分で紙袋の上から力任せに殴りつけた。包丁を振り下ろすたびに、ガリガリとプラスチックが碎ける音がキッチンの中に響いた。紙袋の中で盗聴器の残骸がザラザラと音を立て、破れた紙袋の穴からプラスチックの破片が飛び出すまで、僕は叩き続けた。包丁を置くと、腕が震えているのがわかった。ぼろぼろになった紙袋と散らばった破片をかき集めてビニールのゴミ袋に入れると、まな板を水で流して包丁と一緒に元の場所に戻した。家の電気が全部消えているのを確認してから家を出ると、僕は駅まで早足で歩き、ゴミ袋を駅のゴミ箱に捨て、それからタクシーを拾って真っ直ぐに病院へ戻った。

病院の受付で記子さんの連絡先を記入すると、僕は病室の前の廊下の長椅子にもたれて目を閉じた。深呼吸をするたびに緊張感が次第に解けていくのがわかった。廊下の窓の外には、うつすらと朝の光が見えた。

19



夜がどのくらい深まった頃なのかはまったくわからなかった。ただ朝がまだ遠いという予感だけはあった。

雨は降り続けていた。まわりつくような湿気がわ、を重たくしていた。激しい風も吹いていた。隙間風が小屋の中でぐるぐると渦を巻いて、どこかへ吹き抜けていった。とても冷たい夜だ。

何かの気配が欠けている気がした。イメルの名前を呼んでみたが、返事がなかった。私はわ、をかき分けて起き上がり、イメルが寝ていたあたりまで歩いていった。暗闇の中でつま先が何か軽い物に触れたのを感じた。麦わら帽子だった。麦わら帽子の横にはラジカセが置いてあった。私は嫌な予感がして小屋の扉を開けた。星のおかげで外の方が少しだけ明るく、その光が小屋の入口のあたりを仄かに照らした。小屋の中にイメルの姿はなかった。

麦わら帽子を持って小屋を出ると、雨は思ったよりも激しく降っていた。空を見上げると、大粒の雨が星空から落ちてくるのがはっきりと見えた。奇妙な眺めだった。まるで星が雨になって落ちてきているようだった。私は麦わら帽子をかぶると、それを片手で押さえながら大股で駆け出した。

ハンバーガー屋の屋根が風で飛ばされて遠くに転がっているのが見えた。昨日降ろした看板はどこかへ消えてしまっていて、地面に這っている三本の管のうちの一本が毒を飲んだ蛇のようにのたうちまわっていた。管はあたりに水をびちゃびちゃと撒き散らしていて、雨や水溜りと入り混じって壮絶な景色を演出していた。

何かが終わりに向かっている。

私はそう思った。考えてみれば、色々なものが少しずつ消えてなくなっている。増えたものは何ひとつない。あるとすれば丸太小屋の浴槽に溜まった水くらいのものだが、それも不確かだった。

——これ以上ここにいるわけにはいかない。

直感的に私はそう感じた。

私の足は自然と丸太小屋に向かっていた。

松林を抜けて丸太小屋が見えてくると徐々に走る速さを弱め、ゆっくりと息を整えた。小屋の入口の前に立つと、びしょびしょになった麦わら帽子を脱いで顔を手でぬぐった。扉が少しだけ開いていた。

私は扉に手をかけ、そっと押した。扉はきしみながら奥へ動き、天井に開いた四角い穴が薄明るく浮かんでいるのが見えた。目が慣れてくると、小屋の中にひとつの影が見えた。浴槽の真ん中にイメルが立っていた。

「イメル——」

イメルは私に背中を向けたまま、忠実な彫刻のように立ち尽くしていた。イメルは顔を空に向けて虚空を見つめていた。天井の向こうに雨と星が見えているはずだった。

イメルはその姿勢のまま動かなかった。雨はイメルの顔を打ち続け、満々と水をたたえた浴槽の中に、雨水がぼたぼたと落ちていった。Tシャツのピンク色とスカートの黒が雨に洗われて溶け出し、水の色を変えているように見えた。入口のドアと天井の穴から忍び込んだ星の色が、足元の床と水面に反射して複雑な色を作っていた。その幻想的な色の中で、イメルはただ美しく濡れていた。

私は息を止め、小さく足を踏み出した。その瞬間、イメルがゆっくりとこちらを振り返った。

言葉が出なかった。私の体はそのひとつの生命体を目にして、完全に硬直した。その生命体に触れ、私の体温の全てを預け、ひとつになりたいと思った。それは原始的で、本能的な衝動だった。その衝動は私の体の中からではなく、私の体が、私という存在そのものが発動したものだ。その力の前に、理性や意思などというものは完全に無力だった。

視界の真ん中にイメルの二つの丸い眼球があった。その目は確かに私の目を見ていたが、その視線は私の体を貫いてどこか遠いところに焦点を結んでいるように見えた。そしてその目の奥に私が見出したのは、戸惑いや驚きや怯えではなく、もちろん恥じらいでもなく、私の体を凝縮された漆黒の時間の中に引き込むような未知の力だった。その強引な力の前に私の体はすくみ、あらゆる器官が恍惚とした沈黙に支配された。細胞のひとつひとつがその丸い眼球の意思に従い、生命活動を中断したかのような静けさだった。

私は目をつぶった。雨の音が近くに聞こえた。

「違う」とイメルがささやいた。

気がつくとき、私は浴槽の中でイメルの手をつかんでいた。

「ダメなの」とイメルがささやいた。

私は力を緩めた。

「わかってるでしょ」とイメルがささやいた。

手が冷たくかじかんでいた。

「あたしと、あなたは——」

その先に何か言葉が続いたようだったが、私には聞こえなかった。

「そう」とイメルがささやいた。

私の手が何かに引かれるようにしてイメルの手から離れた。

「だからね、もうこの先はないの」

雨が私の背中を激しく打ちつけていた。手の感覚が完全になくなっていった。

「帰ろう。あたしたちは間違ったんだから」

イメルは繰り返した。

「帰ろうよ。あたしたちは、間違ったんだから」

そのとき、バシヤンという大きな音がしてイメルが水面に叩きつけられるように倒れた。大きな波が立ち、浴槽のあちこちから水が勢いよく溢れ出た。私は水中でイメルの体を抱き起こすと、そのままイメルを担ぎ上げた。水は温かかったが、イメルの体は冷たかった。

そして私がイメルを抱いたまま浴槽を出た瞬間、真後ろでゴオオオというものすごい音がした。驚いて振り返ると、浴槽の水が大きな渦を巻いていた。浴槽の底に大きな穴が開いて、そこから水が流れ出ているように見えた。ほんの数秒で水は消えてしまい、あとには空っぽの冷たい浴槽だけが闇の中に残った。

私は小屋を出ると、そのまま星の光を頼りに南の浜辺に向かって歩いた。霧の立った松林の足をちよろちよろと細い水の線が流れていた。道のところどころに松の枝が落ちていて、それが暗がりですれたニワトリの足のように見えた。

足取りは重たかったが、坂道にも助けられて私は何とか砂浜にたどり着いた。砂浜に踏み入れたところで、イメルが一度だけ「んん」と低くうなった。呼吸をするたびに上下する胸の動きだけが、彼女が生きていることを物語っていた。喉の奥に熱い唾液の塊が流れ落ちていく音と感触が、私の中を通り過ぎた。

——まだ大丈夫だ。

浜辺では雨に濡れて黒く重くなったイカダが我々を待っていた。イカダに近づいたところで、私はイカダの位置が変わっていることに気がついた。イカダが昼間置いた場所よりも五メートルほど手前にあった。

——違う。潮が引いているんだ。

私はイメルをイカダの上にそっと下ろすと、イカダを海へ向けて押した。

イカダは波打ち際の砂を荒くえぐり、海に浮いた。私はイカダを押しながら足がつかなくなる直前まで沖へ向かって歩いてからイカダにつかまった。

海は人の肌のように温かかった。全身の筋肉がゆっくりと海になじみ、弛緩していくのがわかった。このまま海に溶けるようにして消えるのもそう悪くはないなと思った。いっそのことイメルもイカダから降ろしてしまうのもいいなと思った。

イカダはゆっくりと島から離れる方向に流れていた。海全体が大きな流れを作って私た

ちをどこかに運ぼうとしているのかもしれない。

振り返ると島がもうすでにほとんど見えなくなっていた。後戻りできないように雨が壁を作っているように見えた。

島の輪郭が雨霧の中に完全に隠れてしまうと、私はイカダに乗った。乗った振動でイカダが大きく揺れた。イメルが「ううん」と小さくうめいた。私は顔の高さをイメルに合わせ、イメルの顔が見えるように横を向いた。イメルはもう一度「ううん」とうめき、顔をしかめながらゆっくりと瞼を開けた。

「イメル」

「――頭が痛い」

「もう少し寝た方がいい」私はそう言ってイメルの額に手を当てた。

「――ここは？」

「海の上だ」

「イカダ？」

「そう。ちゃんと浮かんでる」

「そっか」とイメルが天に向かって呟いた。「ねえ――」

「いいよ、話さなくても」

「大丈夫」イメルは重そうに体を横に向け、顔を近づけた。「忘れ物したでしょ」

「何？」

「バンズとラジカセ」

「――すまない」

「麦わら帽子も？」

「置いてきた」

「ひどい」

「仕方なかったんだ」

「――そうだね。ごめん」

イメルは口で苦しそうに息をしながら喋った。呼吸と瞬きの回数がいつもの半分くらいに減っていた。

「寝ていいよ」と私は言った。「どこかに着いたらちゃんと起こすから」

「うん。ありがとう」

「でもあまり期待しない方がいいかもしれない」

「ふふ」イメルが小さく笑った。「ねえ」

「何？」

「あたしたちが一番最初に会った場所ってさ、この島じゃない気がする」

「ああ、僕もそう思ってた。どこかで前に会ってる」

「ここよりもっと暗くて、狭くて、管の中みたいな場所」

「そう、そんな気がする。でもうまく思い出せないな。随分昔の話みたいだ」

「そうだね。でもそこではうまくいかなかったんだ、あたしたち」

「そう、うまくいかなかった」

「これからどこへ行くの？」

「海の方こう。たぶんそこでやり直せる」

「ほんとに？」

「本当だよ」

「そう——」

私はイメルの顔を見つめたまま何も言わなかった。イメルが目を開けているのはわかったが、どこで見ているのかはわからなかった。

——私たちは、どこから来たのだろう。

体をひねってもう一度島の方を振り返ろうとしたが、体が思うように動かなかった。

「ねえ」

霧の中から小さな声が聞こえた。

「あたしたち、これでよかったんだよね」

私はイメルの体に手を回し、冷たい体を抱いた。

「そうだよ。これでよかったんだ」と私は言った。

その言葉を聞くと、イメルは口元だけで微笑んで、そして喋らなくなった。

私はイメルの体から手を離すと、ゆっくりと目を閉じた。手のひらに残っていたイメルの感触が、時間とともに私の肢体の隅へと押し流されるように消えていった。

海の色がいつもより薄い気がした。

海の底から、鳥の声が聞こえた。

20



目が覚めると目の前の病室のドアが開いていて、部屋の中から話し声が聞こえた。廊下の明るさから考えると眠ってからそんなに時間は経っていないように思えた。

長椅子から立ち上がってそっと病室の中をうかがうと、窓のそばで記子さんが上着を着ているのが見えた。ドアをノックすると記子さんがこちらを見て、黙って頭を下げた。

僕は彼女に事情を説明した。説明している途中、彼女は小さな声で何度も礼を言い、何度も頭を下げた。最後に盗聴器を処分したことを伝え、彼女に家の鍵を渡した。ハンドバ

ッグを勝手に開けたことも謝っておいた。

退院手続きをして病院を出ると、昨日と同じ場所でタクシーを拾った。僕は昨日覚えた記子さんの家の住所を伝え、それから自分の家の住所を伝えた。タクシーが走り出すと、僕はシートに深く体を預け、目をつぶった。

家に着くと、記子さんは「ありがとうございます」ともう一度礼を言ってからタクシーを降りた。僕が何か言おうとすると「大丈夫ですから」と言って言葉を遮り、深々と頭を下げた。タクシーの中から見るその家は、昨日までと何も変わらないように見えた。

アパートに帰ると、僕は日が暮れるまで眠り続けた。空腹の波が何度か押し寄せたけれど我慢した。嫌な夢をいくつか見たけれど、現実の出来事よりはまだ救いのある内容だった。僕が欲していたのは、思い出すことと考えることからの逃避だった。そのためには寝るしかなかった。

それでも限界はあった。国産車のひょうきんなクラクションの音と、どこかの家の目覚し時計のベルが僕を無理やり覚醒させた。窓の外はもう薄暗く、日曜日のこの時間帯特有のぼたぼたした雑音があちこちから聞こえてくる。僕は部屋の電気をつけて洗面所で顔を洗うと、部屋の真ん中で背伸びをした。蛍光灯に照らされた部屋の中の雰囲気はどこかしらよそよそしく見えた。僕は受話器を上げ、令美の家の電話番号を回す。呼び出し音が鳴り、同じ長さの空白があり、また呼び出し音が鳴った。その間、令美が出た場合と、母親が出た場合と、父親が出た場合の三パターンの台詞を頭に思い浮かべた。それぞれに言いたいことがあった。でも誰も電話に出なかった。僕は受話器を戻し、もう一度受話器を上げてダイヤルを回した。結果は同じだった。

翌日になっても翌々日になっても誰も電話を取らなかった。電話をかけるたびに呼び出し音のサイクルが長くなっている気がしてきた。僕があせっている証拠だ。

水曜日になるとさすがに心配になり、家を訪ねる決心をした。僕は五時からの授業の用意をして三時過ぎに家を出て、いつもの道を歩いて令美の家に向かった。

家の様子は何も変わらないように見えた。表札はちゃんとかかっていたし、カーテン越しに見える部屋の中の様子もいつもと同じだった。インターフォンも鳴った。でも誰かが家にいる気配はない。門にはしっかりと鍵が掛かっていた。僕は少し迷ってから、向かいの家のインターフォンを鳴らした。しばらくすると恰幅のいい主婦が玄関を開けて出てきて「何でしょうか」とぶっきらぼうに尋ねた。

「向かいのお宅のことでしょうかと聞きたいことがあるんですが」と僕は切り出した。

「はい」と主婦は答えた。

「約束があつて来たのですが、誰もいらっしやらないようで」

「ええっと」そう言つて主婦は口をへの字に曲げ、腰に手を当てた。「失礼ですが、あなた

は？」

「ああ、失礼しました」と僕は言った。当然の質問だ。「いまこちらのお宅で家庭教師をしている者です。しばらく連絡が取れなかったのでも来てみたのですが、何かご存知ではないかと思ひまして」

「よくは知りませんが」と主婦は言った。「娘さんが入院されたとかで、たぶん病院にいらつしやるんだと思いますが」

——娘さん？

「私にはそれ以上はちよつとわかりませんけど」

「娘さんですか？ お母さんではなくて？」

「奥さんも何か？」

「あ、いえ。すいませんでした。ありがとうございます」

僕はそう言つて頭を下げると、あわててその場を立ち去つた。角を曲がるまで背中に主婦の視線を感じた。タバコ屋の前の公衆電話で電話帳を繰つて記子さんが入院した病院の電話番号を調べ、その場で電話を掛けた。記子さんの名前を伝えて「面会したいんですが」と言つと、しばらくパソコンをカタカタと打つ音がしたあと、「その方は日曜日の朝に退院しましたが」という返事が返つてきた。それは僕が一番よく知っている。僕は受話器を置いて、とりあえずため息をついた。

その日の授業は、僕が記憶している中で、二時間という時間を最も長く感じた授業だった。生徒の退屈な話や質問が、時間軸を味のなくなったガムのように引き伸ばしている気がした。コーヒーの香りや母親の笑顔さえも億劫に感じた。捨てられるならどぶ川にでも捨ててしまいたいような二時間だった。

駅で電車を降りて真っ直ぐ家に帰ろうとしたとき、僕はふと例の焼き鳥屋の彼女のことを思い出し、家とは反対方向に向かつて歩き始めた。店の前で、地味なはつぴを来た店員二人が熱心に呼び込みをしていた。四人組のサラリーマンがそのうちの一人に話し掛けて何事かを話し始め、しばらくして軽く札を言つて立ち去つた。それから彼は道の向こうに立っている僕を見つけたけれど、望みがないと思つたのか、すぐごと店の中に入つていった。残されたもう一人は肩で小さく息をついてから、手に持っていたチラシの数を数えながら同じように店の中に入つていった。僕は道を渡り、入口の横のメニューを見る振りをして店内を覗いてみた。店内には客はいなかったが、テーブルを拭いている彼女の姿があった。

暖簾をくぐつて店に入ると、さっきの店員が驚いたような顔をしてこちらを見て、あわてて「いらつしやいませ」と言った。僕は誰もいないカウンターに座るとビールを注文した。カウンターの向こうでは腕まくりをした年配の男性が肉を仕込んでいるところだった。少しして、小鉢と冷えたジョッキが運ばれてきた。運んできたのは彼女だった。ガラガラ

と扉が開く音がしたのでそっちを見ると、さっきの二人が店の外に出るところだった。僕は彼女の顔をちらっと見て小さく頭を下げた。彼女も同じような仕草をして店の奥へ下がっていった。

ビールを飲み終わったところで何かが食べたくなり、軟骨とさきみとビールを注文した。料理が出てくるまでの間、僕はカウンターの椅子の小さな背もたれに体を預けてぼうつと天井を見つめた。換気扇に吸い込まれる白い煙が天井近くをもくもくと漂っていた。

二杯目のビールも彼女が運んできた。僕はまた頭を下げ、彼女もまた頭を下げた。彼女が立ち去ると、僕はポケットから財布を出して、どこかでもらったレシートを一枚取り出した。そしてカバンからペンを取り出し、レシートの裏に自宅の電話番号を市外局番から書いた。ビールを飲んでいると、入口の扉が開いて五、六人の大学生風の男女が大声で話しながら入ってきた。店の奥から彼女が出てきて彼らを席に案内している間に、今度は別の店員が僕のところへやってきて料理を置いていった。

僕はため息をついた。軟骨をひとつ口に運び、さきみを箸でつかんだまま左手でビールを飲んだ。軟骨がこりこりと口の中で崩れた。

——令美が入院した？

何がどうなっているのか、さっぱりわからない。母親の次は娘。盗聴器。娘と父親。

「いらっしやいませ」

「二名様ですか？ 奥のテーブル席へどうぞ」

「はい。いまお待ちいたします」

「いらっしやいませ」

僕は席を立った。カウンター越しに勘定を頼むと、彼女が店の奥から出てきてレジの前に立った。

「ありがとうございます」と彼女は言った。僕はお金と一緒にさっきのレシートを黙って彼女に渡す。彼女はもう一度「ありがとうございます」と言って頭を下げた。

店を出ると外はもうすっかり暗くなっていた。

アパートの前で鍵を取り出そうとしたとき、部屋の中で電話が鳴っているのが聞こえた。僕はあわてて鍵を差し込み、飛び込むようにして部屋に上がって受話器を取った。

「もしもし」

「こんにちは」と誰かが言った。「さっきはありがとうございます。いま大丈夫ですか？」

「ええ」と僕は言った。

「声を掛けようと思ったんですけど、やっぱりお店の中だとちょっと」

「そうですよね」

「今日はあまり元気がなさそうでしたけど。私の気のせいですか？」

「一人でビールを飲んだと元気がないように見えるときがあるんじゃないかな。人にもよるんじゃないけど」

「そうかもしれませんね。すみません」

僕にはどうして彼女が謝ったのかわからなかった。

「仕事は？」と僕は聞いてみた。

「休憩中なんです。何をしてるんですか？」と彼女が逆に質問した。

「ため息ばかりついてた」と僕は答えた。彼女はくすくすところばそうに笑った。

「おもしろくないですね」と彼女が言った。

「おもしろくないね。本当なんですけど」と僕は言った。

「でも、何となく話したくなる雰囲気がありますよね」

「僕と？」

「そうです」

「そうかな」

「いいことですよ、それは」

「そうだといいけど」僕はそう言って左手に受話器を持ち替え、冷蔵庫の扉を開ける。「何もないんだ」

「何がですか？」

「冷蔵庫の中。ビールしかない」

「じゃあビールを飲むしかないですね」

「そうなんだよ。またそれが問題だね」

「さっき飲んだからですか？」

「それもあるし——あ、いや、それだけかな問題は」

「じゃあ飲んでもいいんじゃないですか？」

「どうして？」

「何となく。今日は飲みたい気分だったんですよ」

「そうだけど」

「ビールは好きですか？」

「好きだよ」

「私も好きです。でもあんまりたくさんは飲みません。すぐ気持ち悪くなるんです」

「僕はウィスキーを飲むとすぐ気分が悪くなる」

「私もダメです」

「どうしてあんなまずいもの飲めるんだろうね」

「さあ、なんででしょうね」そう言って彼女は何か難しい数学の定理について考えているような長い間を置いてから言った。「今度、会えませんか？」

「僕と？」

「はい」

「いいけど、どうして？」

「さっき言いました」

僕は彼女が言ったことを順番にさかのぼって思い出してみたけれど、うまくいかなかった。

「いいよ」と僕は言った。「でも悪いんだけど、また電話してくれるかな。今日はもう寝たいんだ」

「わかりました」

「それじゃあ、悪いけど」

「おやすみなさい」

「うん。仕事がんばってね」

「ありがとうございます」

受話器を置くと、体が少し楽になった気がした。部屋の空気も昨日までよりも少し軽くなったように感じる。僕は缶ビールを開けて一気に飲むと、床に仰向けに寝転がった。ビールが胃の中にごろごろと流れ込むのがわかった。

僕は彼女の顔を思い浮かべてみた。そして彼女が彼女の父親と寝ているところを想像してみた。でも父親の姿が想像できなかった。父親の顔は、検閲の末に墨で塗りつぶされた活字みたいに真っ黒だった。

体の中がじわっと温かくなるのを感じた。鼓動のひとつひとつが体の隅まで伝わるのがわかった。

そしてもう一度電話が鳴った。

「もしもし」

返事がない。

「もしもし」僕はもう一度言った。

「先生？」

「——令美ちゃん？」

「はい。すいません、連絡できなくて」

「いいけど、心配したよ。誰も電話にでないから。今日は家まで行ったんだ。向かいの人に怪しまれた。何も知らないって言われたよ」

僕は嘘を言った。

令美は何も言わなかった。

「どうしたの？」

「先生」

「何？」

「私、流産したんです」

——流産？

「いま病院にいます。まだしばらくはここにいます。パパとママがずっといてくれて安心なんですけど、何か見張られてるみたいで。いまもこっそり電話してるんです。友達や先生にも黙っておくようにって言われてるから。でも先生には言っておきたくて」

——流産？

「ねえ、先生、聞いてます？」

「聞いてるよ」

「先生、今から来てもらえませんか？」

「病院に？」

「はい。今日の夜はパパがどうしても抜けられない仕事があるみたいで、ママも九時に一回家に戻るから、その隙に。そうでもないとしばらく会えない気がするんです」

「わかった」

「昨日まで泣き続けてたからひどい顔してますけど、びっくりしないで下さいね」

「大丈夫だよ」

「あと、ひとつだけ約束をして下さい」

「何？」

「相手が誰かっていう質問はなし」

「——わかった」

「先生じゃないことだけは確かですけど」そう言って令美は小さく笑った。「九時少し過ぎに来て下さい。遅刻しないで下さい」

「了解」

僕は病院の名前と病室の番号を聞いて電話を切ると、焼き鳥屋の臭いのついた服を脱ぎ、クローゼットからなるべく目立たない色の服を選んで着た。ジーパンもできるだけいいものを選んだ。

アパートを出て駅まで歩き、駅前のロータリーでタクシーの運転手をつかまえると、病院の名前を告げ、どのくらい時間がかかるかを聞いてみた。「この時間なら十五分で着くだろうね。でもあそこの面会時間はもう過ぎてるよ」という返事が返ってきた。

病院の駐車場でタクシーを降り、僕は正面入口の扉の前に立ってガラス越しに中を覗いた。待合室の時計は九時五分を指していた。その扉の前を通り過ぎて病院の裏にまわると、

小さな片開きの非常用扉から病院の中に入った。

非常階段で三階まで上がると、僕は令美の病室を探した。廊下はしんとしていて、廊下には自分以外に誰もいないのがはっきりとわかる。エレベーターがグウンという低い音を立てて壁の向こうを昇り降りするのが聞こえた。

病室の前で立ち止まると、部屋の中でパサパサとスリッパをひきずるような音がした。誰かがドアに向かって歩いてくる気配がしたかと思うと、カチャツと音がしてドアが開いた。令美だった。

「こんばんは」と令美が言った。暗くて顔色まではわからなかったけれど、表情は明るい。

「大丈夫なの？ 歩いて」

「はい。安静にとは言われてますけど」そう言いながら令美はドアをいっぱいまで開け、小声で「個室だから大丈夫です。入って下さい」とささやいた。僕は廊下の左右をちらつと見てから部屋に入った。

「先生、元気でした？」と令美がドアを閉めながら言った。僕は病室の中を見渡しながら、

「うん、まあまあだね」と呟いた。

「ママ、さっき行ったばかりだから、一時間は帰って来ないと思います」

「見つかったら怒られるだろうね」

「かなりまずいと思います」

「そうだね」

僕はそう言って窓際に置いてある丸椅子に座った。令美はベッドに戻り、ベッドの真ん中に座って薄い布団を足の上にかけた。窓がほんの少しだけ開いている。

「寒くないの？」

「大丈夫です。ずっと寝てるから体がぼうつとしてて。ちょっと暑いくらい」令美はそう言って手のひらで顔をばたばたと扇いだ。

「元気そうに見えるけど」

「昨日までは死んだみたいにぐたつとしてたんですよ。何もやる気がしなくて」

「いつからここに？」

「日曜日の夜からです」

「そうか。それじゃあ連絡がつかないはずだ」

「すいません」

「いいんだよ、そんなの。令美ちゃんが元気ならいいんだ」

「元気ですよ、このとおり。手術の経過を見ないといけないからまだしばらくここにいますけど。あ、でも手術っていつても、そんなに大袈裟なものじゃないみたいです。何をしたのかよく覚えてないし。でも問題なのはとにかく暇なことです。学校の方がまだ少しはましかなって思うくらい暇」令美はそう言って肩をすくめた。

僕は薄闇の中で、令美の話し方や仕草や表情の作り方を観察した。どれもいつもの令美

と変わらないように見えた。

「染色体の数が足りなかったらしいです」

「数？」

「四十六ないといけないらしいんです、染色体って。でもそれはよくあることだし、また妊娠はできるから大丈夫だって説明されました」

「そうか——」

僕が返事に困ってそう呟くと、令美は僕から目を逸らすようにちらっと窓の方を見た。

横顔の前半分が窓から入ってくる光にほんのりと照らされていた。

「もちろん辛いんですよ」と令美は言った。「でもそれよりは驚きと無力感が強烈すぎました。だって、私の体の中に私の知らないうちにもうひとつの宇宙ができて、それがまた私の知らないうちに壊れちゃうんですよ。そういうの、不思議だって思うしかないじゃないですか」

「妊娠してるの、気づかなかったの？」

「はい、全然。もし知ってたらまた気持ちは違ったのかもしれませんが。とにかくいまは、ああ自分は自分の体のことなんて何もわかってないんだなっていう無力感でいっぱい」

「無力感か」

「そう。不思議な無力感」

令美はそう言って布団を少しだけ引き上げた。カサカサという音が暗い部屋の中に響いた。

「ねえ先生、前にインド象の親子の話をしてくれたでしょう？」

「うん」

「そのママって、ギルバート・グレイプのママくらい大きかったですか？」

「まさか。あの半分くらいじゃないかな。どうして？」

「ううん、何でもありません。ただ聞いてみたかっただけ」

「でもやっぱり実物の方が迫力があるよ、スクリーンより。たとえ半分だったとしてもさ」僕がそう付け足すと、令美がまた小声で笑った。

「ねえ先生」

「何？」

「私のこと、どこかの生徒さんに『こんな子がいたんだ』って、話したりします？」

「しないよ。絶対にしない」と僕は言った。

「絶対？」

「絶対しない。言うわけじゃないか」

「選手生命に関わるから？」

「そう。それにね、もう家庭教師を辞めようかと思ってるんだ」と僕は窓を見ながら言った。

「私のせいですか？」

「いや、そうじゃないんだ。でも令美ちゃんで最後にしようかなって思うんだ。いま教えてるところには母親が倒れたから実家に帰るって言って辞めようと思ってる。理由はこれとってないけど、いつまでも続けられる仕事じゃないなとはずっと思ってたから」

「そっか」と令美は残念そうに言った。「でも何か私が言うのも変ですけど、先生、いい先生でしたよ。服のセンスはいまいちだけど、音楽と映画のセンスはいいし。顔もまあまあいいし」

「ありがとう。でもあんまり言われたことないな」

「ほんとですか？」

「あ、でもこの間言われたな」

「誰にですか？」

「女の子」

「彼女？」

「彼女じゃない。電話番号しか知らない」

「ふうん。先生にも色々あるんですね」

「まあね」僕はそう言って窓の方に二、三步近づいた。窓の隙間から鳥が鳴く声が聞こえたような気がした。

「ねえ先生」

「何？」

「相手が誰か、知りたいですか？」

「知りたくない」

「どうして？」

「きっとその人のことを殺したくなるほど恨むから」

「どうしてですか？」

「令美ちゃんのが好きだから。だから言わないでいいよ」

令美が暗闇の中で泣いていた。

体が熱く震えているのを感じた。でも僕にはもう何もしてあげられることはなかった。

「それじゃあ——そろそろ帰らないと。お母さんに見つかったら大変だから」

「はい」そう呟いた令美の声は、病室の白い壁に小さく響いたあとで空中に消えた。

「元気になったら絶対に連絡してよ。まだ話していいことがたくさんあるし、それに――」

――

そのとき病院の駐車場にボタンと車のドアを閉める鈍い音が響き渡った。窓の外を風が横切り、木の葉がさらさらと揺れた。僕は窓を閉め、鍵を掛けた。

「元気でね。お大事に」と僕は言った。

「ありがとうございます」と令美が言った。

「さようなら」

その最後の一言を言ったとき、僕は二度と彼女に会えないような気がした。そして彼女の母親にも、父親にも。

「さようなら、先生」と令美が言った。

*

一週間後、記子さんから手紙が届いた。夫の仕事の都合で急に家を移ることになったとそこには書かれていた。連絡が遅くなったことを心からお詫びするというような一言も添えてあった。それから無断で授業を休んだ分の支払いをしたいから受け取って欲しいとも書いてあった。短くて的確な文面だった。文字も神経質なくらい整っていた。僕は手紙を封筒に戻しながら、封筒に切手が貼られていないことに気がついた。誰かが直接届けに来たのだろうか。

翌日、僕の銀行口座に三十万円が振り込まれていた。振り込み主はムカサノリコとなっていた。僕はそれを全額母親の銀行口座に振り込み、すぐに母親に電話をして、「大学のときに借りたお金を返すから」と言った。母親は「何に使ったんだっけ？」と不思議がったけれど、それは僕も覚えていなかった。ただ僕はその金を手元に残したくなかったただけなのだ。

それから二、三日のうちに僕は仕事の後釜を見つけ、すぐに生徒の家をまわって挨拶をした。母親が出てきて「残念だわ」と繰り返し返す家もあれば、子供が泣き出す家もあった。財布からお金を出して渡そうとする母親もいた。僕はそれを丁寧に断り、子供には「僕よりいい先生だから」と同じ言葉をかけた。もちろん彼には会ったこともなかった。

最後の訪問が終わって家に戻ると母親に電話をして、しばらく旅に出ることを伝えた。「場所はまだ決めてないけど、どこかに紅葉を見に行くんだ」と僕は言った。

いらなくなった教科書や参考書やノートをまとめて処分したせいで、部屋の中はこれまで見たこともないくらいすっきりとしていた。机の上には目覚まし時計とメモ帳があるだけで、大きな組み立て式の棚の中は、真ん中の二つ以外はがらんとしていた。まるで今から引越しを始める部屋のような眺めだった。僕はその部屋でゆっくりと旅の準備をしながら、二、三日をぼうつと過ごした。

旅に出る前日の夜になって、彼女に連絡をしていないことを思い出した。僕は思いっきり限りの場所を調べてみたけれど、電話番号の書かれたレシートはどこにも見当たらなかった。荷物を整理したときにどこかに紛れ込んでしまったのかもしれないし、もしかしたら

間違って捨ててしまったのかもしれない。でもそれももうどうでもよかった。

僕はベッドの上に転がっている旅行ガイドの表紙を見ながら小さくため息をついた。
季節はもう秋の終わりだった。

了

(次のページもお読み下さい)

このたびは『宇宙の缶詰／真鍋 敢』をご購読いただき
誠にありがとうございました。

ホームページにて感想・コメントを承っておりますので、
お時間がありましたらご協力をいただきますようお願い致します。

<http://www.kanmanabe.com/>

2006年8月1日 真鍋 敢